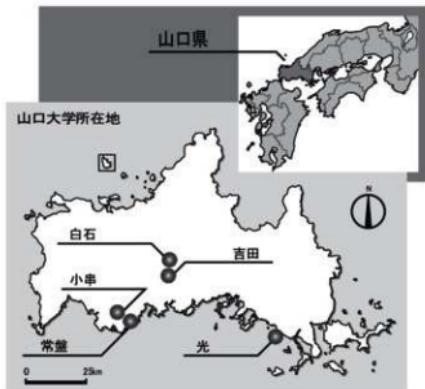


# 山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成22年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報  
平成22年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2014

山口大学埋蔵文化財資料館



## 序

山口大学埋蔵文化財資料館は、吉田構内をはじめ小串・常盤・白石・光地区に所在する山口大学構内遺跡における埋蔵文化財の発掘・保護を基幹業務としています。同時に、学術資料の管理と発信を主要業務とする大学情報機構所属の一組織として、これら埋蔵文化財の調査成果や学術的価値を広く社会に告知するため、資料展示や広報誌発行、社会教育活動など、情報発信活動にも積極的に取り組んでおります。

さて、2010(平成22)年度は、本学中期計画の新たな開始年となります。埋蔵文化財保護業務に関しては、予備発掘調査4件、立会調査14件を各構内で実施し、主として吉田構内、小串構内にて埋蔵文化財に関する新たな知見を得るに至りました。その他の取り組みとして、新たに「山口県大学博物館連携事業」「館蔵資料調査研究報告書刊行事業」を開始しました。前者は梅光学院大学博物館との連携事業、後者は当館に所蔵される多くの県内遺跡出土品の調査研究事業となります。いずれも長期的な事業の第一歩となりますが、今後の展開にご期待いただきたいと思います。

本書には、当館が同年に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、館員の研究活動を収録しております。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願います。

当館は、埋蔵文化財保護体制をはじめ、遺物の整理・保管場所の不足が年々深刻化するなど多くの課題を抱えていますが、学術研究・教育の場として、今後ともこうした課題に全力を尽くして取り組む所存です。これまで当館の調査・研究活動にご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

山内 直樹



## 例言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」と呼称)が平成22年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畠直彦(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教)・横山成己(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教)・松浦暢昌(事務局情報環境部学術情報課教務補佐員※当時)が担当した。  
また、現地での調査に際しては、新光産業株式会社、有限会社久富工務店、有限会社芳西工務店に協力を依頼した。
3. 出土資料の整理は、平成22年度から平成25年度にかけて、資料館員である田畠・横山・乃美友香(事務局情報環境部学術情報課事務補佐員)・松浦が担当した。
4. 発掘調査における現地での実測は田畠・横山・松浦が、写真撮影は田畠・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を田畠・横山・川島尚宗(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教※平成25年11月1日より)が行った。製図・整図は田畠・横山・川島・松浦・乃美が行った。
5. 発掘調査に伴う事務は、事務局情報環境部学術情報課総務係が統括した。
6. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
7. 本文の執筆分担は目次に記した。
8. 本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

## 凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、いずれもが文化財保護法(法律第214号)で示される「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置する。各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡 白石構内～白石遺跡 小串構内～山口大学医学部構内遺跡  
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡 光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2. 吉山構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土地標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方間に区分した、構内地図割のA～24区南西隅を起点(構内座標x=0, y=0)とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第III系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

3. 平成22年度に実施した予備発掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。  
吉田構内教育学部研究実験棟B棟改修工事に伴う予備発掘調査……………YD2010-1  
吉山構内音楽サークル棟新営工事に伴う予備発掘調査……………YD2010-2  
小串構内医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事に伴う予備発掘調査…………KG2010-1  
小串構内地域医療教育研修センター新営工事に伴う予備発掘調査…………KG2010-2

4. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

堅穴住居……SB	掘立柱建物……SH	土壙……SK
構……SD	柱穴・ピット……Pit・SP	落ち込み……SX

5. 本書で使用した方位は、吉田構内では国土地標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

6. 標高数値は海拔標高を示す。

7. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

8. 遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器  
断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

## 本文目次

第1章 平成22年度山口大学構内遺跡の調査	
第1節 平成22年度に実施した遺跡調査の概要	(横山) ..... 1
第2節 吉山構内(吉山遺跡)の調査	
1 教育学部研究実験棟B棟改修に伴う予備発掘調査・立会調査	(田畠) ..... 5
2 音楽サークル棟新設工事に伴う予備発掘調査・立会調査	(田畠) ..... 15
3 教育学部研究実験棟G棟改修工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 18
4 吉山寮改修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 19
5 基幹整備(鉄鉄管改修)工事に伴う立会調査	(横山) ..... 20
6 基幹環境整備(第1体育館周辺排水整備)工事に伴う立会調査	(横山) ..... 21
7 事務局2号館車寄せ取扱工事に伴う立会調査	(横山) ..... 22
8 里山遊歩道手摺り取扱工事に伴う立会調査	(横山) ..... 23
9 人文駐輪場外灯設置工事に伴う立会調査	(横山) ..... 24
10 教育学部附属特別支援学校雨水排水補修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 25
11 農学部附属農場果樹園側溝新設工事に伴う立会調査	(横山) ..... 26
第3節 白石構内(山口大学白石構内遺跡)の調査	
1 教育学部附属山口小学校渡り廊下設置工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 29
第4節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査	
1 医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事に伴う	
予備発掘調査・立会調査	(横山) ..... 30
2 医学部地域医療教育研修センター新設工事に伴う予備発掘調査	(横山) ..... 43
第5節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査	
1 教育学部附属光中学校防球ネット設備工事に伴う立会調査	(横山) ..... 59
付節1 平成22年度 山口大学構内遺跡調査要項	..... 60
付節2 山口大学構内の主な調査	..... 63
第2章 平成22年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	(横山) ..... 86
第1節 資料館における展示・公開活動	
1 第30回企画展『高杯～盛る器～』を開催	(横山) ..... 87
2 学内連携企画展『学術資料写真展 MANABU's Eyes Vol.1 Relics 光と影で蘇る古代のデザイン』を開催	(横山) ..... 88
3 大学情報機構連携企画展『資料に刻まれた記憶～文字・記号・印から読み解く～』を開催	(横山) ..... 89
4 大学博物館連携第1弾『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』を開催	(横山) ..... 90
5 平成22年度刊行物	(横山) ..... 93
第2節 資料館における社会教育活動	
1 第10回公開授業『古代人の知恵に挑戦！～古代のお米をつくってみよう～』を開催	(田畠) ..... 94
2 『野焼き体験ワークショップ』を開催	(横山) ..... 97
付篇 周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の 上 器編年をめぐる研究史と今後の課題	(田畠) ..... 100

## 挿図目次

第1章第1節 平成22年度に実施した遺跡調査の概要	30
図1 山口大学吉田・白石構内位置図	2
図2 小串・常盤構内位置図	4
図3 光構内位置図	4
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査	
図4 調査区位置図	5
図5 調査区詳細図	6
図6 A調査区平面図・断面図	7
図7 B調査区平面図・断面図	7
図8 B調査区平面図・断面図	8
図9 D調査区平面図・断面図	8
図10 出土遺物実測図	12
図11 調査区位置図	15
図12 A調査区平面図・断面図	16
図13 B調査区平面図・断面図	16
図14 調査区位置図	18
図15 調査区位置図	19
図16 調査区位置図	20
図17 B地点土層断面柱状図	20
図18 調査区位置図	21
図19 土層断面柱状図	21
図20 調査区位置図	22
図21 土層断面柱状図	22
図22 調査区位置図	23
図23 調査区位置図	24
図24 土層断面柱状図	24
図25 調査区位置図	25
図26 土層断面柱状図	25
図27 調査区位置図	26
図28 調査区平面図	28
図29 上層断面柱状図	28
第1章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査	
図30 調査区位置図	29
第1章第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	
図31 調査区位置図	31
図32 調査区詳細位置図	31
図33 調査区平面図・断面図	33
図34 遺物実測図	37
図35 調査区詳細位置図	40
図36 A～C調査区北西壁土層断面図	41
図37 調査区位置図	43
図38 調査区詳細位置図	44
図39 調査区平面図・断面図	45・46
図40 第3層出土土器・土製品 ・石器・金属器実測図	51
図41 第4-1～3層出土土器実測図	51
図42 第4-3層出土土器実測図	52
図43 第4-4層出土土器実測図	53
第1章第5節 先構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査	
図44 調査区位置図	59
図45 土層断面柱状図	59
第1章付録2 山口大学の主な調査	
図46 山口大学吉田構内地区割および主な 調査区位置図	79・80
図47 山口大学白石構内（幼稚園・小学校） 調査区位置図	81
図48 山口大学白石構内（中学校） 調査区位置図	82
図49 山口大学小串構内調査区位置図	83
図50 山口大学常盤構内調査区位置図	84
図51 山口大学光構内調査区位置図	85
付録 福井・長門における弥生時代前葉から吉墳時代前葉前半の 土器編年をめぐる研究史と今後の課題	
図52 『島田川』による編年	101
図53 『日本の考古学Ⅲ』による編年	103
図54 綾羅木式土器の編年	104
図55 井上山遺跡出土土器	106
図56 「柳井田式」の並	113

## 写真目次

第1章第1節 平成21年度に実施した遺跡調査の概要	2
---------------------------	---

写真1 吉田構内航空写真

写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）		
航空写真	2	
写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）		
航空写真	2	
写真4 小出構内航空写真	4	
写真5 常盤構内航空写真	4	
写真6 光橋内航空写真	4	
<b>第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査</b>		
写真7 A・B調査区調査前全景	5	
写真8 C調査区調査前全景	5	
写真9 A調査区西壁上層断面	7	
写真10 B調査区西壁十層断面	9	
写真11 C調査区全景	9	
写真12 C調査区東壁十層断面	9	
写真13 C調査区北壁土層断面	9	
写真14 C調査区西壁十層断面	9	
写真15 C調査区東壁土層断面	9	
写真16 D調査区全景	9	
写真17 D調査区東壁	9	
写真18 I 地点上層断面	11	
写真19 L 地点七層断面	11	
写真20 M 地点上層断面	11	
写真21 N 地点十層断面	11	
写真22 S 地点土層断面	11	
写真23 U 地点十層断面	11	
写真24 V 地点土層断面	11	
写真25 W 地点上層断面	11	
写真26 出土遺物①	12	
写真27 山上遺物②	13	
写真28 調査前全景	15	
写真29 A調査区全景	17	
写真30 B調査区全景	17	
写真31 B調査区南壁土層断面	17	
写真32 C 地点十層断面	17	
写真33 C 地点土層断面	18	
写真34 D 地点十層断面	18	
写真35 A 地点土層断面	19	
写真36 B 地点上層断面	19	
写真37 B 地点土層断面	20	
写真38 土層断面	21	
写真39 C 地点東壁上層断面	22	
写真40 工事の模様	23	
写真41 B 地点土層断面	23	
写真42 土層断面	24	
写真43 土層断面	25	
写真44 遺構検出状況	26	
写真45 調査区全景	26	
写真46 ポイントA上層断面	28	
写真47 ポイントH土層断面	28	
<b>第1章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査</b>		
写真48 調査区全景	29	
<b>第1章第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査</b>		
写真49 昭和58年頃の小出構内東部	30	
写真50 調査前近景	34	
写真51 地山検出状況	34	
写真52 作業風景	34	
写真53 北西－南東トレーンチ第3-1層検出状況	34	
写真54 北東－南西トレーンチ第3-1層検出状況	34	
写真55 北東－南西トレーンチ第4層検出状況	34	
写真56 第4層遺物出土状況	35	
写真57 北東－南西トレーンチ北西壁土層断面	35	
写真58 北西－南東トレーンチ南西壁土層断面	35	
写真59 調査区北端部岩盤露出状況	35	
写真60 調査終了状況	35	
写真61 出土遺物①	37	
写真62 山上遺物②	38	
写真63 A調査区北西壁十層断面	41	
写真64 B調査区北西壁上層断面	41	
写真65 C調査区北西壁十層断面	41	
写真66 調査地遠景	41	
写真67 調査前遠景	43	
写真68 調査前近景	43	
写真69 第2層検出状況	48	
写真70 第3-1層検出状況	48	
写真71 畦畔検出状況	48	
写真72 S D 1検出状況	48	

写真73 S D 1 完掘状況	48	写真94 シンポジウムの模様	92
写真74 第3-2層削削風景	48	写真95 平成22年度埋蔵文化財資料館刊行物	93
写真75 第4-1層検出状況	49	第2章第2節 資料館における社会教育活動	
写真76 第4-3層遺物出土状況	49	写真96 副館長挨拶（6月19日）	95
写真77 第4-3層削出し状況	49	写真97 繩ない（6月19日）	95
写真78 削削終了状況	49	写真98 苗の説明（6月19日）	95
写真79 北東-南東壁上層断面	49	写真99 田植え（6月19日）	95
写真80 南東壁土層断面	49	写真100 稲の説明（8月7日）	95
写真81 山上遺物①	53	写真101 上器づくりの説明（8月7日）	95
写真82 出土遺物②	54	写真102 土器づくり（8月7日）	95
写真83 山上遺物③点	55	写真103 稲の状況（9月1日）	95
写真84 出土遺物④点	56	写真104 泥窯づくり（10月10日）	96
第1章第5節 先構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査		写真105 焼成した上器（10月11日）	96
写真85 七層断面	59	写真106 稲の説明（10月31日）	96
第2章第1節 資料館における展示公開活動		写真107 稲摘具による収穫（10月10日）	96
写真86 第30回企画展ポスター	87	写真108 はぜ架け（10月10日）	96
写真87 展示の模様	87	写真109 脱穀・初入り（10月10日）	96
写真88 展示ポスター	88	写真110 鮎を串に刺す（10月30日）	96
写真89 展示の模様	88	写真111 食事風景（10月30日）	96
写真90 展示ポスター	89	写真112 「粘土制作セミナー」の模様	97
写真91 展示の模様	89	写真113 「野焼き体験ワークショップ」の模様	98
写真92 大学博物館連携事業の模様	91	写真114 「作品展・写真展」の模様	99
写真93 シンポジウムポスター	92		

## 表目次

第1章第1節 平成21年度に実施した遺跡調査の概要		第1章付第2 山口大学の主な調査	
表1 平成22年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1	表7 山口大学構内の土な調査一覧表	63
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査		第2章 山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	
表2 出土遺物（土器）観察表	13	表8 埋蔵文化財資料館利用者の推移	86
第1章第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		表9 平成22年度月別入館者数	86
表3 出土遺物（土器）観察表	39	付録 地下鉄・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の 土器編年をめぐる研究と今後の課題	
表4 山上遺物（金属器）視察表	39	表10 『高地性集落跡の研究』による編年	106
表5 出土遺物（土器）観察表	57・58	表11 『山口県の考古学』による編年	110
表6 山上遺物（土製品・石器・金属器）観察表	58	表12 編年表	132

# 第1章 平成22年度山口大学構内遺跡の調査

## 第1節 平成22年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市(吉田・白石構内)、宇部市(小串・常盤構内)、光市(光構内)の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概観すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である古田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡内・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散在地である御手洗遺跡と月符山遺跡内にまたがって位置している。

このような環境の下、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財を保護・調査・研究・活用する施設として、昭和53年に職員が配置されて以来、その責務を担い続いている。当館の平成22年度時の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内に位置する地方公共団体(山口県および各市)の指導により、埋蔵文化財保護の立場から本発掘・予備発掘・立会の3種の方法で調査を厳密に行っている。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設(職員宿舎等)敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して、出来る限り工事掘削時に資料館員が確認調査を行っている。これらの調査に対する当館の平成22年度の職員配置は、専任教員2名と教務補佐員1名、事務補佐員1名である。

上記の調査の結果で埋蔵文化財が確認された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において、遺跡のさらなる現状変更を避けるべく、工事計画、工事設計の変更等で現状保存が可能であるかどうか

表1 平成22年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	本書掲載頁
予備発掘	教育学部研究実験棟B棟改修工事	吉田	H・I・J-18・19	20	7月20日～7月28日	5～14
	音楽サークル棟新営工事	吉田	G-14	12	12月20日～12月24日	15～17
	医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事	小串		125	5月10日～6月1日	30～42
	地域医療教育研修センター新営工事	小串		156	1月11日～2月14日	43～58
立会	教育学部研究実験棟B棟改修工事	吉田	H・I・J-18・19	60	1月28日～3月7日	5～14
	教育学部研究実験棟B棟改修工事	吉田	G-18	22	5月6・11日	18
	音楽サークル棟新営工事	吉田	G-14	1.5	2月4日	15～17
	吉田寮改修工事	吉田	L・M-9	1,820	7月27日 10月5日	19
	基幹整備(鉄鉢管改修)工事	吉田	Q-18	13.6	2月1日	20
	基幹整備(1体育館河川排水整備)工事	吉田	G-13	8	8月8日	21
	事務局2号館車寄せ取扱工事	吉田	L-14	3.6	9月1日	22
	里山歩道手摺り取扱工事	吉田	N・O-14	15.2	8月30日	23
	人文学部駐輪場外灯設置工事	吉田	M-22	13.6	3月16日	24
	教育学部附属特別支援学校内雨水排水修理工事	吉田	C・D-21	18	8月9日	25
	農学部附属農場果樹園側溝新設工事	吉田	R-S-19	10	3月14日	26～28
	教育学部附属山口小学校渡り廊下設置工事	白石		12	3月7日	29
	医学部立体駐車場新営工事	小串		27	6月22日 9月6日	30～42
	教育学部附属光中学校防球ネット設備工事	光		1	8月19日	59

#### 平成20年度に実施した道路調査の概要

について厳密な協議を行い、保存方法を選定している。また、調査成果については地方公共団体への報告後、内業整理等を経て可能な限り迅速に発掘調査概報(本書)を刊行している。

上記の調査体制の下、平成20年度に当館が実施した大学構内における埋蔵文化財の調査は、前頁表の通り、予備発掘調査4件、立会調査14件の計18件であった。

#### 吉田構内 (本部、人文・教育・経済・理・農の各学部; 山口市吉田1677-1、教育学部附属幼稚園・小学校: 同吉田3003所在)

例年同様、平成22年度の埋蔵文化財調査も吉田構内に集中し、その件数は予備発掘調査2件、立会調査11件を数える。教育学部研究実験棟B棟改修工事に伴う予備発掘調査では、外灯設置工事が予定される4箇所について調査を実施した。いずれも狭小な調査区であったが、C棟南側に設定したC調査区において落ち込み1基とピット1基、溝1条を検出し、堆積土中より弥生時代中期の土器の出土を見た。構内西部、第2武道場西に計画された音楽サークル棟新設工事に伴う予備発掘調査では遺物包含



写真1 吉田構内航空写真（南東から）



写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）  
航空写真（東から）



写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）  
航空写真（南から）



図1 山口大学吉田・白石構内位置図

層と見られる堆積層や河川、落ち込みと見られる堆積層を確認した他は顕著な埋蔵文化財は確認されなかつた。立会調査では、農学部解剖実習棟北側にて実施した農学部附属農場果樹園側溝新設工事に伴う立会調査において、上塙5基、ピット3基、溝3条を検出した。調査地点東方で平成20年度調査にて確認された中世集落跡の延長部と推定される。その他、教育学部研究実験棟G棟改修工事に伴う立会調査や事務局2号館車寄せ取設工事に伴う立会調査などにおいてピット等の遺構を、他にも構内複数箇所で遺物包含層や河川を確認している。

**白石構内**（教育学部附属山口幼稚園：山口市白石三丁目1-2、同山口小学校：白石三丁目1-1、同山口中学校：白石一丁目9-1所在）

立会調査1件を実施した。教育学部附属山口小学校渡り廊下設置工事に伴う立会調査では、顕著な埋蔵文化財は確認できなかつた。

**小串構内**（医学部、同付附属病院：半端市南小串1丁目1-1）

予備発掘調査2件、立会調査1件を実施した。医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事に伴う予備発掘調査は、旧浜海部に立地する構内で唯一丘陵地に該当する北西端部での初の発掘調査であり、遺構の検出が期待されたが、丘陵は過去に大規模に削平を受けていることが判明した。その状況から見て構内に延びる丘陵全体が削平されているものと推定される。丘陵縁辺部の堆積層からは土師器、瓦質土器、陶器、磁器などが出土している。構内東端部にて実施した医学部地域医療教育研修センター新営工事に伴う予備発掘調査では、绳文土器、弥生土器、古墳時代から古代にかけての土師器、須恵器、近世の土師器、陶器、土製品など多様な遺物の出土を見た。特に第4層出土土器類の遺存状態が良好であり、近隣地に複合遺跡が存在する可能性を高める成果となつた。立会調査では医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事に伴う予備発掘調査にて確認された層序がさらに南西まで確認されることが判明した。

**常盤構内**（江半館：宇都宮市常盤台2丁目16-1、尾山宿舎：岡上野中町2668-3所在）

土地の掘削を伴う工事計画は立案されなかつた。

**光構内**（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市室賀8丁目1番1号）

立会調査1件を実施した。教育学部附属光中学校防球ネット設備工事に伴う立会調査では、遺物包含層と見られる黒色砂質土を確認した。光中学校体育館周辺は多量の遺物を含む遺物包含層が濃密に分布する地域であるが、現在の海岸線付近まで分布する可能性が高まつた。

平成22年度は調査数こそ古田構内が突出していたが、調査規模がいずれも狭小であったため、遺跡の性格を再考するほどの調査成果は得られていない。一方で小串構内では調査件数は少ないものの一定規模で調査を実施したため、複数の新知見を得るに至つている。他の構内では工事計画が少なく、埋蔵文化財に大きな支障は生じなかつた。

平成22年度に実施した道路調査の概要



図2 小串・常盤構内位置図



写真4 小串構内航空写真（南東から）



写真5 常盤構内航空写真（南から）



写真6 光構内航空写真（北東から）



図3 光構内位置図

## 第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 教育学部研究実験棟B棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査

**調査地区** 古田構内H・I・J-18・19区

**調査面積** 約80m<sup>2</sup>(予備発掘調査20m<sup>2</sup>、立会調査60m<sup>2</sup>)

**調査期間** 予備発掘調査 平成22年7月20～28日  
立会調査 平成23年1月28日、2月4・7・10・15・21・23日、3月4・7日

**調査担当** 山畑直彦・松浦暢昌

### 調査結果

#### (1) 調査の経緯(図4・5)

古田構内において、教育学部研究実験棟B棟(現:教育学部C棟)の改修工事が決定し、設備改修や環境整備に伴う撤削工事が行われることになった。研究実験棟周辺においては、これまでほとんど調査が行われておらず、地下の状況に不明な点が多い。以上の点を踏まえ、平成21年度第13回埋蔵文化財資料館守門委員会(3月23日開催)において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、工事の詳細が決定後、館長、副館長及び埋蔵文化財資料館職員で検討の上、館長裁量で調査区分を決定することになった。その後、A～Dの4箇所で外灯設置工事が計画されたため、上記4箇所について予備発掘調査、その他の箇所(E～W地点)については立会調査を実施することになった。

#### (2) A～E調査区(図6～9、写真7～17)

##### a. 基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層:表土(層厚約6～30cm)

第2層:造成土(第3・4層のブロック土でガレキを多

量に含む:層厚約27～74cm)

第3層:旧耕土(層厚約20cm)

第4層:旧床土(層厚約5～10cm)

第5層:遺物包含層か(C調査区のみ 層厚約6～16cm)

第6層:地山(弥生時代以降の造構面形成層で縄文時代以前の河川堆積土: シルト・粗砂・粘土の互層)



図4 調査区位置図



写真7 A・B調査区調査前全景(西から)



写真8 C調査区調査前全景(南東から)

### 古川橋西(古川遺跡)の概要



図5 調査区詳細図

A調査区の層序は、現地表下約55~60cmまでが第2層で、以下、約60~80cmまでが第3層、約70~80cmまでが第4層、約80cm、標高19.6m以下が第6層であった。

B調査区の層序は、現地表下約56~70cmまでが第2層で、以下、約56~74cmまでが第3層、約70cm、標高18.7m以下が第6層であった。

C調査区の層序は、現地表下約48~77cmまでが第1・2層で、以下、約48~57cmまでが第3層、約55~84cmまでが第4層、約60~79cmまでが第5層(5~1層)、約65cm、標高18.66m以下が第6層であった。第5~1層から遺物は出土していないが、遺物包含層の可能性が高い。

D調査区の層序は、現地表下約76~89cmまでが第1・2層で、以下、約76~96cmまでが第3層、約92~116cmまでが第4層、約100cm、標高18.7m以下が第6層であった。なお、第6層は縄文時代以前の河川堆積層と考えられるが、今回いずれの調査区からも遺物は出土しなかった。

#### b. 遺構

A調査区の第6層上面はオリーブ灰色(10Y6/2)シルト、B調査区の第6層上面は灰オリーブ色(5Y6/2)シルト・オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルトであり、いずれも過去の調査から弥生時代以降の遺構面と考えられる層であるが、遺構は皆無であった。

C調査区では、第5~1層を検出面としてSX1、SD1を検出し、SX1b層・第6~12層を検出面としてSX2を検出した。なお、第5~1層と遺構埋土との識別が困難であったため、遺構はやや掘り下げた状態で検出した。

SX1の検出幅は約170cm、検出長は約270cm、西側壁面における深さが約40cm、最深部が約58cmを測る。調査区外に広がっているため、規模は不明である。緩やかに北側に落ち込む断面形状から、自然河川もしくは自然地形の落ち込みである可能性が高い。掘削を行った調査区西北隅ではa~fの6層か

古川橋西(古川道路)の断面

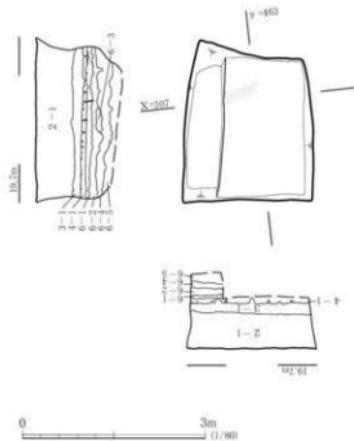


図6 A調査区平面図・断面図

- 2-1 造成土 灰オリーブ色 (5Y6/2) 土  
~10cmの大いなバラス含む
- 2-2 造成土 明黄褐色 (10Y7/6) シルト 黄色 (5Y7/6)  
シルト、3-1をブロック状に含む
- 3-1 旧木綿土 灰色 (5Y4/1) シルト ~1cm大の礫を含む
- 4-1 旧木綿土 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
- 6-1 地山 オリーブ灰色 (10Y6/2) シルト ~5cm大の礫を含む
- 6-2 地山 オリーブ灰色 (5Y6/1) シルト ~5cm大の礫を含む
- 6-3 地山 オリーブ灰色 (5Y6/1) 粗砂 ~1cm大の礫を含む
- 6-4 地山 オリーブ灰色 (5Y6/1) シルトを斑状に含む
- 6-5 地山 オリーブ灰色 (5Y6/1) シルト 青灰色 (5B5/1)  
シルトを斑状に含む
- 6-6 地山 オリーブ灰色 (5Y6/2) シルト
- 6-7 地山 オリーブ灰色 (2.5Y5/1) シルト 粗砂。~1cm  
大の礫を多く含む
- 6-8 地山 青灰色 (5B5/1) 粗砂 ~5cm大の礫を多く含む
- 6-9 地山 青灰色 (5B5/1) シルト 6-10を斑状に含む
- 6-10 地山 オリーブ色 (5Y5/6) 粘質土 6-9を斑状に含む
- 6-11 地山 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土



写真9 A調査区西壁土層断面(北東から)

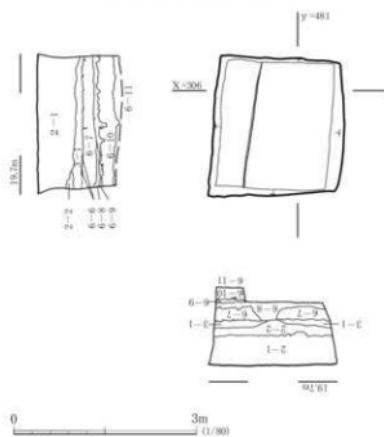


図7 B調査区平面図・断面図

らなることを確認した。いずれも黒褐色もしくは黒色のシルト層であり、このうち、n-b層から弥生時代中期後半の土器片(図10-1~10)が出土した。SD1・SX2は黒褐色(10YR3/1)シルトを埋土とし、深さは20cm以上である。いずれも調査区外に広がっているため詳細は不明である。また、掘削を一部にとめたこともあり、遺物は出土しなかった。Pit1は壁面(D-D'断面)で確認した。直径5cm、深さ6cmを測る。遺物は出土しなかった。

D調査区の第6層上面は褐灰色(10YR4/1)シルト・灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルトで、弥生時代以降の造構面と考えられる層であるが、既存の排水管による擾乱が顕著であり、造構は皆無であった。

古川橋西(古川道路)の調査

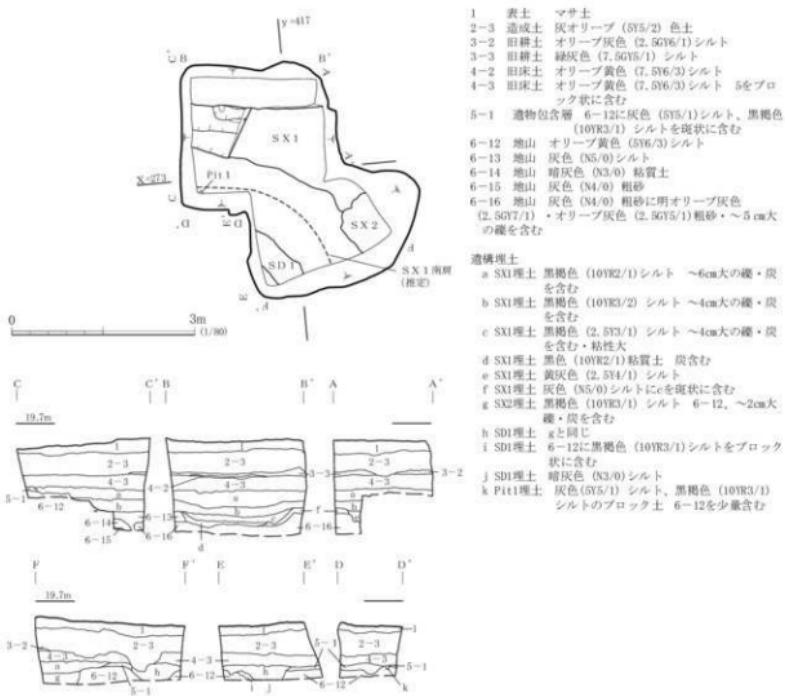


図8 C調査区平面図・断面図

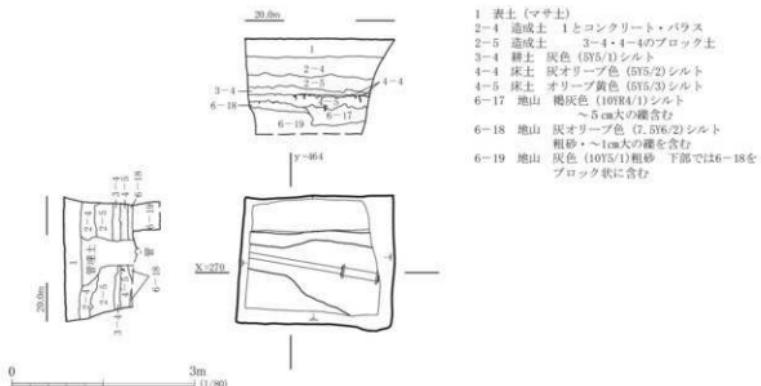


図9 D調査区平面図・断面図



写真10 B調査区西壁土層断面 (北東から)



写真11 C調査区全景 (東から)



写真12 C調査区東壁土層断面 (西から)



写真13 C調査区北壁土層断面 (南西から)



写真14 C調査区西壁土層断面 (東から)



写真15 C調査区東壁土層断面 (西から)



写真16 D調査区全景 (南から)



写真17 D調査区東壁 (西から)

## (3) E～W地点(図5、写真18～25)

E～W地点は雨水耕(E～R・U～W地点)及びU字側溝(S・T地点)設置箇所である。E地点は現地表下約63cmまで掘削したが、既設管の真上に設置されたため埋土はすべて造成土であった。F地点は現地表下約57cmまでが造成土で、約57～80cmが旧水田耕土を確認した。G地点は現地表下約103cmまで掘削したが埋土は全て造成土であった。H地点は現地表下約82cmまで掘削したが、埋土は全て造成土であった。I地点は現地表下約73cmまでが造成土で、以下約73～78cmが旧水田耕土、約78～82cmが旧水田床土、約82～90cmが弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ黄色(7.5Y6/3)シルトであった。また同シルトを検出面としてピット4基を検出した。ピットの埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルトで、深さは5～7cmであった。遺物は出土していない。

J地点は現地表下約90cmまで掘削したが、埋土は全て造成土であった。K地点は現地表下約100cmまで掘削したが、埋土は全て造成土であった。L地点は現地表下約42cmまでが造成土、約42～61cmが旧水田耕土、約61～81cmが旧水田床土、約61～98cmが遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる黒褐色(10YR3/1)シルト、約98～126cmが弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトであった。黒褐色シルトは東から西へ緩やかに傾斜して堆積している。M地点は現地表下約58cmまでが造成土、約58～71cmが旧水田耕土、約71～80cmが旧水田床土、約80～92cmが黒褐色(10YR3/1)シルト、約92～123cmが弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトであった。黒褐色シルトはL地点同様、東から西へ傾斜して堆積しており、摩滅した弥生土器片が出土した。

N地点は現地表下約75cmまでが造成土、約75～94cmが旧水田床土、約94～106cmが遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる黒褐色(10YR3/1)シルト、約106～139cmが弥生時代以降の遺構面形成層である緑灰色(5G6/1)シルトであった。黒褐色シルトからは、弥生土器高杯脚部(図10-10)が出土した。O地点は現地表下約115cmまで掘削したが埋土は全て造成土であった。P地点は現地表下約88cmまで掘削したが、埋土は全て造成土で、床面で旧水田床土を検出した。Q地点は現地表下約90cmまで掘削したが埋土は全て造成土であった。R地点は現地表下約120cmまで掘削したが埋土は全て造成土であった。S地点は現地表下約64cmまでが造成土で、約64～80cmが遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる黒褐色(10YR3/1)シルトを検出した。黒褐色シルトは幅約2mの範囲で残存していたが、周辺はすべて造成土の範囲内であった。T地点は現地表下約47cmまでが造成土で、約47～57cmが旧水田床土、約57～83cmが弥生時代以降の遺構面形成層である明黄褐色(2.5Y7/6)シルトであった。U地点は現地表下約90cmまでが造成土で、約90～97cmが旧水田床土、約97～140cmが弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ灰色(10Y6/2)シルトで、一部では緑灰色(7.5GY6/1)粗砂、明黄褐色(2.5Y6/8)シルトであった。V地点は現地表下約63cmまでが造成土であった。以下、約63～93cmは弥生時代以降の遺構面形成層である緑灰色(7.5GY6/1)シルトであり、同層を検出面とした黒褐色(2.5Y3/1)シルトの落ち込みを検出した。遺物は出土していない。また現地表下約93cmの床面では黄灰色(2.5Y5/1)粗砂を検出した。同層は繩文時代以前の河川堆積層と考えられる。

W地点は現地表下約39cmまでが造成土で、約39～56cmが旧水田耕土、約56～59cmが旧水田床土であった。以下、約59～77cmが弥生時代以降の遺構面形成層である灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト、約77～89cmがオリーブ灰色(5GY6/1)シルト、約89～107cmが灰色(10Y5/1)シルトで、いずれも繩文時代以前の河川堆積層と考えられる。

古川橋西(古川道路)の調査



写真18 I 地点土層断面（西から）



写真19 L 地点土層断面（南から）



写真20 M 地点土層断面（北から）



写真21 N 地点土層断面（北西から）



写真22 S 地点土層断面（南東から）



写真23 U 地点土層断面（東から）



写真24 V 地点土層断面（南から）



写真25 W 地点土層断面（西から）

## (4) 遺物(図10、写真26・27)

1~9はC調査区SX1出土土器で、いずれも弥生時代中期後半の土器である。1は壺の口縁部である。口唇部上端を刻み、内面には貼付突帯の剥離痕がみられる。外面の剥落が激しいため確認できないが、垂下部が存在した可能性がある。2は須玖系広口壺の口縁部である。3は垂下口縁壺の胴部で洞部にM字状の貼付突帯を持つ。4~6は跳ね上げ口縁の甕口縁部である。7は壺の底部である。内面は剥落している。8~9は壺の底部でいずれも外面が張り出す。

10はN地点黒褐色シルト出土土器で、弥生時代後期後半～終末期の高杯である。外面に2条沈線、その直下に2孔一对の穿孔を施す。

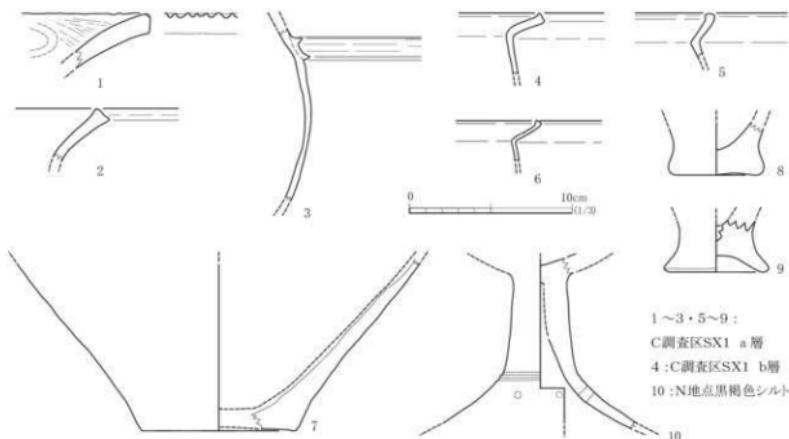


図10 出土遺物実測図

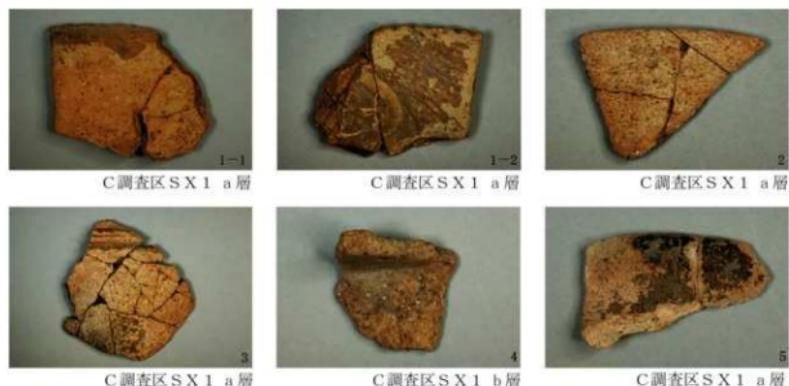


写真26 出土遺物①

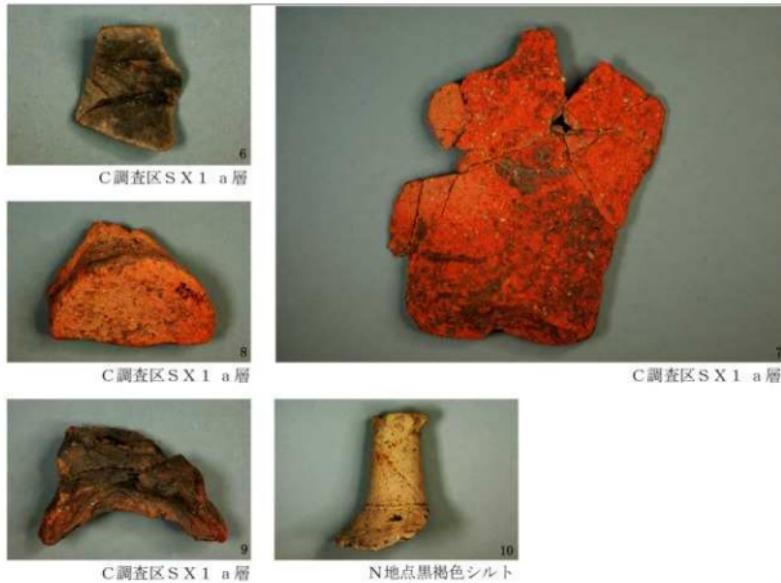


写真 27 出土遺物②

表2 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高			色調 ①外面 ②内面	粘土	備考
				①	②	③			
1	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	口縁部				①にこない黄橙色(10YR7/4) ②にひい黄橙色(10YR6/4)	0.1~6mmの砂粒を含む	
2	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	口縁部				①②にこない黄橙色 (10YR7/3)	0.1~2mmの砂粒を含む	
3	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	胴部				①灰色(5Y5/1) ②浅黄橙色(10YR8/3)	0.1~3mmの砂粒を含む	
4	C調査区 SX1 b層	弥生土器 壺	口縁部				①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~2mmの砂粒を含む	
5	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	口縁部				①②にひい黄橙色(10YR7/3)	0.1~2mmの砂粒を含む	
6	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	口縁部				①灰白色(10YR8/2) ②灰色(5Y6/1)	0.1~2mmの砂粒を含む	
7	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	底部	②5.9			①灰色(5Y4/1) ②にひい黄橙色(10YR7/3)	0.1~4mmの砂粒を含む	
8	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	底部	②(6.5)			①②灰黃褐色(10YR6/2)	0.1~3mmの砂粒を含む	
9	C調査区 SX1 a層	弥生土器 壺	底部	②(9.5)			①淡橙色(5YR8/4) ②明赤褐色(5Y5/6)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
10	N地点 黒褐色シルト	弥生土器 高壺	环部~脚部				①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~7mmの砂粒を含む	

## (5) 小結

今回の調査の結果、建物北側の調査区では、I地点を除き顕著な遺構・遺物がみられなかったことから、昨年度の調査区同様、遺構が比較的希薄な地域と考えられる。一方、建物南側ではC調査区のほか、L・M・N・S地点で黒褐色シルトを検出し、M・N地点では弥生土器片が出土した。同層は遺物包含層もしくは遺構埋土とみられる。また、V地点では同層を埋土とする落ち込みを検出した。

L・M地点で確認された黒褐色シルトはC調査区で確認されたSX1の延長部分である可能性がある。C調査区・L・M地点周辺では、教育学部II-19区(現:共用棟B)の発掘調査、ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査<sup>43</sup>、グランド照明施設新設工事に伴う発掘調査<sup>44</sup>、遺跡保存公園の発掘調査<sup>45</sup>で弥生時代中期～古墳時代前期の集落遺構が検出されている。

筆者の土器編年観では、共用棟B敷地で検出された遺構はいずれも弥生時代後期前半とみられる。一方、ラグビー場防球ネットに伴う発掘調査で検出されたSD1は環濠である可能性があり、弥生時代中期後半から後期前半の上器が出上している。C調査区SX1は人為的に掘削された遺構ではない可能性が高いが、中期後半の集落関連遺構が周辺一帯に存在していたと推測でき、今後の解明が期待される。

なお、平成22年度第4回埋蔵文化財資料館専門委員会(7月27日開催)で調査結果を審議した結果、C調査区で設置が計画された外灯については、関係部局の配慮により、設置場所を既存の外灯が設置されている場所に変更することになったため、C調査区で検出された遺構は保護されることになった。

## 【注】

- 1) 田畠直彦(2013)「第1章第2節3 教育学部八棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』, 山口
- 2) 河村吉行(1982)「第3章第2節 教育学部構内H-19区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』, 山口
- 3) 織部貴文・河村吉行(1986)「第3章 吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』, 山口
- 4) 豊谷和之・田畠直彦(2000)「第2章 吉田構内グランド照明施設新設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口
- 5) 河村吉行(1986)「付篇Ⅰ 山口大学吉田構内保存地区の発掘調査(昭和67年度)」 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』, 山口
- 河村吉行(1987)「付篇Ⅱ 山口大学吉田構内保存地区の発掘調査(昭和69年度)」 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』, 山口
- 河村吉行(1990)「付篇Ⅲ 山口大学吉田構内保存地区の発掘調査(昭和60・61年度)」 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口
- 河村吉行(1991)「付篇Ⅳ 山口大学吉田構内保存地区の発掘調査(昭和62・63年度)」 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』, 山口

## 2. 音楽サークル棟新営工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区 古田構内G-14区

調査面積 約13.5m<sup>2</sup>(予備発掘調査約12m<sup>2</sup>、立会調査約1.5m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年12月20～24日

平成23年2月4日

調査担当 田畠直彦・松浦昌昌

調査結果

## (1) 調査の経緯

音楽サークル棟(音楽サークル棟B 軽量鉄骨構造: ブレハブ)の新営工事決定に伴い、平成22年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(10月19日開催 メール審議)において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、予定地の地下の状況が不明確なため、予備発掘調査・立会調査を実施することになった。

予定地は第2武道場の西側に位置し、平成22年12月まで仮設駐車場として利用されていた。計画建物の平面規模は東西約9m、南北約11mで、基礎工事では現地表下約60cmまでの掘削、設備工事では現地表下約70～100cmの掘削が計画された。今回の予備発掘調査では、新営建物敷地内に2箇所の調査区(A・B調査区)を設定し、雨水排設置箇所(C地点)では立会調査を実施した。

## (2) A・B調査区(図11～13、写真28～32)

## a. 基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層: パラス(約10cm)※調査区周辺では崩落防止のため除去

第2層: 造成土(ガレキを多量に含む: 約80～90cm)

第3層: 旧耕土(層厚約7cm)

第4層: 旧床土(層厚約20～25cm)

第5層: 遺物包含層(層厚約8～30cm)

第6層: 地山(弥生時代以降の遺構面形成層で縄文時代以前の河川堆積土)

A調査区の層序は、現地表下約126cmまでが第2層で、以下、約126～133cmで第3層、約133～146cmで第4層、約146～148cmで第5層、約146cm、標高17.49m以下が第6層であった。第5層は遺物包含層と考えられるが、層厚2cm程度と薄く、遺物は出土しなかった。

B調査区の層序は、現地表下約90cmまでが第2層で、以下、約90～105cmで第4層、約105～157cmで第5層を検出した。一方、調査区南西部では第5層を現地表下約120～136cmで検出した。第5層は5-



図11 調査区位置図



写真28 調査前全景(南から)

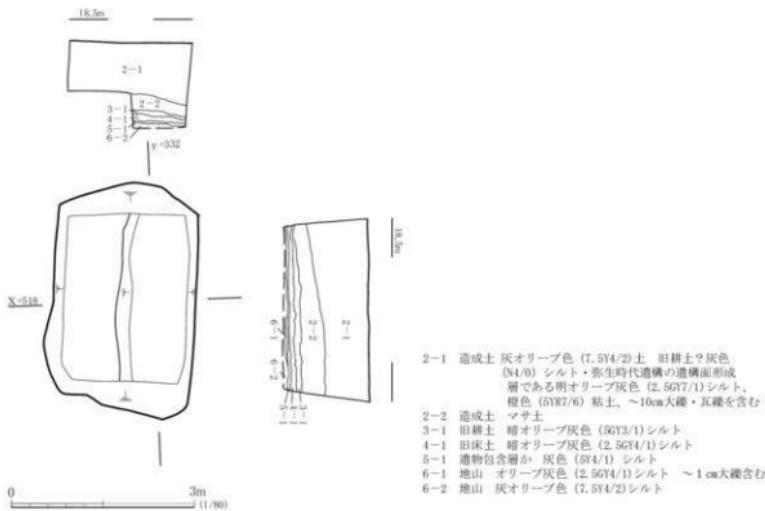


図 12 A 調査区平面図・断面図

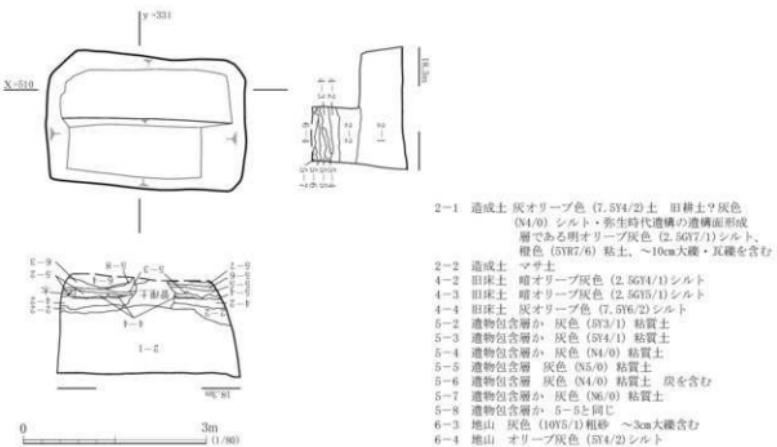


図 13 B 調査区平面図・断面図



写真29 A調査区全景(南西から)



写真30 B調査区全景(北から)



写真31 B調査区南壁土層断面(北から)



写真32 C地点土層断面(南西から)

2~8層に細分されるが、このうち、5~5層・5~6層からは摩滅した時期不明の土器片が各1点出土した。同層は堆積状況から河川もしくは落ち込みの堆積上である可能性がある。

#### b.遺構

A・B調査区で遺構は皆無であった。

#### (3) C地点(図11・写真32)

現地表下から約100cmまで掘削を行ったが、全て造成土であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

#### (4) 小結

今回工事の掘削深度は大部分が現地表下約60cm以内にとどまる。このため、予定地内における埋蔵文化財に支障はない。A・B調査区では第5層を検出し、B調査区からは摩滅した時期不明の土器片が含まれることを確認した。第5層は遺物包含層であるが、時期や分布状況は不明である。このため、今後も調査区周辺においては、埋蔵文化財の保護に引き続き注意が必要である。

## 3. 教育学部研究実験棟G棟改修工事に伴う立会調査



図14 調査区位置図



写真33 C地点土層断面（南から）



写真34 D地点土層断面（南から）

調査地区 吉田構内J-18区

調査面積 約22m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年5月6・11日

調査担当 田畠直彦

調査結果 平成21年11月に吉田構内の教育学部G棟改修工事が計画されたことを受け、管轄自治体の指導の下、当館館長、副館長、館員の協議により、立会調査を実施することになった。工事は排水管の掘削に伴うものである。

A地点は現地表下約50cmまでが造成土で、約50～60cmが旧水田床土、約60～73cmが黒褐色(10YR 3/1)シルト、約73～115cmが弥生時代以降の遺構面形成層である明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルト、約115～125cmが青灰色(5BG6/1)シルトであった。黒褐色シルトには幅約20cm、深さ約9cmで落ち込んだ箇所があり、何らかの遺構である可能性がある。遺物は出土しなかった。B地点は現地表下約60cmまでが造成土で、約60～80cmが旧水田耕土、約80～100cmが弥生時代以降の遺構面形成層である明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルトであった。遺構・遺物は検出していない。C・D地点は搅乱が激しく、現地表下約60～70cmまでが造成土で、約70～100cmが弥生時代以降の遺構面形成層である明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルトであった。同シルトを検出面としてC地点ではピット2基、D地点ではピット1基を検出した。ピットの直径は35～40cm、深さは11～22cmである。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト、灰色(10YR5/1)シルトであった。いずれのピットからも遺物は出土していないため、時期は不明である。

C・D地点周辺は擾乱が著しいものの、遺構が残存している可能性が高いため、今後の開発工事においては、埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

## 4. 吉田寮改修工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内I・M-9区

調査面積 約1,820m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年7月27日、10月5日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内北端部に位置する吉田寮(男子学生寮)改修工事の内、地下の掘削を作業2箇所において立会調査を実施した。

A地点は、寮改修に伴う電柱新設工事箇所である。工事ではボーリングにより2mの深度まで掘削が行われた。断面精査は行えなかったが、目視する限り現地表より01.mが表土、1.9mまでが造成土、以下に明黄色粘土が確認された(写真35)。最下層は地山と思われるが造成土の可能性もある。

B地点は古田寮改修機械設備工事で、自動車部の車庫廻り給排水管工事に伴う掘削部である。車庫の南西隣接地に長さ2.5m、幅1.75mの規模で2mの掘削が行われた。基本層序は現地表下0.2mが表土、1mまでが造成土である。以下に①黒色粘質土(層厚0.1m)、②暗灰色粘質土(層厚0.05~0.1m)、③黄灰色粘質土(層厚0.3m)、④黄灰色砂礫土(層厚0.1~0.2m)、⑤黒褐色粘質土(層厚0.1m)、⑥灰黄色粘土(層厚0.3m以上)が確認された(写真36)。この内①②層は大学造成前の旧耕土・床土と見られ、③~⑤は自然堆積層、⑥層が地山と思われる。また、この自然堆積層への掘り込みも確認された。掘り込み埋土は暗灰褐色粘質土。断面精査を行ったが、埋土中に遺物は確認されなかつた。

当地は南東に隣接する吉田寮敷地から一段下がった場所に当たり、過去に埋蔵文化財調査歴のない地域である。今後も大規模開発は予定されていないが、設備関係工事等により土地の掘削が行われる場合は工事立会を実施し、地図情報を蓄積する必要があろう。

この他、吉田寮周辺において広範囲に現地表のすき取り工事が実施されたが、掘削深度が浅く、埋蔵文化財に支障は生じていない。



図15 調査区位置図



写真35 A地点上層断面(東から)



写真36 B地点上層断面(北西から)

## 5. 基幹整備(鉄管改修)工事に伴う立会調査



図 16 調査区位置図



写真 37 B 地点土層断面（南から）

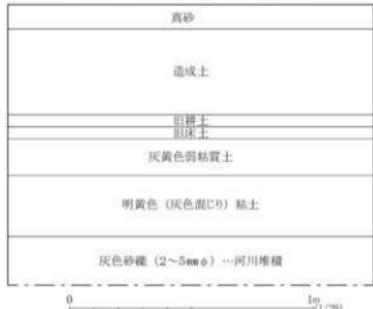


図 17 B 地点土層断面柱状図

調査地区 吉田構内Q-18区

調査面積 13.6m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年8月18日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内南端部、極野寮(女子学生寮)と人文学部校舎間に於いて老朽化したガス管の改修工事が計画された。工事計画の大部分は既存のガス管を改修するものであったが、一部に新規配管ルートが存在するため、工事中の立会調査を実施することとなった。

調査実施箇所は、人文学部棟東側空閑地から道路にかけてのルートである。調査区東端部のA地点では、現地表下70cmの造成土下に河川堆積土を確認した。

西端部のB地点では、上より表土(層厚10cm)、造成土(層厚35cm)、旧耕土(層厚5cm)、旧床土(層厚5cm)、灰黄色弱粘質土(層厚15cm)、明黄色灰色粘土(層厚25cm)、灰色砂礫(河川堆積土:層厚20cm)を確認した(写真37、図17)。

調査地周辺の既往調査では、明確な遺構等埋蔵文化財は確認されていないが、吉田構内では今回検出された明黄色粘土層に遺構が検出される場合が多いため、調査地周囲に遺構が遺存する可能性を指摘できる。周辺地での工事においては今後とも慎重な対応が求められる。

## 6. 基幹環境整備(第1体育館周辺排水整備)工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内G-13区

調査面積 8m<sup>2</sup>

調査期間 平成23年2月1H

調査担当 横山成己

**調査結果** 当工事計画の最終年に当たる平成22年度は、吉田構内北東部、廃棄物倉庫の南西隣空閑地において、九山川に排水管を接続する工事が計画された。

計画地は過去において九山川の氾濫原であったと推測されるが、予定掘削深度が1.6mに達することから、慎重を期し工事立会を実施することとなった。

立会は工事掘削終了後に開催された。土層断面を精査したところ、現地表下1.45mまでが造成土であり、下に旧耕土と見られる層厚0.15m以上の暗灰色粘質土を確認した(写真38、図19)。

吉田構内は、北西部から西部にかけて冲積平地が形成されており、大学統合移転前は広大な耕作地であった。大学造成時、北東部から東部、南東部の丘陵地は主として削平され、北西部から西部にかけての冲積平地は主として盛土が施されたと見られるが、冲積平地に確認される旧耕土は場所により検出深度が不均一である。これは低地に向かい棚田状に水田が形成されていたためと考えられる。工事立会では埋蔵文化財は確認されなかったが、移転前の周辺地形を推測する上では貴重な知見を得ることができた。

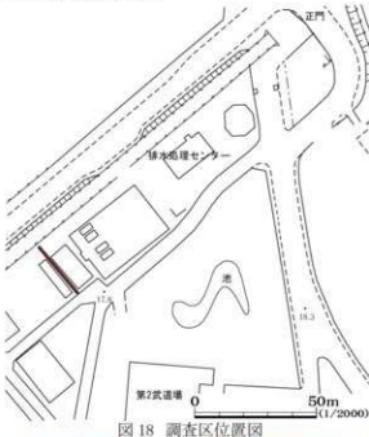


図 18 調査区位置図



写真 38 土層断面（南から）



図 19 土層断面柱状図

## 7. 事務局2号館車寄せ取設工事に伴う立会調査



図 20 調査区位置図



写真 39 C 地点東壁土層断面(西から)



図 21 土層断面柱状図

調査地区 吉田構内L-14区

調査面積 3.6m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年9月1日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内事務局2号館南面におけるカーボート設置計画が立案された。地下的掘削に関しては、カーボート支柱基礎部分のみ約80cmの掘削を行うという小規模な工事内容であったが、本部2号館敷地においては区画溝や屋敷墓を有する中世屋敷跡、弥生時代後半から終末期の遺物が多量に出土した土壤等が検出されており、東に隣接する遺跡保存地区、北東に近接する大学会館敷地からも密に遺構等が検出されていることから、工事掘削後の立会調査を実施することとなった。

支柱4ヶ所(A~D地点)の内、A・B・D地点は造成土内の掘削で止まったが、C地点では現地表下0.35mで遺物包含層と推察される厚さ0.1mの堆積層が確認され、その直下に赤橙色粘土上の地山が検出された。また、北壁から西壁の土層断面を精査したところ、上層と見られる落ち込みが検出された(写真39、図21)。埋土は暗灰黄色粘質土である。土層断面や耕土中に遺物は確認できなかったことから所属時期は不明とせざるを得ないが、今後とも周辺域での工事には注意を要することが確認された。

## 【註】

- 河村古行(1979)「付篇2 吉田構内本部2号館新營に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口
- 河村古行・森田孝一・杉原和恵(1986)「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、山口
- 河村古行ほか(1985)「吉田構内大学会館新營に伴う発掘調査報告」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、山口

## 8. 里山遊歩道手摺り取設工事に伴う立会調査

調査地区 古川橋内N・O-11区

調査面積 15.2m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年8月30日

調査担当 横山成己

**調査結果** 平成21年度に吉田橋内北東部に位置する低丘陵、通称「もり山」頂部にモニュメント・東屋・石碑方位盤等を設置し、「共育の丘」として活用することが決定されたことを受け、昨年度中に予備発掘調査を実施した。その結果、頗著な埋蔵文化財は遺存しないことが確認されたが、もり山南東斜面には現在も横穴墓1基が残存しており、谷を一つはさみ北西に隣接する低丘陵南東斜面にはH古神社横穴墓群が存在することから、周辺地の開発工事等においては今後とも埋蔵文化財保護に留意すべきとの意見が提示された。

平成22年度は、「共育の丘」に至る遊歩道の整備の一環として、手摺り取設工事が計画された。地下の掘削は手摺り基礎部分のみであり、基礎も0.85m角、深度0.6mと狭小なものであったが、21箇所に設置とのことであったため、慎重を期し工事立会を実施する運びとなった。工事掘削終了後に調査を行ったが、いずれの基礎坑も約0.1mの表土下は明褐色岩盤風化土の地山であり、造構等埋蔵文化財は確認されなかった(写真40・41)。

「共育の丘」周辺はこの度の開発計画に伴い伐採が進み、比較的地面の観察が容易な環境となっている。今後踏査を実施し、さらなる横穴墓の確認に努めたい。

## 【註】

- 1) 田嶋尚彦(2013)「里山整備工事に伴う予備発掘調査・立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成21年度—』、山口



図 22 調査区位置図



写真 40 工事の模様（西から）



写真 41 B 地点上層断面（南東から）

## 9. 人文学部駐輪場外灯設置工事に伴う立会調査



図 23 調査区位置図



写真 42 土層断面（北から）



図 24 土層断面柱状図

調査地区 吉田構内M-22区

調査面積 13.6m<sup>2</sup>

調査期間 平成23年3月16日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内南部に位置する人文学部校舎と国際交流会館1号館の間に設置されている駐輪場に該当の設置工事が計画された。

昭和53年度に実施された人文学部校舎新宮に伴う試掘調査においては顕著な埋蔵文化財は確認されなかったが、昭和61年度に実施された国際交流会館新宮に伴う発掘調査では、敷地の南半部で東から西に走向する弥生時代から古墳時代にかけての自然河川が確認されている。

今回の工事計画では、電線埋設工事は掘削深度が浅いため調査対象から除外し、外灯基礎部分(1m角、深度1.4m)のみを対象とした。

確認された層序は、①芝・表土(層厚0.15m)、②造成土(層厚0.35m)、③暗灰色粘質土(層厚0.05m)、④暗灰色弱粘質土(層厚0.25m)、⑤灰色砂質土(層厚0.05m)、⑥暗黃褐色縞状土(層厚0.05m)、⑦明黄色粘質土(層厚0.15m)、⑧明黄色強粘質土(層厚0.35m以上)である(写真42、図24)。この内、③は本学統合移転前の旧耕土、④も耕土と見られる。⑤以下は地山であろう。

今回の調査により、人文学部校舎の南方、国際交流会館1号館までの空閑地に埋蔵文化財が分布する可能性は低下した。調査地は現在構野寮(女子学生寮)が立地する舌状丘陵が耕地化に伴い削平された可能性がある。今後周辺地の調査から検討を行う必要がある。

## 【註】

1) 河村吉行(1992)「付録 I 吉田構内人文学部校舎新宮に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、山口

2) 河村吉行(1987)「吉田構内国際交流会館新宮に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、山口

## 10. 教育学部附属特別支援学校雨水排水補修工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内C・D-21区

調査面積 約18m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年8月9日

調査担当 横山成己

調査結果 教育学部より、附属特別支援学校では大雨時に雨水がロータリ付近にたまるため、雨水枠を新設するとともに雨水の排水ルートのための管を埋める工事の事業計画が提出された。工事においては深さ1m、幅1.5m程度で直近の側溝まで掘削する予定であった。

特別支援学校は、吉田構内の西端部に位置している。学校新営前の昭和54年、用地内の埋蔵文化財の有無および分布範囲の把握のため、山口市教育委員会により試掘調査が行われた。調査は用地内110箇所にて実施され、その結果敷地の東部(A地区)、北西部(B地区)、南部(C地区)の3地区で遺構および遺物包含層が検出された。今回の工事計画地はA地区に近接する場所に該当するため、工事中の立会調査で対応することになった。

調査の結果、排水管ルートでは掘削は造成土内とどまつたが、調査区南西端部の枠設置部分では、現地表下60cmの造成土下に遺物包含層と思われる黒褐色砂質土、その下位に灰色砂礫の河川堆積土を確認した(写真43、図26)。土壟断面および排土から遺物は確認されていないが、今後周辺域での開発には注意が必要である。



図25 調査区位置図



写真43 土層断面（東から）

## 【注】

- 1) 河村古行(1991)「付篇 I 古田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究平成IX』、山口



図26 土層断面柱状図

## 11. 農学部附属農場果樹園側溝新設工事に伴う立会調査



写真44 遺構検出状況(西から)



写真45 調査区全景(東から)

調査地区 吉田構内R・S-19区

調査面積 約10m<sup>2</sup>

調査期間 平成23年3月14日

調査担当 横山成己 松浦暢昌

## 調査結果

## (1) 調査の経緯(図27)

農学部より、附属農場果樹園南端部、解剖実習棟との境界部に全長25mの側溝を新設する工事計画が提出された。掘削予定深度は解剖実習棟敷地以外は現地表下0.4mに止まるものであったが、南に隣接する解剖実習棟敷地では古代を中心とする遺構群が確認されており、敷地北端部では地下0.3~0.4mで遺物包含層が検出されたとの所見があり、西に隣接する総合研究棟敷地では古代の遺物を含むする旧河川が確認されており、さらに近年実施した近隣地での立会調査においても、地下0.4m地点で柱穴<sup>u1</sup>と見られる遺構が確認されているため、工事中の立会調査が必要と判断した。

## 【註】

- 1)a: 田中直彦(2002)「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修(解剖実習棟新設)に伴う発掘調査報告－」、山口考古学会(編)『山口考古』第22号、山口
- b: 田中直彦(2004)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報 XVI・XVII』、山口
- 3) 横山成己(2011)「農学部附属農場内電線敷設工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』、山口

## (2) 調査の経過

工事掘削は年度末の3月14日に実施され、掘削終了後に立会調査を行った。掘削面上に遺構埋土と見られる箇所が複数確認されたため、平面精査を行うとともに、樹が設置される東端部・西端部の断

面精査を行った。

#### (3) 基本層序(図29、写真46・47)

その結果、当地の基本層序は①耕土、②灰褐色弱粘土、③黄褐色岩盤風化土(粘土;ブロック混ざる)、④明黄褐色岩盤風化土(礫砂混じり)であることが確認された。この内、②は遺物包含層である可能性があり、③・④層は地山である。遺構は③を掘り込み形成されている。なお、③上面は調査区東端部では現地表下20cm、西端部では40cmで確認された。

#### (4) 遺構(図28、写真44・45)

検出された遺構には、ピット3基(Pit1~3)、土壙5基(SK1~5)、溝3条(SD1~3)がある。これらは埋土の土質により2種に大別される。即ち、灰褐色の埋土を有するもの(SD1~3、Pit1~3)と、黒褐色の埋土を有するもの(SK1~5)である。この内、SK4がSD2を切り込んでおり、先後関係は明白である。近隣地における既往の調査成果により、灰褐色埋土が中世、黒褐色埋土が近世以降と推察される。

溝は何れも南北に走向しており、SD1とSD3は幅0.3m程度、SD2はやや幅広で約0.7mを測る。ピットはいずれも平面円形で、径0.2~0.3mを測る。土壙は2mの間隔で東西方向に並んでおり、SK5のみが平面円形、残りは平面方形である。SK1~4はほぼ同一規模で、一辺0.35~0.4mを測る。SK5は検出された範囲では径0.4mを測る。

#### (5) 遺物

断面精査中に基本層序②より須恵器片1点が確認されたに過ぎない。壺類の体部片と見られるが、小片のためここでは図示しない。

#### (6) 小結

今回立会調査を実施した地点は、平成20年度に動物医療センター北側にて確認した中世集落跡<sup>1)</sup>の約70m西方に当たる。平成20年度確認集落跡は、出土遺物から14世紀中に出現し、16世紀中に消滅したと推定される。時代は降るが18世紀前半から中頃に作成された『地下上中絵図・吉田村清図』(山口県文書館所蔵)においても該当地に集落は描かれておらず、この推定を補強するものとなっている。筆者はこの集落は比較的小規模なもので、近世に農地の拡大により構内大学会館周辺もしくは農学部附属農場本館周辺に中世に形成され、近世まで継続した集落に統合されたと推察していたが、今回の調査により当集落が少なくとも東西120mの範囲まで広がる可能性が高まったことから、再考の余地があると考える。今後、吉田遺跡のみならず隣接する遺跡との関係を検討したい。

なお、今回の調査では遺構掘削は行なっておらず、遺構分布の平板測量による記録を作成し、工事業者に慎重な埋め戻しを指示した上で調査を終了している。今後も周辺地の開発工事等には十分な注意が必要である。

#### 【註】

- 1) 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報』、山口

古川橋内(古川道路)の調査



図 28 調査区平面図



写真 46 ポイント A 土層断面 (北から)



写真 47 ポイント B 土層断面 (北から)

### 第3節 白石構内(白石遺跡)の調査

#### 1. 教育学部附属山口小学校渡り廊下設置工事に伴う立会調査

**調査地区** 白石構内幼稚園管理棟南側

**調査面積** 約12m<sup>2</sup>

**調査期間** 平成23年3月7日

**調査担当** 田畠直彦

**調査結果** 白石構内の教育学部附属幼稚園～附属山口小学校間に渡り廊下を設置する工事が計画された。掘削工事は渡り廊下の屋根の基礎を掘削するものである。過去の調査成果から附属山口小学校敷地の掘削箇所は旧地形が削平されており、埋蔵文化財が認められないことが明らかであつたため、平成22年度第8回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成23年1月17日開催メール審議)において、附属幼稚園敷地を対象として立会調査を実施することになった。掘削は5箇所で行われ、現地表下から約70cmまで掘削が行われたが、既設の雨水管ルートと重複していたこともあり、埋土は全て造成土であった。ただし、埋土に旧水田耕土・床土を含むことから、調査区周辺では埋蔵文化財が遺存する可能性がある。このため、今後も引き続き埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

#### 【註】

- 河村吉行(1992)「付録II 山口大学構内の埋蔵文化財の分布」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口



図30 調査区位置図



写真48 調査区全景（北西から）

#### 第4節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

##### 1. 医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事に伴う予備発掘調査・立会調査



調査地区 小串構内看護師宿舎南西側駐車場

調査面積 約125m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年5月10日～6月1日

調査担当 横山成己 松浦暢昌

##### 調査結果

###### (1) 調査の経緯(図31・32、写真49・50)

小串構内北部、看護師宿舎南西方の駐車場敷地において、既存立体駐車場の解体及び新規立体駐車場の建設が計画されたことを受け(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年3月18日開催にて承認)、新規立体駐車場設置予定地において予備発掘調査を実施する運びとなった。新設の立体駐車場は山口大学と(財)朋和会の敷地にまたがって計画されていたが、山口県教育委員会の指導により当館が調査を担当することとなつた。

開発予定地周辺の既往調査では、現地表下0.7



写真 49 昭和 58 年頃の小串構内北東部(南西から)

m～1.5mに大学造成以前の耕土・床上が埋存し、その下位に砂層・海成砂層・海成粘土層等が堆積しており、それらはいずれも近世以前の遺物を含む遺物包含層であることが確認されている。

今回の調査地は小串構内の北西部を北東～南西方向に伸びる丘陵の東側縁辺部と推定されたため、旧地区と写真を参考に、丘陵地(写真49の丘陵地周辺)における道溝分布の確認と、丘陵から低地部への遺物の流入状況の確認を目的とするL字状トレンチを設定し調査を実施した(図32)。

#### 【註】

- 横山成己(2006)「医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学史料文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口

#### (2) 調査の経過

平成22年5月10日より調査に着手した。11日までに重機掘削を終え、12日に丘陵地の遺構検出作業、翌13日以降低地部に遺存する旧耕土(第2層)、床上(第3層)および堆積層(第4層以下)の検出、掘削作業を開始した。28日までに低地部堆積層の人力掘削及び丘陵地の搅乱坑埋土の掘削を終了し、31日に終了写真の撮影と調査区の平板測量、6月1日に調査区断面写真撮影と断面実測を終え、調査を終了した。なお、新規立体駐車場建設請負業者が免掘調査も担当したため、堀め戻し作業に当館は関与していない。

#### (3) 層序(図33、写真53～58)

今回調査では最深部で地表下2.1mまでの地層を壁面で確認した。地層は7層に区分された。調査地北側に隣接する丘陵山來と考えられる基盤岩層は「岩盤」と呼称する。今回調査地ではトレンチ北側角

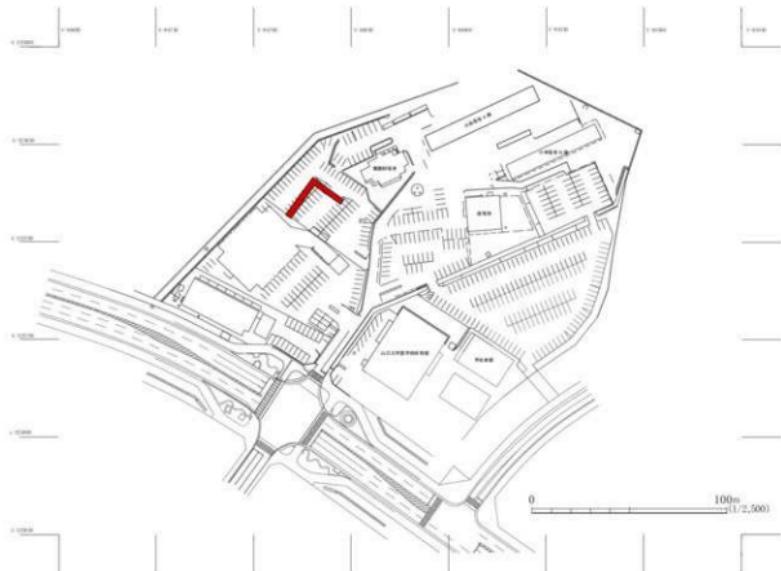


図32 調査区詳細位置図

で地表下70cm付近に岩盤が露出し、南東・南西方向に低くなり、その縁辺から地層が南側に緩やかに傾斜して堆積する様子が確認された。

第1層は現代の整地上層で層厚は約0.5~0.9mである。

第2層はオリーブ黒~暗緑灰色の含細礫極細粒砂質シルト層で層厚はおよそ0.1~0.2mである。磁器片や踏込み痕、層直上の炭化植物遺体から、近代の耕土と見なされる。

第3層は第3-1層と第3-2層に分類される。第3-1層は灰色粗粒砂混じり極細粒砂質シルト層であり層厚は約0.15mとなる。上面では浅い溝状の凹みやそれに沿う杭跡がみられる。遺物は坪管の吸口や擂鉢等の近世陶磁器類の破片が検出される。グライ化しており、上面からの植物痕が多く見られるほか干割れ痕が確認できる。第3-2層は灰~オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト層で層厚はおよそ0.15~0.2mである。岩盤が風化した塊が少量みられる。上層からの植物痕が少量みられるほか、陶磁器片や土師器片が検出される。第3-1と共にほぼ均質な土質となることから、第3層は第3-1が水稻耕作時に攪拌された床上、第3-2が攪拌されずに遺存した床上となる作上層と考えられる。

第4層は暗オリーブ灰色シルト質極細~中粒砂層で層厚はおよそ0.05~0.15mである。岡く縮まつた砂層で植物痕がみられ、岩盤が風化した疊と瓦質土器片、土師器片などの遺物が上面付近に散布する傾向が確認できる。下面は擾乱がみられ、自然堆積と考えられるが、上部は近世の土地造成のために削平された可能性がある。

第5層は灰色粗粒砂混じり粘土質シルト~暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂層~灰色シルト質細粒砂で層厚およそ15~25cmの水成層である。遺物の検出はなく、層中や下面に粘土の偽縛を含む生物痕が多くみられる。

第6層は暗オリーブ灰シルト質極細粒砂層で層厚は20cm以上となる。遺物は検出されなかつたが、土質から平成16年度調査にて弥生土器の包含が確認された第6層に相当すると考えられ、汽水域付近での水成堆積層である。

第6層掘削中に地下から多量の湧水を見たため、堆積層の掘削は当層上面で止め、側溝を掘り下げることで層厚の確認を取ろうと努めたが、下層の確認には至らなかつた。

#### 【註】

- 1) 嶋山成己(2006)「医学部職員宿舍他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成16年度ー』,山口

#### (4) 遺構(図33、写真51・59・60)

今回検出された丘陵部岩盤は、傾斜面と上面に大きく削平を受けており、岩盤上で確認されたのは擾乱坑だけであった。旧路地周囲の昭和58年頃の写真(写真58)を見ると、路地周囲には家屋が建ち並んでおり、これらの宅地造成時に自然地形の削平が行われたものと想像される。小規模の擾乱は完掘したが、大規模な擾乱は部分的に底を確認し未掘のまま残した(写真60)。岩盤上面こそ風化土となっているが、傾斜面を見て分かるように直下はほぼ風化が及んでおらず、極めて硬質である(写真59)。丘陵部岩盤は調査区外にも及ぶが(図33赤色部)、岩盤上面に遺構が遺存する可能性は極めて低いと言わざるを得ず、これを根拠とし本発掘調査の実施を見送った。

一方で、第4層以下では岩盤の風化土と各層が混ざる様子が確認でき、調査地付近が丘陵と河口の接する環境であったことを推測できる重要な情報を得ることができた。

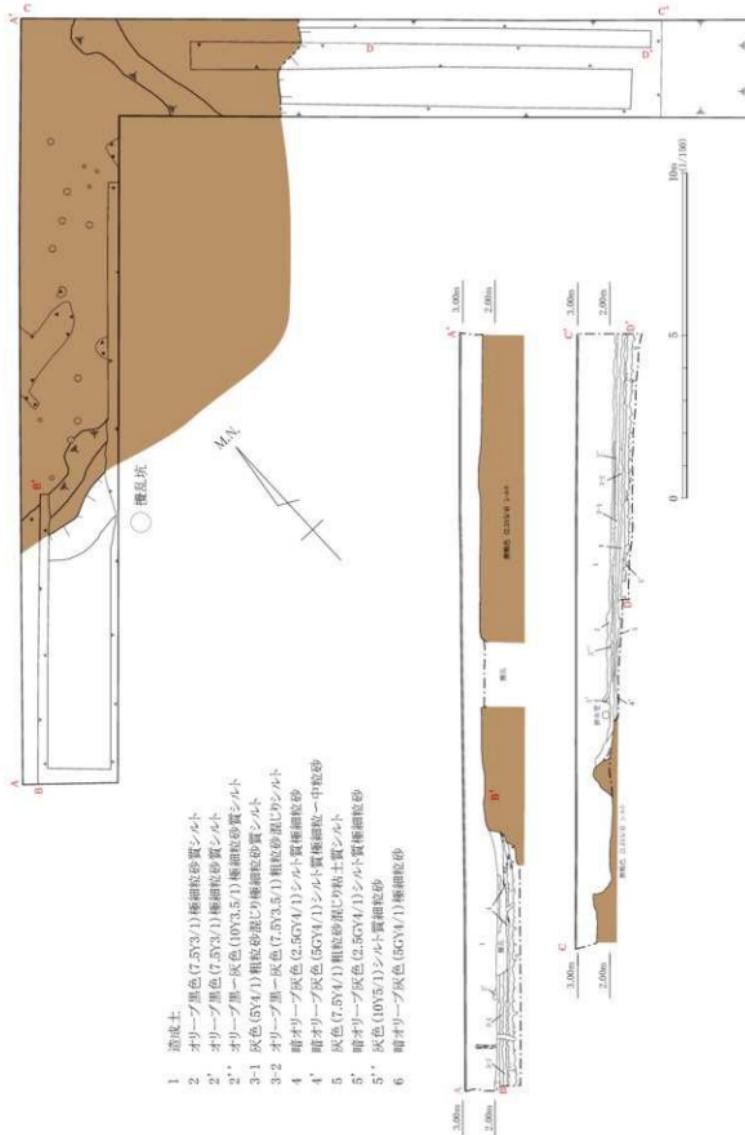


図33 調査区平面図・断面図



写真 50 調査前近景 (南から)



写真 51 地山検出状況 (北東から)



写真 52 作業風景 (北東から)



写真 53 北西-南東トレンチ第3-1層検出状況 (東から)



写真 54 北東-南西トレンチ第3-1層検出状況 (南西から)



写真 55 北東-南西トレンチ第4層検出状況 (南西から)

小森精内(山口)大学医学部境内道路の調査



写真 56 第4層遺物出土状況 (南東から)



写真 57 北東ー南西トレンチ北西壁土層断面 (東から)



写真 58 北西ー南東トレンチ南西壁土層断面 (東から)



写真 59 調査区北端部岩盤露出状況 (北から)



写真 60 調査終了状況 (北東から)

## (5) 遺物(図34、写真61・62、表3・4)

遺物の出土を見たのは、第2層(旧耕土)、第3層(旧床土)、第4層(自然堆積層)に限られ、第5層以下からは確認されていない。この内、第2層出土遺物は主として近代のものが多数であったため、ここでは報告を省く。第3層、第4層ともに近世と中世の遺物が混在しており、それ以前の遺物は少量である。第3-1層出土遺物(図34-1・2、写真61)

1は連管の吸口。真鍮製と見られ、羅宇との接続部に沈線を多点に巡らす。全長5.0cm、最大径0.8cm、重量4.04g。2はトキン高台の陶器底部片。高台は露胎で内面と外面部に土灰釉がかかる。高台径4.8cmを測る。

## 第3-2層出土遺物(図34-3~10、写真61・62)

3は瓦質土器で、鉢もしくは鍋の口縁部片と見られる。口縁端部内面を肥厚させる。外面は風化が著しいが、内面にはヨコハケが施されている。4も瓦質土器だが、やや硬質に焼成されている。直立する頸部を有し、口縁端部外側を肥厚させる。内面にはヨコハケ、外側は頸部にヨコナデ、肩部にタテハケが施されている。5は青磁口縁部片。口縁を軽く外反させている。内面に連弁文と見られる加飾が施されている。龍泉窯系か。6は土師器壺口縁部片。小片のため口径不明。軽く外反する口縁であり、端部は丸く取れる。内外面ともヨコナデが施されるが、内面には部分的にヨコハケが残る。7は土師器小皿。口径4.8cm、底径4.2cmに復元される。器高は0.9cmを測る。底部外側にわずかに糸切り痕が残る。8は瓦質土器足鍋の脚部片。土師質焼成となっている。内面には使用による煤が付着している。9も瓦質土器足鍋の脚部片である。脚端部をわずかに外方に突出させる。脚部片側面に指痕が明瞭に残る。10は陶器皿か。露胎の高台は幅広で低く、高台中央がわずかにトキン状に膨らむ。内面は薄く灰釉がかかる。高台径は5.2cmに復元される。

## 第4層出土遺物(図34-11~17、写真62)

11は土師器鉢。口縁を「く」の字形に屈曲させる。口縁、体部とも内外面丁寧なナデ調整が施されている。12は瓦質土器の足鍋脚部片。鍋底接合部で剥離している。脚内面が二次焼成を受け赤化している。13は染め付け磁器の高台付き碗もしくは皿。内面は見込み部二重闇線の内部に草花文が描かれている。外側には高台部に粗雑な2条の圓線が、体部下半には連続して円形状の模様が描かれているが具体的には不明。高台は豈付釉剥ぎで復元径5.2cmを測る。14は瓦質土器火鉢の口縁部-肩部片。わずかに張り出す肩部から直立気味に頸部が立ち上がり、口縁端部は内外面とも肥厚させている。頸部外側に縱方向の沈線が加飾される。頸部・口縁部は内外面ともヨコナデ、肩部内面はヨコハケとヨコナデ、外側は横方向のミガキが施される。15は瓦質土器足鍋の底部-脚部片である。脚は根本付近で折損している。脚接合部外側はヘラ状工具で丁寧にナデが施されている。底部内面はヨコハケ後ヨコナデ。16は瓦質土器擂鉢。体部内面はヨコハケをナデ消した後に7条または10条単位の卸目が施されている。見込み部には現状で4条の卸目が確認できる。外面調整はナデ。17は瓦質土器足鍋の脚部片。鍋底を取り込みながら被覆している。脚内面に明確な二次焼成痕、煤痕は見られない。

第3層から第4層にかけては近世遺物を含んでおり、以前指摘したように第3層は本地を耕地化するための客土、第4層は近世期まで不安定であった真締川が上流から押し流した土砂と木川の氾濫等により削られた丘陵の岩盤風化<sup>1)</sup>上に混ざり合い堆積した層と見なされる。

## 【註】

1) 横山成己(2006)「医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」,山口大学蔵文化財資料館(編)『山口大学蔵文化財資料館年報一平成16年度』,山口

小森精内(山口)大学医学部蔵内遺跡の調査

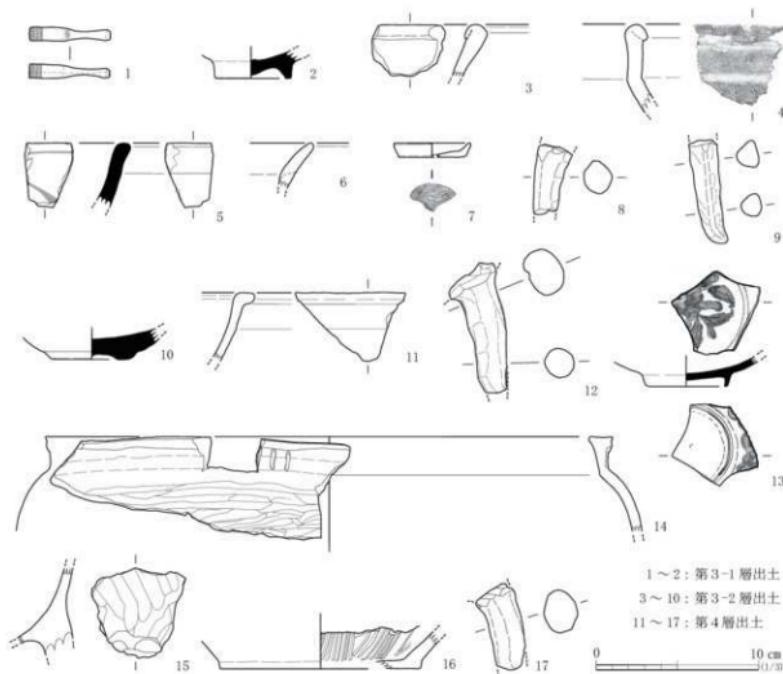


図34 出土遺物実測図



写真61 出土遺物①

小森精内(山口)大学医学部施内遺跡の調査



写真 62 出土遺物②

表3 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①②底2部縁2部器基	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
2	第3-1層	陶器 瓢か	底部	②4.8	①にぶい赤褐色(7.5R4/3)~ 暗赤褐色(10R3/1)②深緑	1mm以下の砂粒を少量含む	
3	第3-2層	瓦質土器 鉢か	口縁部		①灰色(2.5GY6/1)②灰色N4	1mm以下の砂粒を多く含む	
4	第3-2層	瓦質土器 壺か	口縁部		①灰色(N6) ②灰白色(10Y7/1)	4mmの礫をわずかに含む 2mm以下の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を含む	
5	第3-2層	青磁 瓢	口縁部		素地 灰色(7.5Y8/1) 釉 明緑灰(10GY7/1)	精良	龍泉窯系
6	第3-2層	土師器 壺	口縁部		①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	2mm以下の礫・砂粒を多く含む	
7	第3-2層	土師器 盆	口縁部 ~底部 ③(0.9)	①(4.8)②(4.2)	①浅黄色(2.5Y7/4) ②浅蓝色(2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	
8	第3-2層	瓦質土器 足鍋	脚部		にぶい褐色(7.5YR6/3)	2mm以下の礫・砂粒をわずかに含む 1mm以下の砂粒を少量含む	内側に提付着
9	第3-2層	瓦質土器 足鍋	脚部		灰黄色(2.5Y7/2)	2mmの礫をわずかに含む 0.5mmの砂粒を少量含む	
10	第3-2層	陶器 盆か	底部	②(5.2)	素地 にぶい黄色(2.5Y6/3) 釉 灰白色(2.5Y7/1)	0.5mm以下の砂粒を含む	
11	第4層	土師質土器 鉢	口縁部		①浅黄褐色(10YR8/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	2mmの礫をわずかに含む 1mmの砂粒を多く含む	
12	第4層	瓦質土器 足鍋	脚部		にぶい黄色(2.5Y6/3)	2mm以下の礫・砂粒を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
13	第4層	磁器 瓢か	底部	②(5.2)		精良	
14	第4層	瓦質土器 大鉢	口縁部 ~預部	①(35.0)	①②灰色(N4)	1.5mm以下の砂粒をわずかに含む	
15	第4層	瓦質土器 足鍋	底部~脚部		①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	2mm以下の礫をわずかに含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
16	第4層	瓦質土器 插鉢	底部	①(12.5)	①灰色(N4)②灰白色(5Y7/1)	2mm以下の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を含む	
17	第4層	瓦質土器 足鍋	底部~脚部		①灰白色(7.5Y7/1) ②灰色(N4)	1mm以下の砂粒を含む	

表4 出土遺物(金属器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
1	第3-1層	煙管 吸口	全長 5.0 最大幅 0.8 吸口径 0.6 重量 4.04g	

## (6) 立会調査(図35・36、写真63~66)

予備発掘調査終了後、平成22年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会により当工事計画に対する埋蔵文化財保護対応は予備発掘調査に止めることが承認された後、ただちに工事が着工されることになった。工事計画では、予備発掘トレンチの南西方向に連続して基礎坑が掘削されることになっていたため(図35、写真66)、予備発掘調査にて検出した層序の延長部を確認するため、掘削終了時に立会調査を実施することとした。

調査対象としたのは3箇所の基礎坑である。いずれも3m角で深度1.5mまで掘削が行われた。この基礎坑を北東から南西にそれぞれA調査区、B調査区、C調査区と定め、断面精査を行った。

調査の結果、各調査区において造成土下に

第2層:山耕土である灰色・オリーブ灰色・オリーブ黒色のシルト

第3-1層:土壤化した床土である灰色粗粒砂混じりシルト質極細粒砂

第3-2層:床上である灰色・オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト質極細粒砂または粘土質シルト

第4層:黒オリーブ灰色・緑灰～暗緑灰色細粒混じり細粒砂または中粒～細粒砂またはシルト

を確認した。土色、土質に微少な差はあるものの、予備発掘調査において確認された層序と同一と見なして良い。遺物に関しては、断面精査中にA調査区第3-2層より青磁の口縁部小片が、A調査区とC調査区の第4層より瓦質土器の体部小片が出上っているが、ここでは図示しない。

この他、9月6日に予備発掘調査区北端部コーナー付近の岩盤掘削工事中に立会を行ったが、地下2.2mまで同質の岩盤であった。ここでは断面写真的掲載を省く。

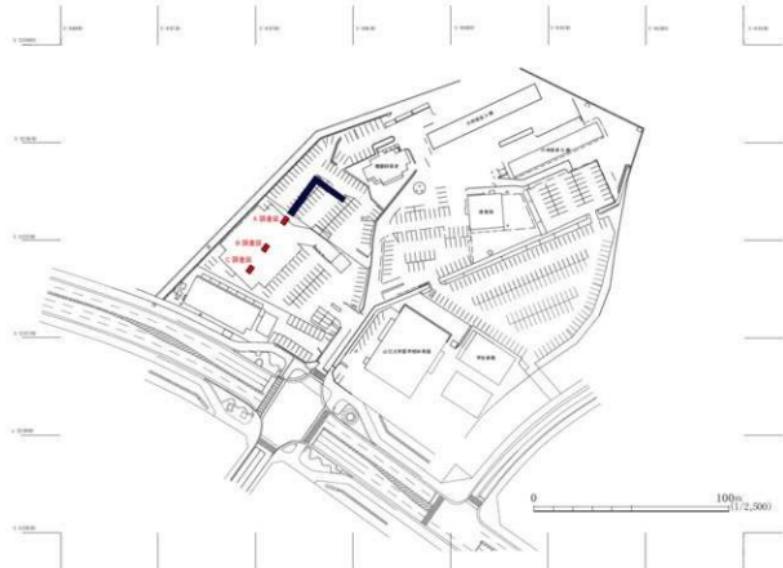


図35 調査区詳細位置図

小森橋内(山口)大学医学部橋内道路の調査

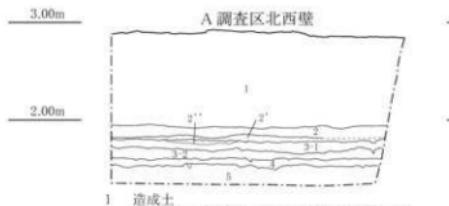


写真 63 A 調査区北西壁土層断面  
(南東から)

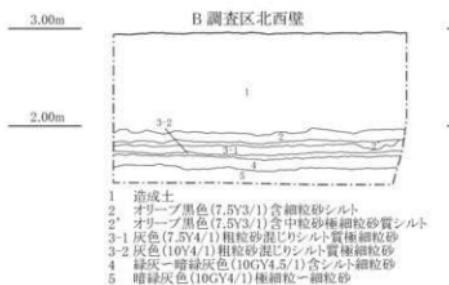


写真 64 B 調査区北西壁土層断面  
(南東から)

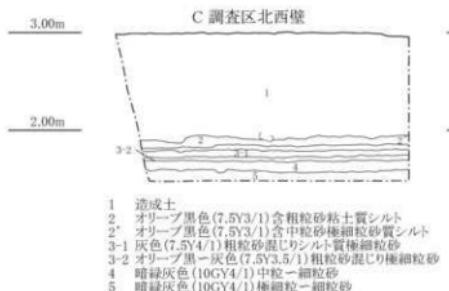


写真 65 C 調査区北西壁土層断面  
(南東から)

0 2m  
1/50

図 36 A ~ C 調査区北西壁土層断面図



写真 66 調査地遠景 (北から)

## (7) 小結

現在山口大学小串構内は、宇部市域を南北に流れる真締川の右岸に面して所在している。この真締川は、現在は小串構内東側からそのまま南進を続け河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町（現JR尼能駅南側）付近を河口としていたようである。近世文書「舟木宰判本控」に所収されている元ノ二月（寛政11年（1799）2月）の「御居中上候事」には、「宇部村富當前殿領本川筋砂余分流出、川尻は達下折にて砂引不申、次第二川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、乍々御所務落難百姓迷惑不人形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度、一」と記されている。真締川が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせてほしいという内容である。また、同文書中には、河口付け替え工事の結果、「一 強水砂共ニ引宜ニ付、只今迄之川をは川尻留被申附候、一」とあり、付け替え工事によって川の流れが良くなつたので旧河口を封鎖して耕地にしたいと萩藩に願い出ている。

この文書から、18世紀末の真締川河口一帯の状況を窺うことができる。つまり当時の真締川が「上砂を多く流す川」であったこと、そしてその土砂により河口一帯は度々洪水に見舞われたため、氾濫原の様相を早していたであろう、ということである。

小串構内は標高約3mと低く、既往の調査により大学造成時構内全域に1～1.5mの盛土が行われており、盛土直下に旧耕土が遺存することが判明している。旧耕土下には粘土～シルト層が確認されるが、層内には近世後半を下限とする複数時代の遺物が混入している。上の文書から、小串構内も元来は耕作に不向きな土地であり、江戸時代後期の真締川河口の付け替えによりようやく土地が安定し、海生砂層や土砂が堆積した脆弱な砂層の上に床土となる客土を盛ることによって、耕作地とすることができたのだろう。

不安定な低地に立地する小串構内であるが、唯一丘陵に接触するのが今回調査を実施した構内北端部である。同地における初の発掘調査となり、集落遺跡等の発見が期待されたが、丘陵上面の削平が著しく、埋蔵文化財が遺存する状況に無かった。

小串構内は南西部に空閑地が少なく、開発は構内北東半部に集中することが予想される。集落等の発見は見込めないにせよ、堆積層中には縄文時代から近世までの多くの遺物を含んでいる。今後も埋蔵文化財の保護に十分な配慮が必要である。

## 【註】

1) 小川国治(1992)「第1編近世第3章近世村落の成立と発展」、宇部市史編纂委員会(編)『宇部市史通史編』上巻、宇部(山口)

## 2. 医学部地域医療教育研修センター新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 職員宿舎南方駐車場敷地

調査面積 約156m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年1月11日～2月14日

調査担当 横山成己 松浦暢昌

### 調査結果

#### (1) 調査の経緯(図37・38、写真67・68)

小串橋内北東部、医学部職員宿舎南方の駐車場敷地において、医学部地域医療教育研修センターの新営工事が計画されたことを受け(平成21年度第13回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成22年3月23日開催)にて承認※旧事業名「(小串)コアセンター新営工事」)、建物建設予定地において予備発掘調査を実施する運びとなった。予備発掘調査対象範囲は、当地点周辺では既往の調査例が存在しないものの、平成16年から17年にかけて実施した医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査において駆員宿舎周辺に濃密に遺物包含層が確認されていることから、建物建設予定地の北半部、約156m<sup>2</sup>に定めた。

#### (2) 調査の経過(写真74)

調査は平成23年1月11日より着手した。2日間をかけて重機掘削を行い、造成土を除去し、13日には旧耕土上面を検出。この時点で現地表下約1.4mとなつたため旧耕土上面で幅1.5mの犬走りを設け、以降南西スロープ側を除き「コ」の字状に側溝を下げながら下層を確認し、各堆積層の掘削を進めた。

2月4日までに第5層中まで掘削を進めたところ、遺物の出土が皆無となり、湧水も著しくなったために人力掘削を中止し、写真撮影を9日までに終了、平面・断面実測を11日までに完了した。なお、埋め戻し時に調査区南西端部を重機により深掘りし、第5層の層厚を確認した。

#### (3) 層序(図39、写真79・80)

今回調査では地表下2.4mまでの地層を重機と人力による掘削で確認し、地層は5層に区分された。



図37 調査区位置図

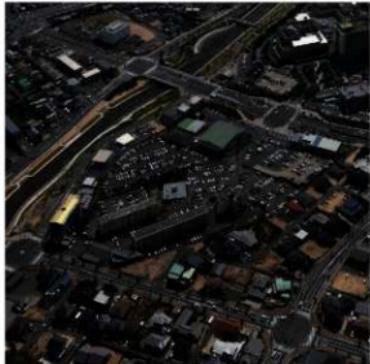


写真67 調査前遠景（北東から）



写真68 調査前近景（北西から）

第1層は現代の整地上層で層厚は約1.4mである。真砂土による整地であるが、トレンチの南側約14mでは深さ0.7m以下に石炭のボタの埋め立てがみられる。

第2層は黒褐色～暗灰黄色の粗粒砂を少量含むシルト層で層厚はおよそ0.1～0.15mである。暗色を呈しており、トレンチ中央北側付近に杭列と掘込みを伴う畦畔が確認される他、それらと同一方向をとる踏込み痕や植物の根が確認された。出土する磁器等の遺物と併せて近代の耕土と見られる。第2層の下部には層厚約0.01～0.1mの灰～オリーブ黒色含細顆粒砂混じり極細粒砂質シルト層が確認できる。この層は畦畔より北側には確認できず、畦畔から南側に向かって厚くなる傾向にあるが、明確な遺物の出土がなく堆積時期の推定は困難である。

第3層は第3-1層と第3-2層に分類される。第3-1層は黒灰黄色シルト質極細粒砂であり層厚は最大でも約0.05m程度である。薄く暗色を呈する層ではほぼ同一標高に分布するが、上位層に削平され不連続な様相となる。土壤化が進行した水田底土の一部と見られる。第3-2層は灰オリーブ色シルト質極細粒砂層で層厚約0.1mとなる。第3-1層よりも砂質が減少する。耕地化に伴う客土と見られる。

第4層は砂質が多く混ざり始める層で、第4-1層から第4-5層に細分される。第4-1層は灰色シルト質粘土層で層厚は最大で約0.1mである。上層からの植物根の痕跡がみられる。第4-2層は灰オリーブ色粗粒砂～細颗粒混じり粘質土シルト層で層厚約0.05～0.15mである。上層より植物根の鉄分を多く含み、南側ほど鉄分が増加する。南側へ緩傾斜している。第4-3層は灰オリーブ色細颗粒～粗粒砂混じり粘土層で層厚約0.1～0.2mである。植物根の痕跡がみられる他、南側では禾本科とみられる植物遺体も若干含まれる。第4-4層は灰色細颗粒混じり粘土質粗粒砂層で層厚は最大で約0.2mである。植物根の痕跡を少量含み、南側で植物遺体をやや多く含む。第4-2層同様、南側に向かい層厚を増し、北側の分布は確認できなかった。第4-5層は灰色～暗オリーブ灰色の細粒～粗粒砂質粘土層で層厚は0.05～

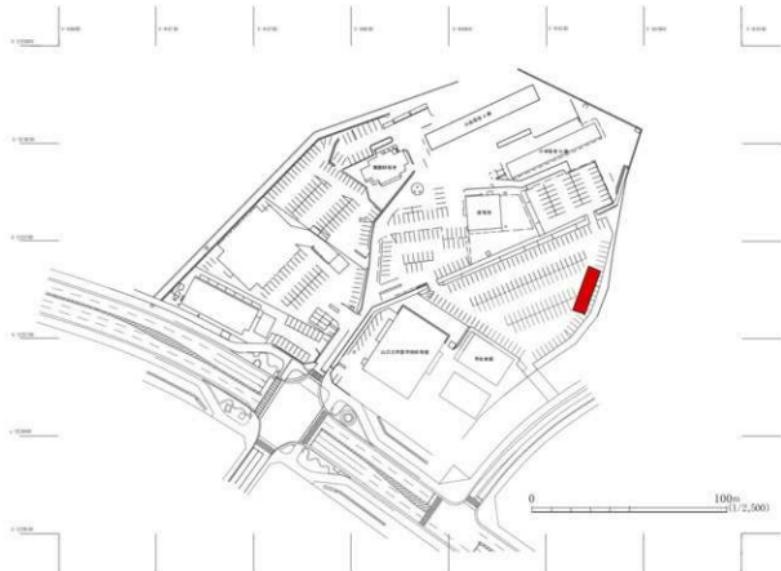


図 38 調査区詳細位置図

0.25mである。全体的に10cm大の粘土質の偽縫を含む。南側で植物遺体を多く含む。第4層は中世以前の土器類が出土するが、特に第4-3層と第4-4層の層境付近から、縄文から奈良時代の土器片の散布が多数確認された。

第5層は暗オリーブ灰色含粘土細粒砂へ細縫層である。層厚はおよそ0.8m。第5層の人力掘削および重機掘削では遺物は確認されなかった。これより下層は重機掘削部において第6層と見られる灰色シルト質細粒砂を確認したが、湧水と地面前落の危険があつたため断面精査を行わなかった。

#### (4) 遺構(図39、写真70~73)

第3-1層上面において、畦畔を確認した(写真71)。畦畔は幅約1m、高さ0.15mの規模で北西-南北方向に設けられている。また畦畔中央部には0.7~0.8m間隔で木杭が打ち込まれていた。畦畔をはさみ幅0.4~0.8m、深さ0.05mの溝が設けられていることも確認した。

この他、調査区南西部にて同じく第3-1層上面で東西に走向する溝を1条(SD1)検出した(写真72・73)。幅約0.7m、深さ0.15mを測る。埋土からは磁器7点、陶器16点、土師器または土師質土器13点が出土しているが、いずれも細片である。SD1は畦畔と方向を違えており、性格不明である。

#### (5) 遺物(図40~43、写真76・77・81~84、表5・6)

遺物は第2層から第4層にかけて出土している。第2層は大学造成前の旧耕土で、近世以前の遺物も含むが大多数は近代のものであるため本稿では省略する。

##### 第3-1層出土遺物(図40、写真81・82)

2は磁器染付碗。外面に圓線を巡らせ文様帯を区画し、内部に菊花を上丁反転させながら描く。内面は無文。口径は7.4cmに復元される。5は型押し貝殻文様の磁器紅皿。口径4.6cmに復元される。6は粗陶器の鉢。外面は瓦質焼成となっており、内面には自然釉がかかる。蓋受けの口縁は外方に張り出している。復元口径18.9cm、胴部最大径20.0cm。7は陶器底部片。底部外面は露胎、内面と外面上部に鉄釉がかかる。外面底部直上に胎土日が付く。復元底径10.0cm。8は陶器底部片。内外面とも露胎であるが、内面には薄緑色の自然釉がかかる。外面底部直上に胎土日が付く。復元底部径8.2cm。9も陶器底部片。底部は外面上部とも露胎であるが、内面に透明の自然釉がかかる。体部外面には灰釉が掛けられている。10は陶器蓋天井部片。擬宝珠形のつまみを有する。つまみ径は1.9cmを測る。12は陶器擂鉢口縁部片。口縁端部を丸く肥厚させる。鉢日は連続して施されている。15は土人形。正面上面を欠失しているが、持物と太鼓腹から布袋和尚を模ったものと見られる。部分的に赤色塗彩が残る。全長3.7cm、重量10.32gを測る。16は扁平な土製玩具。泥面子か。獅子狛犬と見られるが、阿形・吽形の判別が付かない。全長2.25cm、重量1.44g。17も同じく扁平な土製玩具。こちらも泥面子であろうか。平面形態横円形で、中心に突線で四角形が描かれている。四角形の上下に薄く「天」の文字と「保」と見られる文字が刻まれていることから、天保通宝を模したものと思われる。全長2.05cm、重量1.06g。18は管状土錘片。残存長2.5cm、最大幅1.25cm、孔径0.45cmを測る。19は棒状石製品。全長3.45cm、最大幅0.45cmの棒状製品で、全面を丁寧に研磨し、両端を鋸く尖らしている。山口大学医学部構内遺跡では過去にも類似品が出土しているが、所蔵時期や用途が特定できない。20は煙管雁首。全長2.0cmと短い。重量1.9gを測る。

##### 第3-2層出土遺物(図40、写真81)

1は菊花型の磁器染付皿。見込み二重圓線内に文様が描かれているが内容は不明。口径14.0cmに復元される。3は磁器碗。外面に山崩文が描かれる。復元口径5.4cmとなり、猪口と見られる。4は合子

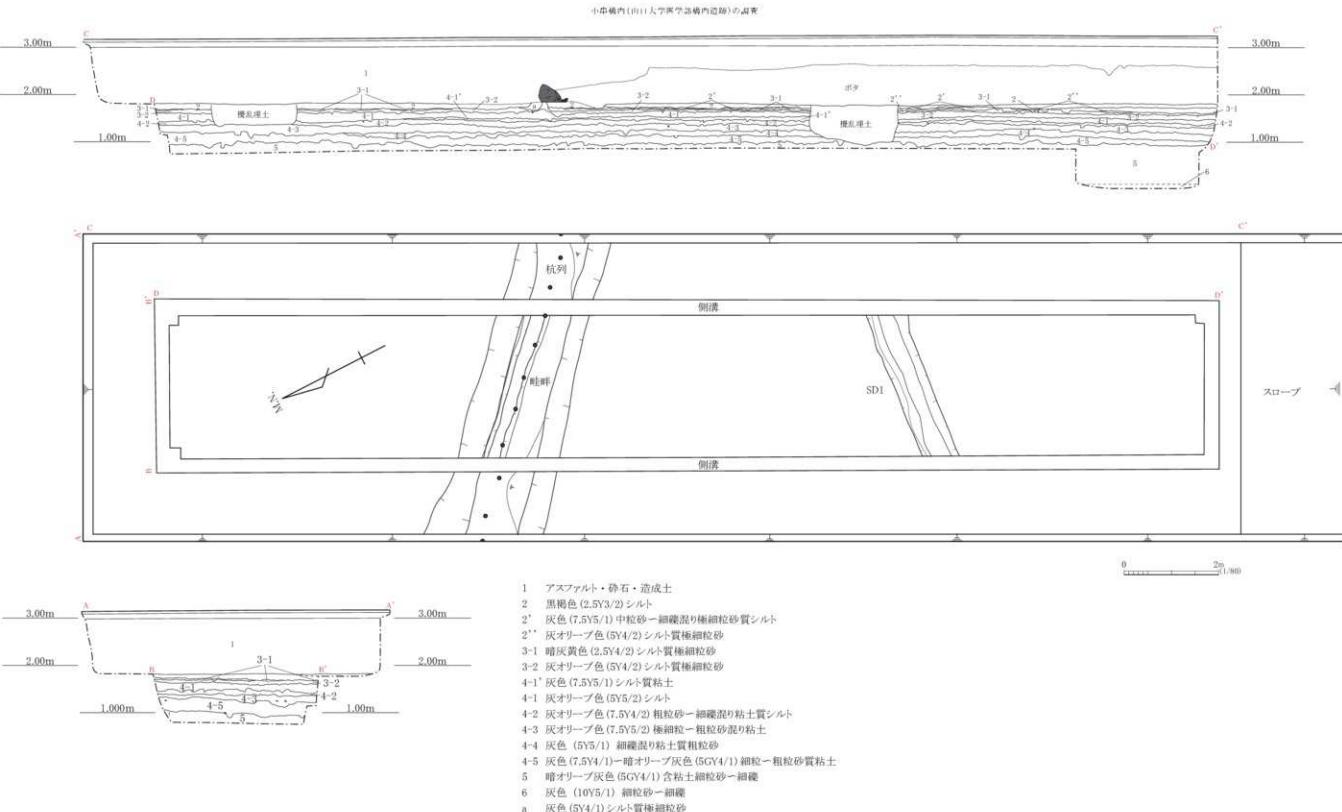


図 39 調査区平面図・断面図



写真 69 第2層検出状況 (南西から)



写真 70 第3-1層検出状況 (北東から)



写真 71 畦畔検出状況 (南から)



写真 72 SDI 検出状況 (南東から)



写真 73 SDI 完掘状況 (南東から)



写真 74 第3-2層掘削風景 (南東から)

小森精内(山口)大学医学部境内道路の調査



写真 75 第4-1層検出状況（北東から）



写真 76 第4-3層遺物出土状況（南西から）



写真 77 第4-3層鉈壺出土状況（南西から）

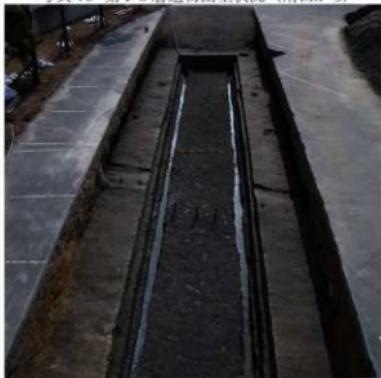


写真 78 挖削終了状況（北東から）



写真 79 北東一南東壁土層断面（南西から）



写真 80 南東壁土層断面（北から）

の身。外面に漢字状の染付が見られる。器高2.1cm、小片のため口徑復元不能。11は陶器蓋口縁部片。外面に鉄軸で波状に刷毛目が施される。香炉蓋か。13は陶器鉢口縁部小片。口縁端部を外方に折り返し突起させる。内面下端にわずかに卸目状の沈線が見られ、插鉢と思われる。14は土師質土器の壺口縁部片。口縁外端を断面三角形状に肥厚させる。内外面ともにミガキ気味にナデ調整が施されている。小片のため口徑復元不能であるが、大甕と見られる。

#### 第4-1~3層出土土器(図41、写真82)

ここに報告する遺物は調査区側溝掘削中に出土したもので、所属層の特定が困難なものである。21は土師器坏。丸底気味の底部から直線的に体部が立ち上がる。体部外面には明瞭にロクロ水引き痕が残る。内外面とも風化が著しく器面調整の観察が困難であるが、体部内面には回転ナデが施されている。上半と下半で焼成具合が異なり、重ね焼かれたことが分かる。復元口径14.2cm、復元底径11.0cm、器高4.8cmを測る。22は土師器坏の底部、23は口縁部の小片である。前者は古代、後者は古墳時代中後期に所属する。24は弥生土器壺口縁部片。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁は短く外反する。体部外面にタテハケが施されている。25は土師器壺口縁部片。精選された胎土で、シャープなつくりである。外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデが施される。26も同様の特徴を持つ壺の口縁部片であるが、25に比して胎土が粗くつくりもやや粗雑である。27は須恵器坏身の口縁-体部片である。焼成不良で土師質となっている。28は須恵器口縁部小片。壺瓶類の口縁部と見られる。

#### 第4-3層出土遺物(図42、写真82~84)

29は刻日空帶文土器の口縁部小片。30は縄文土器深鉢体部片。内外面に条痕が残る。31は弥生土器高壺口縁部片。強く外反する口縁で、坏との接合部で折損している。32も高壺口縁部片。31に比して大きく外方に開く。33は弥生土器壺口縁-体部片頸部を「く」の字状に屈曲させる。口縁端部は欠失している。34は壺口縁か。35、36は弥生土器底部と見られる。35は平底、36は上げ底である。37は壺体部片。外面に細かなハケが施される。38は土師器壺口縁-体部片。頸部を「く」の字状に短く屈曲させ口縁に至る。外面にタテハケが施されている。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。39も土師器壺口縁-体部片。頸部から口縁部にかけて強く外反する。体部器壁に比して口縁は分厚く、内面に「×」状のヘラ記号を施す。40・41は土師器壺口縁部小片。42は釣り鐘型の壺壺。当遺跡の初例である。口径6.3cm、器高9.1cmを測る。紐孔径約1cm。43・44は須恵器壺。43は肩部、44は体部片であり、両者とも外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕が残る。45は須恵器坏蓋。口縁端部に段を有する。器面の状態が極めて良好である。やや焼き歪みが生じており、口径は14.2~14.9cm、器高4.9cmを測る。46は古代の須恵器坏蓋で、天井部稜線から径を復元している。扁平な器形で口縁はやや屈曲気味に外方に開き壠部は丸く收めている。こちらも器面の状態が良好である。47は須恵器坏口縁部、48は見慣れぬ器形の須恵器であるが、鉢もしくは器台の口縁部と思われる。49は須恵器壺の底-体部片。外方に開く低い高台が底部外縁に巡らされる。内部底面に灰を被る。高台内径10.2cmに復元される。

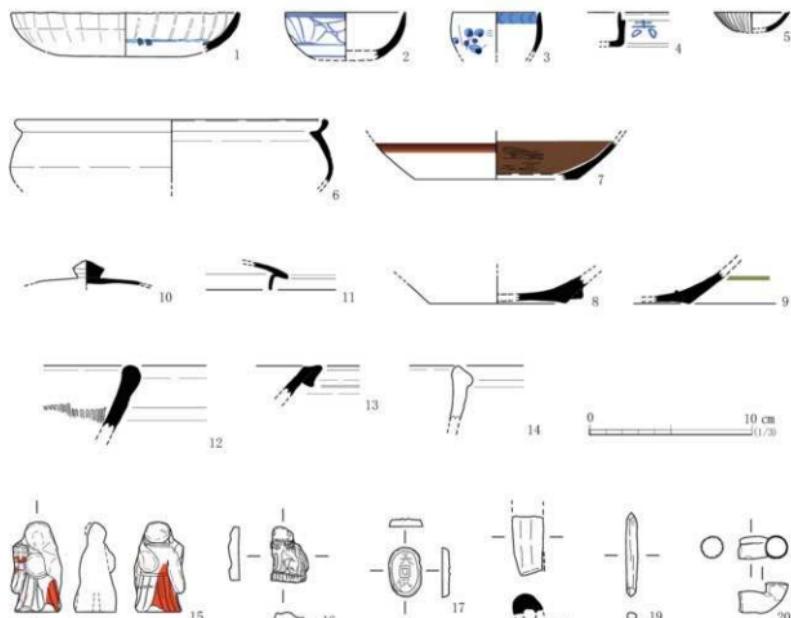
#### 第4-4層出土遺物(図43、写真84)

50は土師器脚部片。器面の遺存状況が良く脚内面のハケ、絞り痕が明瞭に残る。51は土師器壺口縁部片。口縁端部をわずかに外反させる。52~55は土師器坏の口縁、底部小片。いずれも古代もしくは中世に所属するものである。

#### 【註】

1)横山成己(2006)「医学部職員宿舍地盤下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学史料文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成16年度—』,山口 の図21~24

小堀精内(1)(1) 大学医学部施設内道路)の調査



2・5～10・12・15～20：第3-1層出土

1・3・4・11・13・14：第3-2層出土

図40 第3層出土土器・土製品・石器・金属器実測図

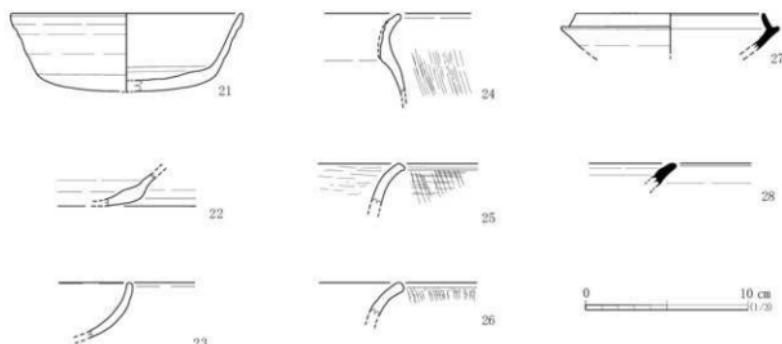


図41 第4-1～3層出土土器実測図

小森精内(山口)大学医学部施内道路の調査

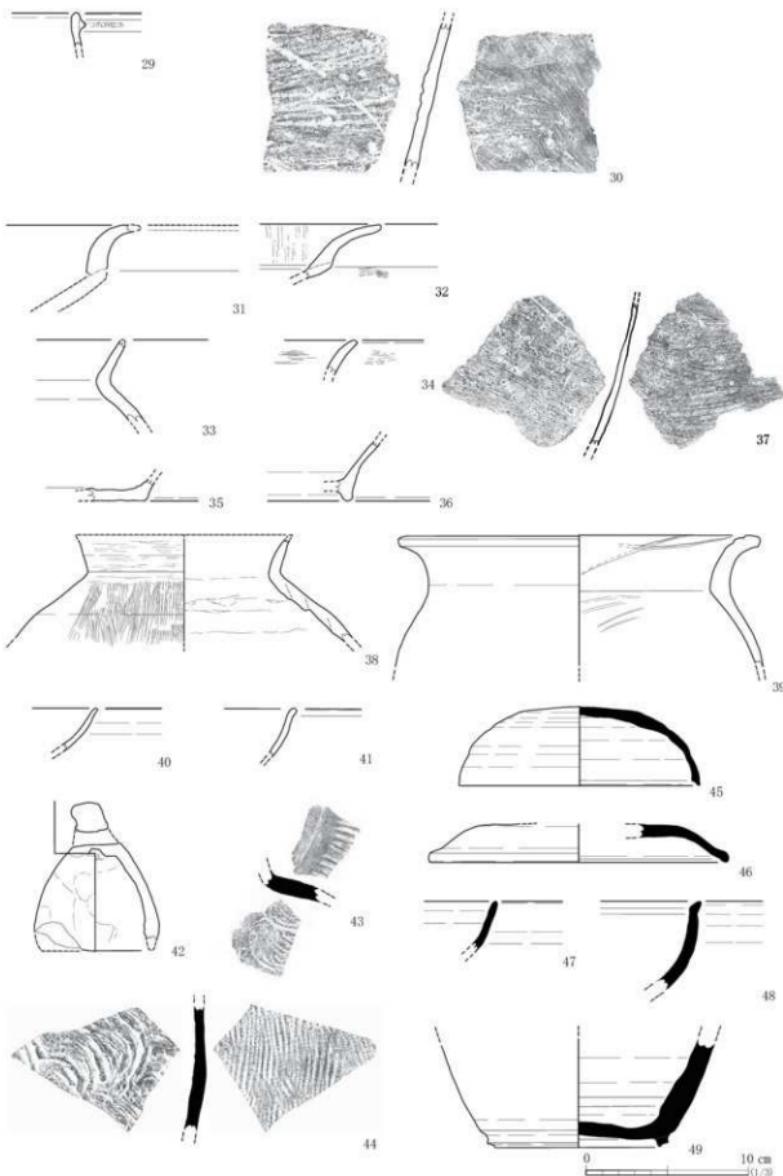


図 42 第4-3層出土土器実測図

小森精内(山口)大学医学部蔵内遺跡の調査

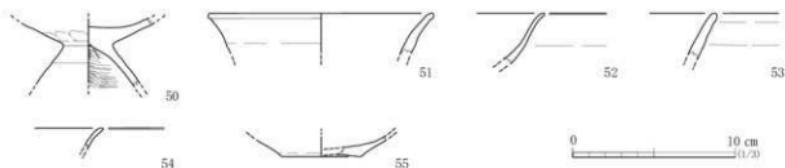


図43 第4-4層出土土器実測図



写真81 出土遺物①

小森精内(山口)大学医学部境内遺跡の調査



写真 82 出土遺物②

小森精内(山口)大学医学部境内遺跡の調査



写真 83 出土遺物③

小森精内(（川）大学医学部施内道路)の調査



写真 84 出土遺物④

表5 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①縁部②底部③内部	色調 ①外面 ②内部		胎土	備考
					素地	染付		
1	第3-2層	磁器 菊花皿	口縁部	①(14.0) ②(3x2.7)	白色 藍色		精緻	見込みに移 りが残る
2	第3-1層	磁器 瓢	口縁部	①(7.4) 残存高 2.9	白色 染付 紅~青~藍色		精緻	外面菊花文
3	第3-2層	磁器 瓢	口縁部	①(5.4) 残存高 2.5	白色 染付 青~青黒色		精緻	外面山川文
4	第3-2層	磁器 合子 身	口縁部	②(2.1)	白色 染付 藍色		精緻	
5	第3-2層	磁器 紅皿	口縁部	①(4.6) 残存高 1.2	白色 釉裏 透明		精緻	
6	第3-1層	粗陶器 豆	口縁部	①(18.9) 残存高 3.9 体部最大径 20.0	①暗灰色(N3) ②灰白色(2.5Y8/2)		精緻	
7	第3-1層	陶器 豆か	底部	②(10.0) 残存高 2.35	素地 釉 ①褐色(7.5YR4/3) ②褐色(7.5YR4/3) ~褐色(7.5YR3/1)		精緻	
8	第3-1層	陶器 豆か	底部	②(8.2) 残存高 1.7	素地 灰白色(2.5Y8/1) ②自然釉 オリーブ黄色 (7.5Y6/3)		精緻	
9	第3-1層	陶器 豆か	底部	残存高 2.1	素地 灰黄色(2.5Y7/2) ①釉 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) ②自然釉 灰白色(5Y7/2)		精緻	
10	第3-1層	陶器 蓋	天井部	残存高 1.5 つまみ径 1.9	①釉 灰黃褐色(10YR4/2) ②素地 灰黄色(2.5Y6/2)		精緻	
11	第3-2層	陶器 香炉蓋	口縁部	残存高 1.7	素地 灰褐色(7.5YR5/2) 釉 浅褐色(2.5Y7/4)~ 黒褐色(7.5Y3/2)		精緻	擬宝珠 つまみを 有する
12	第3-1層	陶器 描鉢	口縁部	残存高 4.2	素地 灰色(N4) 釉 反褐色(5YR4/2)		やや粗	鉄釉
13	第3-2層	陶器 鉢(描鉢か)	口縁部	残存高 1.9cm	素地 灰色(N5) 釉 暗赤褐色(5YR3/3)		精緻	鉄釉
14	第3-2層	土師質土器 大甕	口縁部	残存高 3.4	①②灰白色(2.5Y8/1)		密	
21	第4-1~3層	土師器 壺	口縁部 ~底部	①(14.2) ②(11.0) ③(4.8)	焼成良好部 ①②灰白色(2.5Y8/2) ②(11.0) 焼成不良部 ①②黄褐色(2.5Y5/1)		密	
22	第4-1~3層	土師器 壺	底部	残存高 2.1	①灰白色(2.5Y8/1) ②灰白色(10YR8/2)		密	
23	第4-1~3層	土師器 壺	口縁部	残存高 3.5	①②灰褐色(2.5Y7/2)		密	
24	第4-1~3層	弥生土器 壺	口縁部 ~頭部	残存高 5.1	①にじみ 壱色(5YR7/3) ②壇色(2.5Y6/6) 灰白色(5YR8/2)		密	
25	第4-1~3層	土師器 壺	口縁部	残存高 2.6	①浅黄褐色(10YR8/4) ②浅黄褐色(10YR8/3)		密	
26	第4-1~3層	土師器 壺	口縁部	残存高 2.1	①灰褐色(5YR6/2) ②明褐色(7.5YR7/2)		密	
27	第4-1~3層	須恵器 壺身	口縁部 ~体部	①(7.5) 残存高 2.3	①灰白色(10YR8/1) ②浅黄褐色(10YR8/3)		やや粗	焼成不良
28	第4-1~3層	須恵器 壺瓶類	口縁部	残存高 1.4	①②灰白色(10YR8/1)		やや粗	焼成不良
29	第4-3層	満文土器 深鉢	口縁部	残存高 2.1	①②黒色(10YR2/1)		密	突帯文
30	第4-3層	満文土器 深鉢	体部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)		密	条痕
31	第4-3層	弥生土器 高杯	口縁部		①明褐色(7.5YR7/2) ②にじみ 壱色(5YR7/3)		密	杯部との接合面に剥離
32	第4-3層	弥生土器 高壺	口縁部	残存高 3.3	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰褐色(5.5/1)		やや粗	
33	第4-3層	弥生土器 裹	口縁部 ~頭部	残存高 5.1	①浅黄色(2.5Y7/3) ②にじみ 壱色(10YR7/4)		密	
34	第4-3層	弥生土器 裹	口縁部	残存高 2.2	①②浅黄色(10YR8/4)		密	
35	第4-3層	弥生土器	底部	残存高 1.35	①②にじみ 黄色(2.5Y6/3)		やや粗	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①②③④⑤⑥⑦⑧	色調 ①外面 ②内面		紹介	備考
					①灰黄色(2.5Y6/2)	②浅黄色(2.5Y7/3)		
36	第4-3層	弥生土器 壺	底部	残存高3.5	①②黄褐色(2.5Y5/3)	粗		
37	第4-3層	弥生土器 壺	体部		①黄褐色(2.5Y5/3)	密		
38	第4-3層	土師器 壺	口縁部 ～体部	①(13.4)	①②オリーブ灰色(5Y6/3)	密		
39	第4-3層	土師器 壺	口縁部 ～体部	①(22.3) 残存高8.0	①②灰白色(10YR8/2)	密	口縁内面に「X」字状記号	
40	第4-3層	土師器 壺	口縁部	残存高2.7	①②灰白色(2.5Y8/2)	精緻		
41	第4-3層	土師器 壺か	口縁部	残存高3.0	①②に5Y4緑色(7.5YR7/3)	やや粗		
42	第4-3層	土師器 瓶蓋	口縁部 ～縫合部	①6.3②9.1 孔径1～1.1	①②灰黃色(2.5Y7/2)	密		
43	第4-3層	須恵器 壺	肩部		①灰色(7.5YR6/1) ②灰白色(N7)	密		
44	第4-3層	須恵器 壺	体部		①灰白色(N7)～灰色(N6) ②灰白色(N7)	密		
45	第4-3層	須恵器 壺蓋	口縁部 ～底部	①(14.2～14.9) ③4.9	①灰色(N4)～灰褐色(N5)	密	歪み有り	
46	第4-3層	須恵器 壺蓋	口縁部	①(18.4)	①灰色(N6) ②灰白色(10Y7/7)	密		
47	第4-3層	須恵器 壺身	口縁部	残存高2.4	①②灰白色(2.5Y8/1)	密		
48	第4-3層	須恵器 鍋か	口縁部	残存高3.2	①②灰色(N6)	密		
49	第4-3層	須恵器 蒜	底部～ 体部	②高台内径10.2 高台外径11.2 残存高6.7	①灰色(N4) ②灰色(N6)	密		
50	第4-4層	土師器 腳付鉢 ～要部	鉢底部 ～要部	残存高4.3	①②浅黄褐色(7.5YR8/3) 部分的に赤褐色(10R6/6)	密		
51	第4-4層	土師器 蒜	口縁部	①(3.8) 残存高2.55	①②灰白色(2.5Y8/2)	やや粗		
52	第4-4層	土師器 壺	口縁部	残存高3.1	①②灰白色(2.5Y8/2)	精緻		
53	第4-4層	土師器 壺	口縁部	残存高2.9	①②灰白色(2.5Y8/1)	密		
54	第4-4層	土師器 壺か	口縁部	残存高1.3	①②灰白色(2.5Y8/2)	精緻		
55	第4-4層	土師器 壺か	底部	②(5.0) 残存高1.3	①②灰白色(2.5Y8/2)	密		

表6 出土遺物(土製品・石器・金属器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
15	第3-1層	土人形 布袋か	全長3.7 最大幅2.1 最大厚1.7 重量10.32g	部分的に赤色顔料が残る
16	第3-1層	泥面子か 虎子狛犬	全長2.25 最大幅1.4 最大厚0.5 重量1.44g	
17	第3-1層	泥面子か 天保通宝	全長2.05 最大幅1.3 最大厚0.3 重量1.06g	
18	第3-1層	土鍬	残存長2.5 孔径0.45 残存部最大幅1.25	
19	第3-1層	棒状石製品	全長3.45 最大幅0.45 重量1.21g	チャート製か
20	第3-1層	煙管 雅首	全長2.0 高さ1.2 幅0.92～0.94 重量1.90	

## (6) 小結

当調査地は職員駐車場として長く使用されていたこともあり、地下の様相が不明確な状況にあった。今回の調査により、既往調査同様の堆積状況、遺物包含状況が確認されたことは大きな成果と言える。

堆積層の由来等に關しては前項小結に記しているので省略するが、当調査の4層出土遺物に関しては多少の注意が必要である。出土した土器、特に古墳時代から古代にかけての土師器と須恵器は摩耗、風化が少なく、遠方から土砂とともに運ばれてきたとは考え難い。由来を近隣地に求めざるを得ないであろう。当地から最も近い周知の埋蔵文化財包蔵地は北方600mに位置する小串古墳群であり、未だ近隣に集落遺跡は確認されていないが、将来の発見を期待したい。

## 第5節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

### 1. 教育学部附属光中学校防球ネット設備工事に伴う立会調査

調査地区 光構内中学校体育館北東側空閑地

調査面積 1m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年8月19日

調査担当 横山成己

調査結果 教育学部より、附属光中学校体育館北東側に防球ネットを新設する事業計画が提出された。ネット支柱基礎部はボーリングにより掘削されたため、遺構・遺物の確認は極めて困難な状況と判断されたが、筆者はかつて光構内において多量の遺物を包含する黒褐色砂礫層の分布域を考察したことがあるが、光中学校体育館は推定分布域の中心に立地するため、該当地に遺物包含層が遺存する可能性は極めて高いと推定された。よって掘削後の土層観察と排土中の遺物確認を目的に立会調査を実施することとなった。

調査の結果、現地表下1.3mまでが造成土であり、その下位に遺物包含層と推定される層厚約0.3mの黒色砂質土層が目視により確認された。さらに下位には褐色の海砂と思われる堆積層が存在するようであった。排土はボーリングにより複数層が混合して上がってくるため、黒色砂質土を判別できる状況にならぬ、遺物も確認されなかつた。

調査地点は海岸線に近く、構内西部の丘陵付近に比して遺物包含層も現地表深くに遺存することが想定される。今後の開発計画に対しては旧地形の高低差を意識しての埋蔵文化財保護対応が必要である。

#### 【註】

- 横山成己(2005)「光山文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度』、山口



図44 調査区位置図



写真85 土層断面 (南西から)



図45 土層断面柱状図

## 付節1 平成22年度 山口大学構内遺跡調査要項

## 山口大学大学情報機構規則

改正 平成18年3月1日規則第27号

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則(平成16年規則第1号)第9条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)の大学情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学大学情報機構(以下「機構」という。)に關し必要な事項を定める。

(組織)

第2条 機構は、次の組織をもって組織する。

(1)図書館

(2)メディア基盤センター

(3)唯蔵文化財資料部

2 前項の組織に關し必要な事項は、別に定める。

(業務)

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1)大学情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に關すること。

(2)大学情報及び情報基盤の整備の施策及び実施に關すること。

(3)情報セキュリティの施策及び実施に關すること。

(4)その他機構が必要と認めた事項に關すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究施設及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

(運営委員会)

第4条 機構に、機構の管理及び運営に關する事項を審議するため、山口大学大学情報機構運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報セキュリティ委員会)

第5条 機構に、情報セキュリティに關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会(以下「情報セキュリティ委員会」という。)を置く。

2 情報セキュリティ委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報基盤整備委員会)

第6条 機構に、情報基盤の整備に關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会(以下「情報基盤整備委員会」という。)を置く。

2 情報基盤整備委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(機構長)

第7条 機構に機構長を置き、定期情報担当副学長を行つて充てる。

2 機構長は、機構の業務を統括する。

(副機構長)

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教員のうちから機構長が指名した者をもつて充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である前学長の任期の終期を超えることはできない。

5 副機構長に次員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の残任期間とする

(専任教員)

第9条 機構に、専任教員を置く。

2 専任教員の参考は、運営委員会の議にに基づき、学長が行う。

3 専任教員の選考の参考に關し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 機構に關する事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

(規則)

第11条 この規則に定めるもののが、機構に關し必要な事項は、別に定める。

(附則)

この規則は、平成18年1月1日から施行する。

平成22年度山口大学構内規則調査要項  
**山口大学埋蔵文化財資料館規則**

平成16年4月1日規則第148号

改正 平成17年3月21日規則第52号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構運営委員会(平成16年規則第13

9号)第2条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)の組織及び運営に關し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法(昭和25年法律第214号)に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収集・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

- (1)本法人構内等から出した埋蔵文化財の収集・展示及び調査研究
- (2)本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行
- (3)その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

(1)館長

(2)副館長

(3)資料館所属の専任大学教育職員

(4)その他必要な職員

2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の趣に基づき、館長が委嘱する。

(館長)

第5条 館長は、大学情報機構長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任の教授又は准教授のうちから山口大学大学情報機構運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を許さない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に關し、館長を助けるものとする。

(事務)

第7条 資料館に関する事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

(規則)

第8条 この規則に定めるもののほか、資料館に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 第5条第1項の規定にかかる限り、当分の間、館長は、大学情報機構運営委員会のうちから大学情報機構長が指名した者をもって充てる。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

**山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規**

(趣旨)

(4)その他資料館に關し必要な事項

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構運営委員会(平成16年規則第140号)第8条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に關し必要な事項を定める。

(組織)

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

(1)構長

(2)副構長

(3)館長

(4)副館長

(5)資料館所属の専任大学教育職員

(6)考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員

(7)メディア基盤センター所属の専任大学教育職員のうち館長が指名した者1名

(審議事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)に關し、次の事項について審議する。

(1)管理及び巡回に關する事項

(2)整備充実に關する事項

(3)予算に關する事項

(8)施設環境部長	第6条 専門委員会が必要と認めたときは、専門委員以外の者を専門委員会に出席させることができる。
(9)情報環境部長	
(10)情報環境部学術情報課長	(部会等)
(11)空港調査地に開港のある部局の事務部の長	第7条 専門委員会は、必要に応じて部会等を開くことができる。
(任期)	2 部会等に開くべき事項は、専門委員会が別に定める。
第4条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が 生じた場合の喪任の委員の任期は、前任者の候任期間とする。	(事務)
(委員長)	第8条 専門委員会の事務は、情報環境部学術情報課において処理する。
第5条 専門委員会に委員長を置き、始長をもって充てる。	(建物)
2 委員長は、専門委員会を招集し、その議長となる。	第9条 この内規に定めるもののほか、専門委員会の運営に開くべき事項は、専門委員会が定める
3 委員長に事故あるときには、副館長がその職務を代行する。	附 則
(委員以外の者の出席)	この規則は、平成18年4月1日から施行する。

### 平成22年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員長 顛纏 厚（大学情報機構長・館長・人文学部教授）

委員 小河原 加久治（大学情報機構副機構長・理工学研究科教授）

松野 浩嗣（大学情報機構副機構長・理工学研究科教授）

中村 友博（副館長 人文学部教授） 村田 裕一（人文学部准教授）

小柏香穂理（メディア基盤センター助教） 宮浦 祐一（施設環境部長）

牧村 正史（情報環境部長） 吉光 紀行（情報環境部学術情報課長）

田畠 直彦（埋蔵文化財資料館助教） 横山 成己（埋蔵文化財資料館助教）

## 付節2 山口大学構内の主な調査

表7 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第I地区A・B区		L~N-15	1	30?	土壤・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	年報X I
	第II地区家畜病院新営		R-20~21 S-T-19~20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	年報X II
	第II地区			3			弥生土器、土師器	試掘	〃
	第IV地区牛舎新営		S-T-10~11	4	300	弥生溝・土壤、古墳堅穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器、古墳堅穴住居	事前	〃
	第IV地区			5			弥生土器、土師器	試掘	〃
	第四地区杭行列区 および陸上競技場		D-19~20 E-17~19~21 F-17~18	6	1,600	杭列、弥生堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃
	第III地区南区		G-21~23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃
	第III地区北区		H-20 I-19~21 J-20~21	8	1,400	堅穴住居・溝、土壤、柱穴		〃	〃
	第III地区東南区		G-23 H-23~24 I-J-24 K-23~24 L-23	9		弥生堅穴住居	弥生土器	〃	〃
	第III地区野球場			10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃
昭和42年	第V地区学生食堂		J-20 N-14 P-18	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	〃
	第V地区			12		河川跡、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田 遺跡調査室
	第I地区C区大学本部新営		K-L-14	13	600	堅穴住居・溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃
	第V地区教育学部					河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃
	第I地区D区第1地点		L-13	14		近世大溝	弥生土器、木炭屑	〃	〃
昭和46年	第I地区D区第2地点		L-13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	〃	〃
	第I地区D区第3地点		M-13~14	16		土壤、柱穴	弥生土器、瓦質土器	〃	〃
	第I地区D区第4地点		M-N-14	17		土壤、栓穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃
	第I地区D区第5地点		L-12~13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	〃	〃
	第I地区D区第6地点		M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	〃	〃
	第I地区D区第7地点		M-N-13	20			須恵器	〃	〃
	第I地区E区第2学生食堂新営		M-N-14~15 O-15	21	900	古墳堅穴住居、土壤、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃
昭和50年	第II地区						弥生土器	試掘	〃
昭和51年	第III地区					堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃	〃
昭和53年	人文学部校舎新営		M-N-21	22	160			調査担当 近藤義一	年報X
昭和54年	教育学部附属養護学校新営		A-20~21 B-19~20 C-19	23	410	溝、土壤	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵 文化財資料館 山口市教育委員会
	理学部校舎新営		N-O-19~20	24	250			〃	年報X
	農学部動物舎新営		P-19	25	380			〃	年報X
昭和55年	本部管理棟新営		L-14	26	740	溝、土壤、柱穴、中世井戸、土壤墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前	年報X
	経済学部校舎新営		K-21	27	66			試掘	〃
	農学部農業機械実験施設新営		P-Q-15	28	50	溝、土壤		事前	年報X
昭和55年	本部環境整備		E-14~16 F-15~16	29				立会	〃

## 平成22年度(令和)大学構内遺跡調査実施報告

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10・11 P-9・10	30				"		年報X
	教育学部校舎新営	H-19	31		弥生型穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽棟新営	H-16	32		溝		"		
	教育学部美術科・技術科実習実習棟新営	J-K-19・20	33		旧河川、溝、柱穴	織文土器、弥生土器、須恵器、土師器	"		
	正門橋脚新営	I-11	34				立会		
	時計塔設置	I-14	35				"		
	本館構内擁壁取設	K-1・13・14	36				"		
	教養部構内擁壁取設	J-15～17	37				"	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J～M-15 M-N-16	38				"		
	農学部中庭整備	N-10・17	39				"		
昭和56年	職務室改修	O-16	40				"	工法等変更	年報Y
	学生部文化会庫新営	M-8・9	41				"	工法等変更	
	学生部馬場整備	M-N-8・9	42				"		
	附属図書館増築	L-M-16	43	600	弥生～古墳期、土壤、柱穴、核列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		
	大学会館新営	M-N-14・15	44	130	弥生型穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属農業圃場	A-B-21	45	880			立会		
	段性同位元素総合実験室	O-18	46	2			"		
	静水槽自転車置場	井筒口新営	L-17	47	10		"		
	教養部中庭改修整備	J-K-16	48	150			"		
	大学会館新営	M-N-12・13	49	2,000	古墳井戸、土壤、柱穴、中世井戸、廻立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輪入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、縁袖陶器、木簡、石器	事前		
昭和57年	ラグビー場防球ネット新営	G-18・19 H-19・20	50	114	弥生層、弥生～古墳型穴住居、土壤	弥生土器、土師器、石製品	"	堅穴住居は工法変更により現地保存	年報Z
	理学部大学校舎新営	M-N-20	51	409			立会		
	正門・南門・二輪車置場	I-J-12・13 H-23	52	183			"		
	学生部アーチェリー場の台・電柱設置	N-8・9	53	33			"		
	学生部組合整備	M-7・8	54	1.6			"		
	学生部野球場散水栓取設	I-21 K-22	55	1			立会		
	教養部環境整備	I-15・16 J-15 K-17・18 L-18	56	81			"		
	学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E-15・16 F-16	57	12			"		
	大学会館ケーブル布設	N-12	58	160	弥生土壤、柱穴	弥生土器	事前		
	大学会館排水管布設	J-L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	"		
昭和58年	学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16・17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		年報IV
	経済学部樹木移植	K-19・21	61	8			立会		
	大学会館環境整備	L-14・15 M-N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生型穴住居、廻立柱、土壤、古代～近世土壤、溝、柱穴	織文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輪入陶磁器、國産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		
	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5			立会		
	農学部附属農場肥料園	R-17～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輪入陶磁器、輪口、石器、灰弾	"		
昭和59年	農学部附属農場農道改修	V-15～17	65	325			"		年報V
	教育学部前庭環境整備	I-J-19	66	430			"		
	中央ボイラー棟車止設置	O-P-16	67	2.5		須恵器	"		

## 平成22年度(山口)大学構内遺跡調査要旨

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	#		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			#		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験動物廻動場設置)	Q-18	70	16			#		
	理学部環境整備(体育設置)	N-21	71	4			#		
昭和61年	農学部附属家畜病院舎	S-T-19	72	270			#		年報VI
	国際交流会館新館	M-22-23 N-22	73	70	弥生～古墳・河川跡 中世～近世墓	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鐵廢玉、加工痕のある銅片	試掘		
	山口銀行現金自動支払機設置(電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T-U-19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	#	工法変更	
	農学部附属農場農道交通規制(施設ボール設置)	M-10 F-15 Q-15～17	76	12			#		
	正門横(水田内)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		#		
	経済学部環境整備(樹木移植、記念碑建立)	L-20	78	3			#		
	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		
昭和61年	市道神郷1号線および 間田神郷線の送水管埋設	B-17-18 C-18-19 D-19-20 E-20-21 F-21-22 G-22-23 H-23-24 I-J-K-24 L-23-24 M-N-23 O-22-23 P-Q-22 R-21-22 S-21 T-20-21 U-19-20 V-18-19 W-X-18	80	2,100	古墳・弥生溝、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、 須恵器 (墨書きのもの含む) 瓦質土器、製塙土器、 石斧、板石	立会	山口市教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館	年報VI
	教養部自動販売機設置(座設設置および観覧席移動)	K-I-18	81	3.5			#		
	教育部身体障害者用スロープ設置	L-15-16	81	3			#		
	経済学部散水渠設置	I-20	83	4			#		
	吉田構内水泳プール 改修等	E-15 F-15-16 H-15	84	26.5	包含層		#		
	農学部附属農場 水道管理設	S-12	85	3			#		
	吉田構内汚水排水管等 整修改修	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	#		
	本部身体障害者用スロープ 設置	L-14	87	12			#		
	経済学部身体障害者用 スロープ設置	K-18-20 L-18	88	78			#	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用 スロープ設置	L-16	89	8		弥生土器	#		
	教養部57番教室改修	K-16	90	1			#		
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新宮	J-K-18-19	91	240		ブランク、削器、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新館	J-K-17	92	35	埋甕上壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、 土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新館	I-J-16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (nf)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J-K-17・18	94	900	廓・穴、河川跡、 堅穴・窓、土壙、溝、 井戸、堆積土層、 獨立柱根脚跡、 谷状造構、柱穴	織文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石器、石斧、 木製品	事前		年報Ⅷ
	九田川局部改修	B-16・17 C-16	95	20			立会	山口県教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	国際交流会館新営	M-N-22・23	96	195			"		
	教育学部附属幼稚園 自転車置場移設	B-20	97	1			"		
	農芸部附属農場E・F6 排水管理設及び F6園道進入路拡幅	L-N-12	98	55	中世土壤層か、	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 国産磁器、磁石	"		
	農学部植栽	N-17	99	3			"		
昭和63年	経済学部集水樹取放	J-20	100	0.5			"		年報Ⅸ
	教養部複合棟新営に伴う 自転車置場移設	I-16	101	1	包含層か		立会		
	国際交流会館新営に伴う 排水管理設	N-O-22	102	35	河川跡(溝か)、 包含層	弥生土器、須恵器	"		
	教養部複合棟新営に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			"		
	チッカー・ラグビー場改修	F-19・21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	"		
	消防用水設置	K-M-22	105	7.5			"		
平成元年	木銀灯新営	J-L-15	106	4	古墳溝状構造柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、六連式製塙土器	事前		年報Ⅹ
	種野原ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H-22 I-21・22 J-K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	"		
	防火水槽配管布設	K-21・22	109	15	柱穴		"		
	吉田寮ボイラー設	M-B	110	4			"		
	体育施設給水管改修	G-H-16	111	50		陶器	" 工法等変更		
平成2年	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			"		年報Ⅺ
	吉田寮ボイラー棟 地下貯油槽設備改修	M-B	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 銅片、 二次加工のある銅片	"		
	第2武道場棟新営	G-15	114	2	虎		"		
	室内標識設置	F-14 L-18	115	0.5			"		
	本部東座廊水管改修	L-13	116	6.5		弥生土器	"		
	大学会館前庭環境整備	N-14・15	117	35	中世溝		"		
平成2年	大学会館前庭環境整備	M-15	118	2			"		年報Ⅻ
	第1学生生活設備改修	I-J-19	119	7			"		
平成3年	教育学部附属幼稚園 医学部授業室新設	E-20	120	1			"		年報Ⅹ
	農芸部連合施設改修	O-P-17	121	76	織文河川	織文土器、石器	試掘		
	農芸部設立記念館設置	P-17	122	6		須恵器	立会		
	農芸部微生物実験室 その他機械替換機械設備改修	P-17	123	8			"		
	大学会館前記念植樹	L-M-15	124	2			"		
	サークル棟新営	F-14	125	1			"		
平成4年	農芸部連合施設医学科棟新営	O-P-17	126	980	織文河川	織文土器、石器	事前		年報XII
	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20								
	吉田構内道路 (南門ロータリー)改設	H-23	128	40			"		
	交通規制標識及び切カ一设置	M-10 O-22 R-19 S-20	127				立会		
	ホイラー室給水管漏水補修	O-16	129	4			"		
	農芸部附属農場ガラス室新営	S-14	130	3.5			"		
平成5年	大学会館前記念植樹	L-M-15	131	3			"		年報XIII
	泉町平川線緊急地方道路整備工事 及(内)山口大学吉田団地 環境整備(正門周辺)	E-11・12	132				"		
	泉町平川線緊急地方道路整備 (信号機設置)	I-11	133	7			"		
平成5年	本部裏給水管設	K-M-13	134	70	虎、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石製模造	事前		年報XIII
	人文学部・理学部講義棟新営	M-20	135	4			試掘		

## 平成22年度(山口)大学構内遺跡調査要項

調査 年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 5年	第2屋内運動場新設	G・H-16	136	144	溝	弥生土器、須恵器、砾石	〃		年報 XIII
	農学部給水管理設	N・P-18	137	9			〃		
	基幹整備 (埋立地給水管改修)	L-15 M-17・18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学棟新設 電気設備	O-16	139	4			〃		
	大学会館前庭アーチ設置	N-14	140	1			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6			〃		
	九田川河川局部改良	C-16 D-15・16	142	40			〃		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			〃		
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10			〃		
	教育学部給水管理設	H-19	145	15			〃		
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13～15 N-14・15	146	140.9			〃		
	H-20	I-19～21 J-20・21	147	361			〃		
	環境整備(道路保存地区)	G-13 H-12	148	350			〃		
	グランド屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18・22 H-19・20 I-21	149	600	講文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生～古墳時代、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砾石、磨石、鐵石	事前	工法等変更	
	第2屋内運動場新設	G-I-15・16	150	726	弥生～古代溝、貯蔵穴、土坑、近世溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砾石、磨石、鐵石、瓦質土器、土師質土器、陶器、鐵器、瓦、下駄	〃		
平成 6年	グランド屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20・21 H-19・20	151	200	講文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生～古墳時代、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砾石、磨石、鐵石	〃	工法等変更	年報 XIV
	経済学部商品資料館新設	K-L-21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験施設新設	H-12・13	153	2	河川		〃		
	体育器具庫及び便所新設	G-H-17	154	60	河川		〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館 敷設電柱設置	L-22 M-22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22・23	156	6			〃		
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F-19	157	2			〃		
	テニスコート改修	B-17 C-16・18 D-15～17 E-15・16	158	15			〃		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設新設	B-20～22 C-20	159	16			〃		
	陸上競技場整備(透水管埋設)	C-18 D-18・19	160	300			〃		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30			〃		
	野球場フェンス改修	H-22 I-21・22	162	3			立会		
	基礎環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川か		〃		
	九田川河川局部改良	D-15 E-14・15	164	100			〃		
	第2屋内運動場電柱設置	G-14・15	165	0.5			〃		
	教養部水道管破裂修理	I-16	166	2			〃		
平成 7年	グランド屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20～21 G-18・19・22 H-19・20 I-20・21	167	150			〃		年報 XIV
	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水施設設置)	A-21	168	4			〃		
	サークル棧給水管設置	F-14	169	1			〃		
	プール新設給水管設置	E-15 F-15・16	170	10			〃		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C-18	171	6	河川	土師器	〃		
	教育学部ロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10			〃		

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成 7年	農学部組実験研究施設新宮	Q・R-17	173	75	近世溝	磁器	試掘		
	農学部組実験研究施設新宮	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C-D-18 D-E-17 E-F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新宮	F-10	177	22			試掘		
	施設宿舎改修	N-O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N-O-15	179	48	柱穴、包含層	石器	試掘		
	第2階内運動場外周照明施設新設	G-15-16	180				立会		
	機器分析センター新宮工事用電柱仮設	O-19~21 F-22	181				"		
	農学部附属畜病院パワーカー新設	S-20	182				"		
平成 8年	吉田寮可燃ごみ置場新設	N-10	183				"		
	農学部組実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q-R-17	184				"		
	情報処理センタースロープ新設	O-19	185				"		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	E-19-20 F-18-19 G-18	186				"		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-15-16 J-20 K-19 M-10-11 N-12 O-16~18-20 P-18-19 Q-17-18	187				"		
	基幹環境整備(施設宿舎・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報 XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H-I-21-22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附属農場排水管布設	S-10-11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
	地上競技場鉄棒取扱	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水溝改修	R-11	192	2.2			"		
平成 9年	種野寮パワーカー新設	O-20-21	193	7			"		
	チッカー湯給水管取替	H-19-20 I-19	194	12	包含層		"		
	基幹環境整備(共通教育センター新設)	J-K-17	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	"		年報 XVI
	丸田川河川局部改良	E-14	196	18			"		
	農学部附属農場道路舗装	K-12-13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	"		
	本部裏排水管取替	K-14	198	2			"		
	農学部附属農場家畜病院整備合意障壁取扱	S-T-19	199	1			"		
	農学部附属農場堆肥合意新宮	S-10	200	41.5			試掘		
	農学部ハイオフィス側面削御施設新宮	Q-15-16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塙土器、石器	試掘		
	カーブミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
平成 10年	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 K-L-22 L-23	203	23.5	包含層		"		年報 XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			"		
	丸田川河川局部改良	E-14	205	48			"		
	本部2号館西側バウカーリ新設	L-13	206	0.5			"		
	教育学部附属農業学校時計塔新設	D-21	207	1.4	包含層	土師器	"		
	基幹環境整備(教育学部附属農業学校排水管取替)	C-D-21	208	17	河川		"		
	基幹環境整備(既却堀裏土さくとり)	O-16	209	40			"		
	第2学生食堂増築及び改修	N-O-15	210	730	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、鉄製品	事前		
	教育学部附属農業学校給食室改修	C-21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	丸田川河川局部改良	E-F-14 F-13	212				立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(アリカー新設)	H-15 I-J-20 O-16-18	213				"		
	農学部動物用棲却舎改修	Q-18	214				"		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17~19 M-N-18	215				"		
	理学部スクープ新設	M-18	216				"		
平成11年	ステンレス回転モニメント新設	M-13	217				"		
	第2学生食堂兼宿の他に作成 屋外電力線路施設整備	O-14~16	218	包含層、柱穴、河川	土師器、須恵器	"			
	九田川河川局部改良	F-G-13 G-H-12	219				"		
	第2学生食堂兼西側駐車場新設	N-14	220				"		
平成12年	アリカーライナーフロア改修ネット新設	G-H-22	221				"		
	第1体育館・共通教育本館 スロープ新設	H-15 K-16	222				"		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-12 K-L-18 L-15 M-N-17	223				"		
	総合研究棟新設	Q-18 E-17~19	224	250 河川	土師器、須恵器	試掘			
平成13年	総合研究棟新設	Q+R-18+19	225	830 河川、土坑	織文土器、土師器、須恵器、製陶土器、瓦質土器、石器	事前			
	販賣及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
	架空電線取り外し埋設	O-15 P-15+16 Q-14+15+ I-19 R-13+14 R-S-19 S-14	227	包含層			"		
	九田川河川局部改良	H-11+12 I-10+11 J-9+10 K-L-9	228				"		
平成14年	山口合同ガスガバナー室新設 及びガス配管布設	O-P-22	229				"		
	基幹環境整備 (アリカー新設)	N-22 M-10 V-17	230				"		
	あずまや新設	L-18	231				"		
	共育教育センター空調設備 新設	J-16	232				"		
平成15年	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 M-10	233				"		
	総合学部校舎改修 (プレハブ校舎新設)	K-21	234	40 河川	織文土器	試掘			
	九田川河川局部改良 (平成12年度工事追加分)	L-8+9	235	河川			立会		
	総合研究棟新設外配管布設	Q-18	236				"		
平成16年	理学部改修1期工事外配管布設	M-18+19 M-N-20 N-19	237				"		
	九田川河川局部改良	L-8+9	238				"		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-14+15 J-15 K-L-M-15 N-16 Q-T-V-17	239	河川			"		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室 配管布設	M-19	240				"		
平成17年	理学部校舎改修2期工事 自転車置場新設	N-20	241				"		
	第1学生食堂トイレ改修	I-J-19	242				"		
	経済学部校舎改修(プレハブ 校舎新設配管布設)	L-21	243				"		
	農学部校舎改修(解剖実習室 プレハブ校舎新設)	K-S-19	244	520 脊立柱建物、柱穴、 土坑、包含層、河川	土師器、須恵器 (墨書き土器)、 製塙土器、鍛錬陶器、 瓦、輪印、鉢底、湖底石	事前			
平成18年	農学部附属農場実験園場整地	O-14	245				立会		
	農学部校舎改修	N-Q-17+18	246	河川	織文土器	"			
	理学部改修3期工事(楽器庫揭示板) 自転車置場新設	N-O-19 M-19+20	247				"		

## 平成22年度(山口)大学構内遺跡調査要旨

調査 年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 14年	東アジア研究科 プレハブ校舎新設	N-21	248				"		
	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新設)	R+S-19	249		河川、包含層		"		
	教育学部トイレ改修	F-18	250				"		
平成 15年	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O+P-16 Q-15	251	12	河川		立会		
	教育学部附属農場給食調理員 専用トイレ新設	C-21	252	1.7			"		
	農学部環境観測実験棟南側温室	P+Q-15	253	52			"		
	理学部中庭通路屋根新設	N-19	254	5.8			"		
	理学部中庭あづまや新設	N-20	255	6.8			"		
	基幹環境整備(外灯)	F-16, H-14 G-13~15+18 I-16~19 J-19, L-12 Q-15	256	11.5	河川		"		
平成 17年	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J-K-16	257	130	ビット、河川	弥生土器、土師器	予備		
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I+J-K-16 H-12, E-20	258	580	ビット、河川	弥生土器、土師器 須恵器	立会		
	日本・トリニティ学会 木田土壤の断面調査	R-16	259	3.1	河川		"		
平成 18年	基幹環境整備(外灯)取設	H-17~22+23	260	7.7			"		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16, K-17 J-16~17	261	92	ビット、溝、河川	弥生土器、土師器 石器	予備		
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	262	36	包含層・谷	土師器、須恵器 製塙土器	予備		
平成 19年	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	263	225	雁立柱建物跡、溝、土壤	土師器、須恵器 縄文陶器、木製品(柱根)	本		
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	264	19	包含層		立会		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16	265	84	ビット、河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器	本		
平成 20年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J+K-L-16 I+J-K-L-17	266	480	ビット、河川、溝	弥生土器、土師器 打製石斧、柱根	立会		
	資料館(東京経済研究所)新宮	L-20~21	267	100	土壤、落ち込み、河川		予備		
	プレハブ貯庫移設	I-16	268	29			立会		
平成 21年	第一学生食堂改修	J-20	269	75			"		
	国際部前広場環境整備	L-17~18	270	55			"		
	プレハブ校舎新設	F-14~15, G-15	271	400			"		
平成 22年	人文学部外灯用電源敷設	M-20	272	6			"		
	テニスコートフェンス改修	B+C-17, C-18	273	10	河川、包含層		"		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期	T-20	274	48	土壤、ビット	土師器、須恵器 瓦質土器	本		
平成 23年	駐車場整備工事	J-21	275	10			立会		
	資料館(東京経済研究所)新宮	L-20~21	276	550			"		
	第一事務局改修工事	L-15	277	5			"		
平成 24年	吉田寮前配水管敷設	M-11	278	11			"		
	農学部附属農場内電源敷設	Q-15, S-18	279	0.5	ビット	須恵器	"		
	経済学部研究棟改修工事	L-M-19	280	26	河川、落ち込み		予備		
平成 25年	新教育研究棟新設	M-N-11~12	281	473	谷、ビット、溝	弥生土器、土師器 須恵器、瓦質土器 青磁	"		
	新教育研究棟設備開通工事	L-12~14 M-12~13	282	313	ビット、溝、土壤	土師器、須恵器 縄文陶器、白磁、青磁 国産陶器、砥石	本		
	新教育研究棟新設	M-N-11~12	283	1,333	雁立柱建物、ビット 溝、土壤、井戸、谷	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、青磁 縄文陶器、瓦質土器 木製品	"		
平成 26年	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期	T-19 S-20	284	250	雁立柱建物、ビット 溝、谷	弥生土器、土師器 須恵器、製塙土器 青磁、瓦質土器 木製品	"		
	国際交流会館B棟改修工事	N-O-22 N-23	285	457	河川		立会		
	サッカーフラウンド防球ネット取設	H-21~22 I-21	286	8.5	河川、ビット		"		
平成 27年	正門改修等工事	L-13 M-12~13	287	174	ビット、溝、落ち込み	土師器、須恵器 瓦質土器、陶器、磁器	"		
	教育実践センター耐震化取設	K-19	288	2	土壤	縄文土器	"		
平成 28年	東アジア研究棟・経済学研究科新設	K-21	289	117	溝、河川	弥生土器、土師器 須恵器、木製品	予備		年報 7

## 平成22年度(令) 大学構内道路調査要旨

調査 年度	調査名	構内地図別	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	造 破	遺 物	調査 区分	備 考	文獻
	野球場防球ネット取設置	H-23 F-24 K-24	290	40	ビット、漆、包含層	弥生土器、桃石	予備		
	教育学部研究実験A棟改修		291	35.3			x		
	黒山整理工事		292	36			x		
	新教育研究棟新設		293	73			立会		
	ピオレーブ周辺市配水管取設		294				x		
	仮設橋架引込工事		295	11			x		
	ため池整理工事	S-8	296	130			x		
	系統整備(鉄道管改修)	J-14・15	297	156	包含層		x		
	事務局外灯設置	J-14	298	1			x		
	第1車庫屋根上金剛輪垂幕カーボート設置	L-14	299	1.2	ビット		x		
	系統・農業整備 (第1体育館周辺水整備)	H-13	300	300			x		
	男子学生寮新築工事	N-8 O-8・9	301				x		
	人文学部新外灯設置	N-21	302	10			x		
	人文学部西アプローチ改修	M-20	303	750			x		
	教育学部研究実験棟A棟改修電気設備	K-18	304	40	包含層、河川		x		
	理学部ソーラー外灯設置		305	9.3			x		
	農学部インターネット接続設置		306	8.3			x		
	農学部附属動物医療センター改修屋根	S-19・20	307	154	包含層、埋没	土師器、須恵器	x		
	農学部附属農業系木田新築排水	S-15・16 R-15 S-15 T-15 U-15 V-15	308	96	包含層、河川	土師器、須恵器	x		
	農学部植物工場新設	F-15	309	98	包含層	土師器、須恵器	x		
	男子学生寮新築	M-10・11	310	1250			x		
	ラグビー場排水整備	E-20 F-21	311	58.6			x		
	アーチガード施設整備工事	N-7・8 O-7・8	312	750			x		
	テニスコート改修	C-17 D-16・ 17	313	18.3			x		
	共通教育講義棟改修	L-17	314	11.6			x		
	石庭実習場整備その他		315				x		
	教育学部研究実験棟D棟改修工事	H-I・J-18	316	80	落ち込み、層	弥生土器	予備 立会		
	音楽サークル棟新設工事	G-14	317	13.5			予備		
	教育学部研究実験棟G棟改修工事	G-18	318	22			立会		
	吉田草改修工事	I-M-9	319	1,820			x		
	系統整備(路床改善改修)工事	Q-18	320	13.6	河川		x		
	系統整備(第1体育館周辺木整備)工事	G-13	321	8			x		
	事務局2号館車寄せ取設工事	L-14	322	3.6	土壤		x		
	黒山若手道手掘り取設工事	N-O-14	323	15.2			x		
	人文学部新輪外灯設置工事	M-22	324	13.6			x		
	教育学部附属別支援学校 構内雨水排水修理工事	C-D-21	325	18	包含層、河川		x		
	農学部附属農業系圃面倒新設工事	R-S-19	326	10	ビット、漆、土壤		x		

年報  
7年報  
8

## 白石構内

調査年度	調査名	構内地区別	地點	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育部附屬山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳壇穴住居、講状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅳ
昭和60年	教育部附屬山口小学校敷地改修		2	1			立会		
昭和60年	教育部附屬山口中学校球技場改修		3	2			#		年報Ⅴ
昭和60年	教育部附屬幼稚園環境整備(樹木植樹)		4	1			#		
昭和61年	教育部附屬山口附屬学校	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土塙か	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、	試掘		年報Ⅵ
	汚水排水管布設	中学校部分		20	河川路か杭列	陶磁器、不明鉄製品、石繩、剝片、植物遺体			
昭和61年	教育部附屬山口小学校電柱設置		6				立会		年報Ⅵ
昭和62年	教育部附屬幼稚園造営費支拂		7	40			#		年報Ⅶ
昭和63年	教育部附屬山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剝片	#		年報Ⅷ
平成元年	教育部附屬幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳壇穴住居、土壤、講、柱穴、河川路	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵器、黑色土器、器、二次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、石核、砾石	事前		年報Ⅸ
	教育部附屬幼稚園パーコー支柱設置		10	0.3			立会		
	教育部附屬幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		11	170	弥生壇狀遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剝片、石核	#		
平成2年	教育部附屬山口中学校汚水排水管布設		12	70	講状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石繩、鐵石、扁平打製石斧、砾石、剝片	事前		年報Ⅹ
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、圓底陶磁器、扁平打製石斧、砾石	立会		
平成6年	教育部附屬山口小学校ゴーネ新設給水管設置		14	3			#		年報XIV
	教育部附屬山口中学校ゴーネ新設給水管設置		15	7			#		
平成7年	教育部附屬山口中学校自動車置場新設		16				#		
平成10年	教育部附屬山口小学校詫室改修		17				試掘		
平成12年	教育部附屬山口中学校詫室新設		18				立会		
平成14年	教育部附屬山口中学校給水管改修		19				#		
	教育部附屬幼稚園涌湯場整備		20		河川、柱穴	土師器	#		
平成15年	教育部附屬山口幼稚園庭庭新設		21	27.7			立会		年報1
	白石地区市道歩道改修		22	1	河川		立会		
平成16年	教育部附屬山口小学校事務室新設		23	101	河川、土壤または漢		#		年報2
	教育部附屬山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修		24	11			#		
平成17年	教育部附屬山口幼稚園・小学校詫室改修		25	10			立会		年報3
平成19年	教育部附屬山口中学校校舎改修		26	121	河川、落ち込み、ビット	縄文土器、弥生土器	予備		年報5
平成21年	教育部附屬山口小学校共用棟・教室D棟間接連下屋根取扱		27	38	河川、包含層		立会		年報7

## 平成22年度(山口)大学構内遺跡調査要旨

調査 年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 21年	教育学部附属幼稚園園内中庭池 改修整備		29	50	落ち込み		立会		年報 7
平成 22年	教育学部附属山口中学校中庭庭取付 渡り廊下設置		30	1.5			♀		年報 8
			31	12			立会		

## 小串構内

調査年度	調査名	構内地割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和56年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2	4				立会	
	医学部体育館新営		3	1			"		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	"		
	医学部基幹整備 (特高受変圧設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
昭和60年	医学部臨床・講義棟 病理解剖棟新営		7	38			"		年報Ⅴ
	医学部附属病院 外来診療棟新営		8	390		土質土器、瓦質土器、陶磁器	"		
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	"		
昭和61年	医学部看護施設改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		年報Ⅵ
	医学部看護施設改修		11	20			"		
	医学部環境整備(樹木移植)		12	40			"		
昭和61年	医学部附属病院 外来診療棟新営		13	5			"		年報Ⅶ
	医学部附属病院 外来診療棟周辺 環境整備等(樹木埋設)		14	18			"		
	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			"		
昭和62年	医学部附属病院棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、鐵石刃核	試掘		年報Ⅷ
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、 使用痕のある剥片、 剥片、礫石、磯、原石、 土師器、土質土器、 瓦質土器、陶磁器	立会		年報Ⅸ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			"		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、鐵石刃、 二次加工のある剥片、 剥片、石核	試掘		年報Ⅹ
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報X I
平成4年	捷却棟地盤調査		22				"		年報X II
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他 (候補附属院基幹設備 (候補新病院))		23	9			"		年報X III
平成6年	医学部附属病院		24	6			"		年報X IV
平成7年	医学部附属病院 看護宿舎新営		25	300			"		年報X V
平成8年	医学部附属病院 屋外排水管布設		26	40			試掘		年報X VI
平成9年	医学部歴史碑・納骨堂新営		27	6			立会		年報X VII
平成10年	基幹環境整備 (看護施設合併化槽撤去)		28	15.2			試掘		年報X VIII
平成11年	医学部施設移設		29	4			立会		
平成12年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		30	10			"		
平成13年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線、医学部 敷地西側特殊道路)		31	134	包含層、近世～ 近代用水路	剥片、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	事前	宇都市教育委員会と 共同調査	
平成14年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		32	379	包含層、近世～近代溝	剥片、繩文土器、 弥生土器、土師器、 陶器、磁器	"	宇都市教育委員会と 共同調査	
平成15年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、 土坑	陶器、磁器、鉄製品	"	宇都市教育委員会と 共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	繩文土器、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院高エネルギー 棟新営		35	13.25			"		
平成15年	総合研究棟新営		36	382	包含層	繩文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器	"		
平成15年	基幹環境整備(透空)新営		37	76			試掘		年報I

## 平成22年度(11)大学構内遺跡調査要旨

調査 年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 16年	医学部基幹環境整備 (地下オイルタンク他)		38	144		織文土器、土師器、陶器、磁器、石碑	試掘		年報 2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器	#		
	医学部総合研究棟北側 道路用護り廊下取設		40	40.6			立会		
平成 17年	医学部附属病院基礎環境整備 (冷熱源設備他改修)		41	37			#		年報 3
	医学部南側通用門解取設		42	30			#		
平成 18年	モニユメント設置		43	6.2			#		年報 4
平成 19年	医学部総合研究棟改修Ⅰ期		44	6.75			予備		年報 5
平成 20年	医学部総合研究棟改修Ⅱ期		45	9			#		年報 6
平成 21年	小串宿舎B棟埋設ガス管改修		46	58			立会		年報 7
平成 22年	医学部附属病院患者用 ・職員用立体駐車場建設		47	125		縄管、陶器、磁器、瓦質土器、土師器	予備 立会		年報 8
	地域医療教育研修センター新宮		48	156	畦畔、溝	磁器、陶器、泥面子、土人形、縄管、土鍤、土師器、須恵器、弥生土器、織文土器	予備		

## 常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	道 構	道 物	調査区分	備 考	文献
昭和 58年	工学部校舎新宮		1	70		須恵器	試験		年報 Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			#		
昭和 59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報 IV
昭和 60年	工学部尾山宿舎排水管取設等			65			#		年報 V
	工学部受水槽改修		3	1.5			#		
	工学部尾山宿舎排水管改修			6			#		
昭和 61年	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			#		年報 VI
	精養処理センター(常盤センター) 空調設備取設		5	30			#		
昭和 63年	工学部後却炉上屋新宮		6	225			#		年報 VII
平成 元年	工学部夜間照明装置 及び防犯ネット設置		7	2			#		年報 IX
	工学部記念植樹		8	2.5			#		
平成 2年	工学部ガス管改修		9	45			#		年報 X
平成 3年	大学祭展示物設置		10	7			#		年報 XI
	工学部プレハブ研究・実験棟新宮		11	6			試験		
平成 4年	工学部・工業短期大学部の 改組再編・博士課程設置に伴う 建物移築等の新宮		12	40			#		年報 XII
	工学部および工業短期大学部 職員宿舎取壊		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			#		
平成 5年	工学部プレハブ研究・実験棟新宮		15	12			試験		年報 XIII
	工学部地域共同研究開発 センター新宮		16	16			#		
平成 7年	工学部国際交流会館新宮		17	8		石獅	#		
平成 8年	工学部国際交流会館新宮		18	352	段状造構	ナイフ形石器、剣片	事前		年報 XVI
平成 12年	工学部福利厚生棟新宮		19	38.5			試験		
平成 13年	工学部インキュベーション センター新宮		20	60			#		
平成 14年	総合研究棟新宮		21	13.5			#		
平成 15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報 I
	工学部定歪速度応力観測割れ 実験室新宮		23	20			試験		年報 2
平成 16年	工学部光半導体素子実験室新宮		24	52.5			#		
	工学部旧木幹醸工場		25	9			立会		年報 3
平成 17年	工学部職員宿舎改修		26	65			#		年報 4
	工学部会議棟身障者スロープ取設置		27	38			#		
平成 18年	総合研究棟改修工事 (Ⅱ第・本館北)		28	280			確認		年報 4
平成 19年	工学部総合研究棟改修(Ⅲ第・本館)		29	147			#		年報 5
平成 20年	工学部女子学生寄宿新宮その他の 工学部		30	24			予備		年報 6
平成 21年	工学部ガス管改修		31	12.5			確認		年報 7

## 光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育部附属風光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅳ
昭和59年	教育部附属風光小・中学校 焼却炉新設		2				立会		年報Ⅴ
昭和60年	教育部附属風光中学校 外灯改修		3	1		土師器	"		年報Ⅵ
昭和61年	教育部附属風光小学校創立 記念事業(プロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	"		年報Ⅶ
昭和62年	教育部附属風光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	手洗清採集		年報Ⅷ
昭和63年	教育部附属風光小学校 避難具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	"		年報Ⅸ
	教育部附属風光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土鉢	"	手洗清採集	
平成2年	教育部附属風光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、罐器、 土壺、片手、鉢、坪	試掘 手洗清採集 遺物含む		年報X
	教育部附属風光小学校 運動場改修		9	23	土壤	土師器、須恵器、 須恵器模倣土器	事前		
平成3年	教育部附属風光中学校 武道館新設		10	38	土壤、溝状造構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報XI
	教育部附属風光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石壺	立会		
	教育部附属風光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	"		
平成4年	教育部附属風光中学校 武道館新設		13	500	土壤、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報XII
	教育部附属風光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育部附属風光中学校 武道館新設その他		15	6			"		年報XIII
平成6年	教育区学部附属風光小・中学校 ゴルフ新設排水管理設		16	19			"		年報XIV
平成8年	教育部附属風光小・中学校 園路(外周フェンス・防錆ネット)設設		17	7		陶磁器	"		年報XVI
平成10年	教育部附属風光小学校 給食室改修		18	6			"		
平成11年	教育部附属風光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壤	土師器、須恵器、 韓式系土器、 龜形土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育部附属風光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		
	教育部附属風光小・中学校 上木道(給水管)改修		21				"		
平成15年	教育部附属風光小学校エレベーター 昇降路等新設		22	169	ピット、土壤、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報1
平成17年	教育部附属風光小学校 体育器具庫新設		23	53		土師器、須恵器 磁器陶	予備		年報3
	教育部附属風光小・中学校溝岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		
平成21年	教育部附属風光中学校校舎改修工事 に伴うプレハブ建設		25	107	ピット、土壤	須恵器	本		年報7
	教育部附属風光中学校校舎改修工事 に伴うプレハブ建設		26	225			立会		
平成22年	教育部附属風光中学校 防球ネット設備		27	1			立会		年報8

## その他構内

調査年次	調査名	構内地区割	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート部駐車合宿研修所整備	宇部市大字小野宇土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット部駐車合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町東字中道				#		
昭和60年	熊野莊給湯機器取扱	山口市熊野町3-21	7			#		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	35	杭		#		
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市姐通り2丁目3-32 山口市水の上町6-9	1 7		土師質土器 瓦	# #	6号宿舎 2号宿舎	年報VI
昭和63年	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市白石二丁目8-7	1		須恵器、土師器、 土師質土器。 瓦質土器、陶磁器	#	7号宿舎採集	年報VII
平成元年	本部職員宿舎公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			#	1号宿舎	年報IX
平成2年	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市石藏吉町1-25	1.2		陶磁器	#	7号宿舎	年報X
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			#	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水その他改修	山口市湯田温泉6丁目	30			#		
	経済学部6号職員宿舎廻柱設置	山口市姐通り2丁目3-32	0.5			#		年報XI
	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市天花932-2	1			#		
平成4年	上小路共同下水管布設	山口市上小路小路宇久保7-4	7			#		年報XII
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	44			#		年報XIV
平成15年	ボート部合宿所排水整備	宇部市大字小野宇土井	80			確認		年報1
平成16年	湯田宿舎B棟自転車置場新設	山口市湯田温泉6丁目8-29	11			確認		年報2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フエンス取替	山口市水の上町6-9	1			確認		年報3
	工芸部職員宿舎(尾山)排水施設改修	平島市上野半町1-33-34	15			確認		
平成21年	秋穂団地(ヨット艇庫)浄化槽改修	山口市秋穂東706-2	4.5			#		年報7

参考文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。

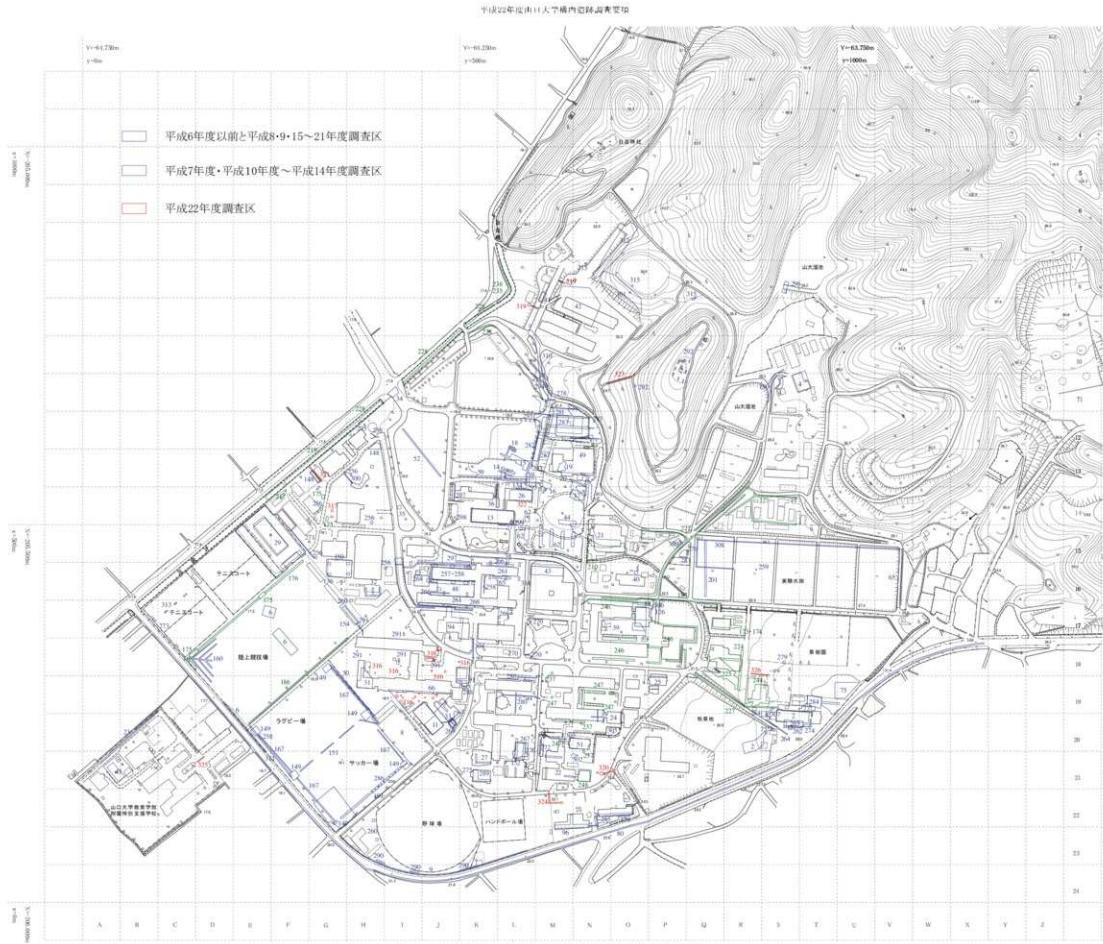


図46 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図

平成22年度(山口)大学構内道路調査区位置図

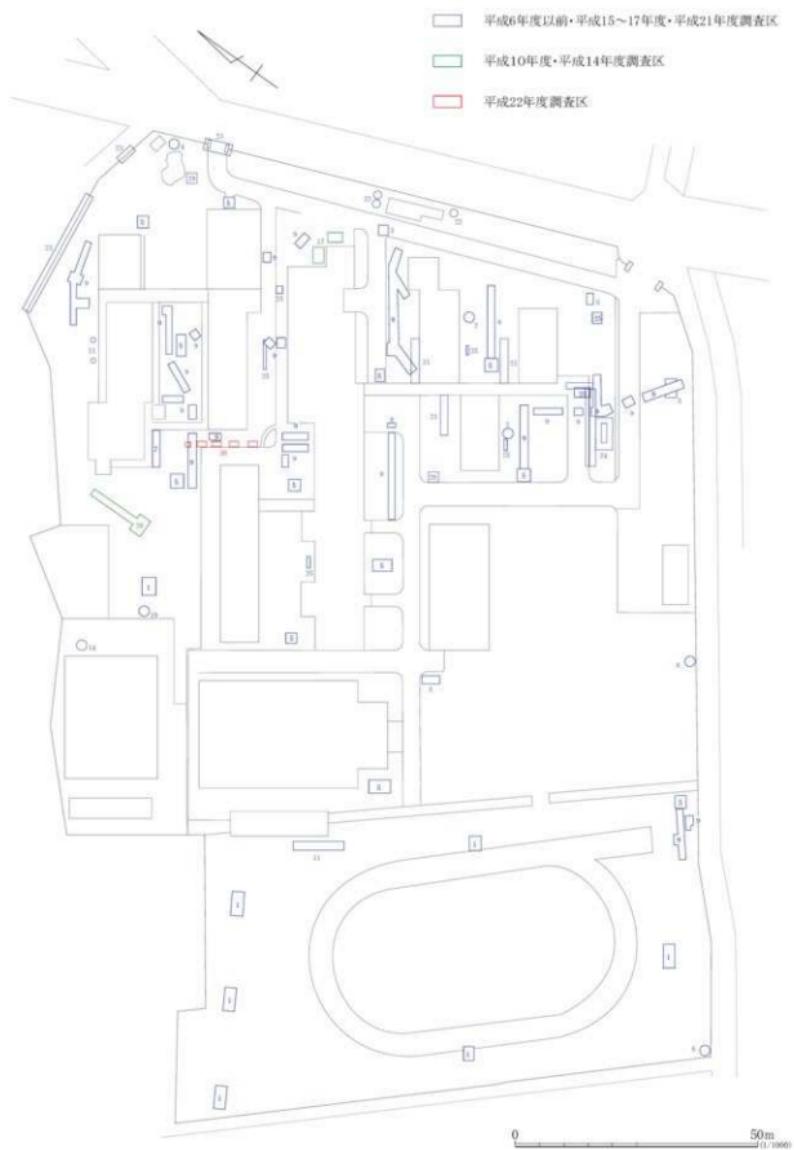


図47 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

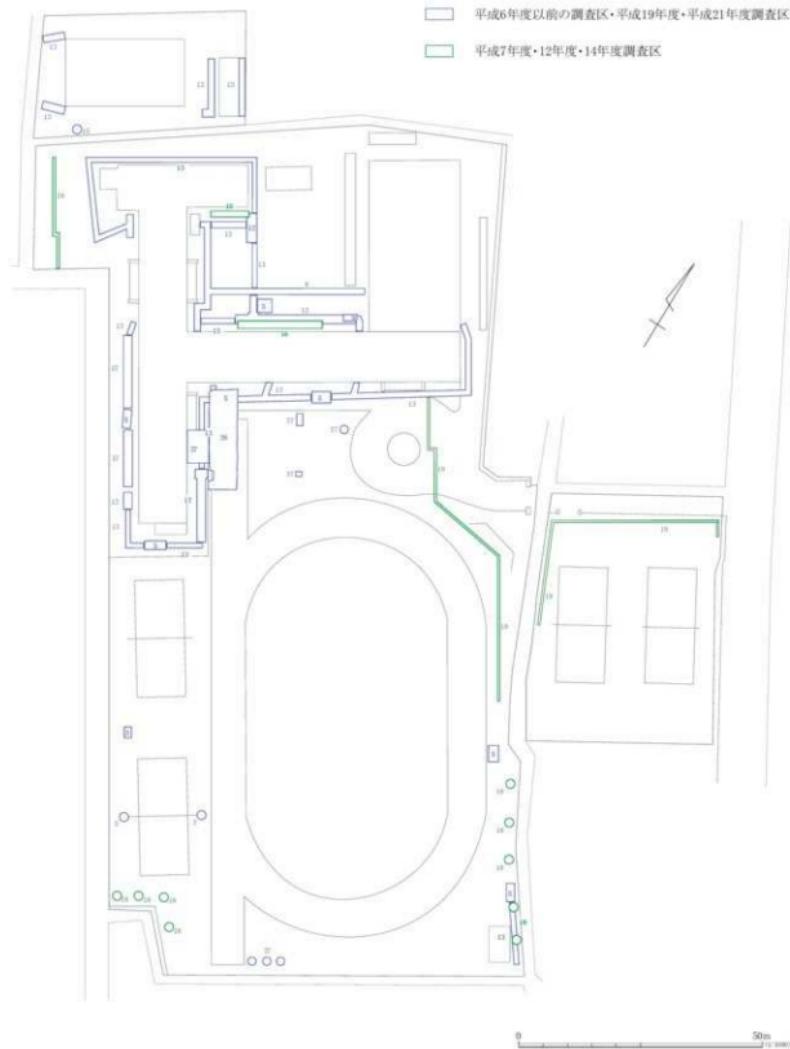


図48 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図

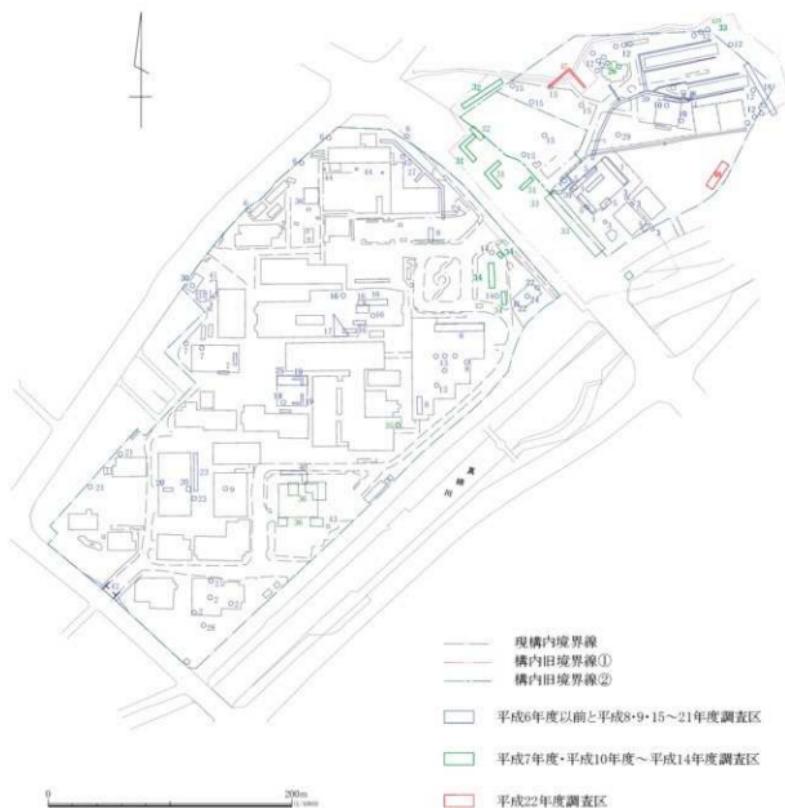


図49 山口大学小串構内調査区位置図

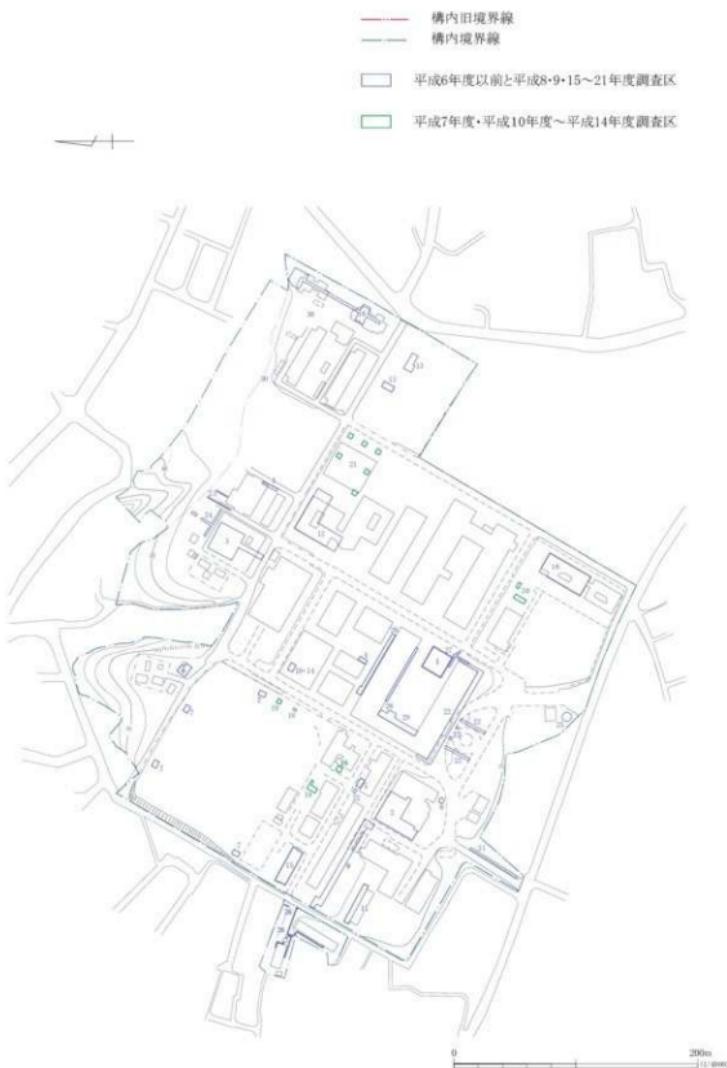


図50 山口大学常盤構内調査区位置図

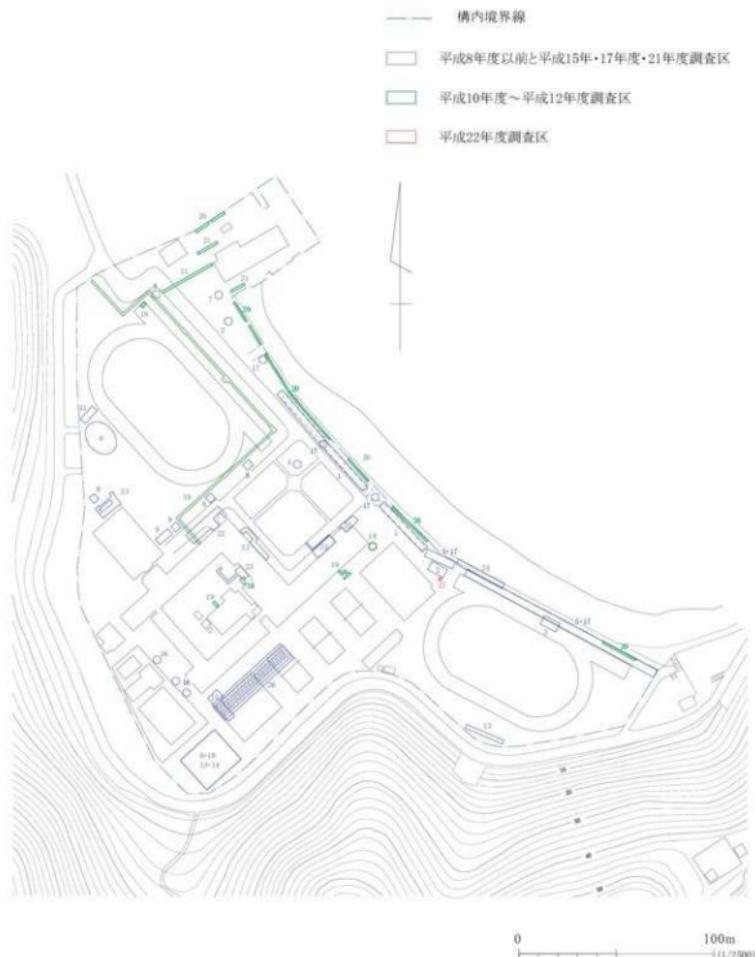


図 51 山口大学光構内調査区位置図

## 第2章 平成22年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかる教育活動を行っている。具体的には、展示・公開活動として当館展示室において年度中3回前後の企画展示を行うこと、教育活動としては年度中1回の市民対象公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対し考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成22年度は、展示・公開活動として、30回目となる企画展を開催した。その他、平成20年度より開始した学内の他の学術分野との連携企画として、大学情報機構メディア基盤センター杉井学准教授との連携により学術資料写真展を、図書館との連携により学術資料展を開催した。また、平成22年度は新たに山口県大学博物館連携事業を開催した。

社会教育活動に関しては、農学部附属農場との共催により第10回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－』を開催した。その他、地域のNPO法人からの要請により、『野焼きワクショップ』を共催にて実施した。

当年度は本学中期計画の初年度に当たるためか、昨年、一昨年に比して地下の掘削を伴う開発工事計画が少數であったため、埋蔵文化財保護業務にかかる負担は軽減した。その結果、新たな取り組みとして展示活動では大学博物館連携事業を開始し、情報公開活動として「館蔵資料調査報告書」の刊行を開催した。また展示活動においては準備期間を確保することが可能であり、広報活動も十分に行えたためか、総入館者数は展示活動開始以来最多の1,700人を超えることとなった(表8)。以下に平成22年度に実施した展示公開活動・社会教育の概要を報告する。

表8 埋蔵文化財資料館利用者の推移

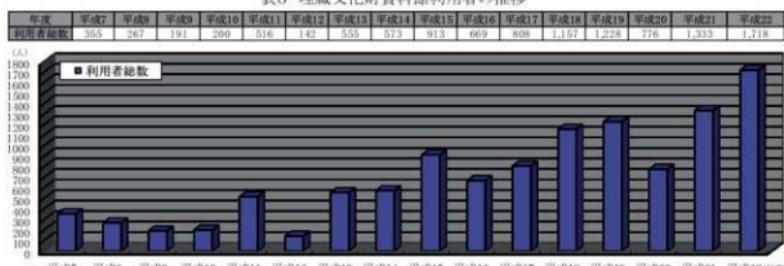
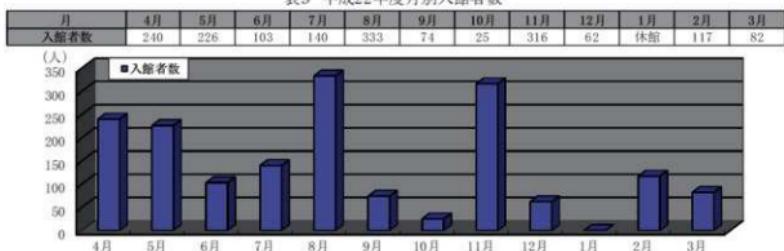


表9 平成22年度月別入館者数



## 第1節 資料館における展示公開活動

### 1. 第30回企画展『高坏～盛る器～』を開催

平成22年度は、弥生時代以降普及し、古代まで供膳具の一角を占める器種「高坏(土器)」をテーマとした企画展示を、9月6日(月)～10月8日(金)の期間で開催した。展示構成は以下の通りである。

- ①現代に用いられている仏前・神前供物用高坏(漆器)の展示解説
- ②本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡出土の高坏を時代ごとに展示、形態変化を解説
- ③古代の高坏の生産として、山口市所在陶窯跡群出土資料(山口市教育委員会所蔵)を事例に展示
- ④古墳時代の祭祀における高坏の奉納状況を山口市所在西遺跡出土土師器群(山口市教育委員会所蔵)を事例に展示
- ⑤古墳時代の葬送儀式における高坏の役割を防府市所在向山古墳群出土資料(防府市教育委員会所蔵)を事例に展示解説

当展示は、近々実施した吉田遺跡の発掘調査において、古代の良好な高坏が数多く出土したことを利用機とする企画である。器の形状と法量の変化は、各時代における食事形態の変化を間接的に示すと考えられること、食事以外での使用状況を考察することにより高坏という1器種の扱った役割を考察し、表現することを目的とした。やや難解な展示構成となつたが、ある程度目的は達せられたかに感じる。

大学夏期休暇中の1ヶ月という限定された期間であったが、会期中99名の方に観覧いただいた。観覧者からは、「高坏にデザインがあり、それが変遷することが印象に残った」「高坏が現代の仮塋に残っていることに驚いた」という声が寄せられた。今後も特徴ある考古資料を用い、学術展示を開催したい。

#### 【注】

- a:横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属農場院改修工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』,山口
- b:横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口
- c:横山成己(2013)「農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』,山口



写真 86 第30回企画展ポスター



写真 87 展示の模様

## 2. 学内連携企画展『学術資料写真展 MANABU's Eyes Vol.1 Relics 光と影で蘇る古代のデザイン』を開催

当館は、本学における他分野の教育研究資料をより広く地域に公開するため、学内連携企画展を開催している。平成20年度は本学教育学部美術教育教室の学生有志と連携し、美術展示『INSTALL -インストール- △・△・△ アート・イン・アルケオロジー』を開催し、平成21年度は、本学理学部地球システム科学科との連携により、標本展示『鉱物・岩石 七変化 -Beauty and Wonder in Mineral World-』を開催した。3回目となる平成22年度は、メディア基盤センター杉井准教授による学術資料写真展を開催することとなった(開催期間:平成22年6月14日(月)~8月27日(金))。

撮影の対象としたのは当館所蔵の考古資料中、繩文土器、石鏃(繩文)、弥生土器、石鏃(弥生)、ガラス小片(弥生)、石製模造品(古墳)、子持ち勾玉(古墳)、製塙土器(古墳)、土錐(古墳)、瓦当(平安)、陶器標鉢(近世)、窯道具(近世)などである。

会場では実物資料と大きくプリントアウトした写真を並べ展示し、それぞれに「撮影者の視点」「研究者の視点」から解説文を付した。その他展示スペースの関係で展示できなかった写真はデジタルフォトフレームを用い作品を紹介した。

埋蔵文化財調査報告や考古学研究においては、遺物撮影は通常被写界深度を深く、陰影を付けずに行われるが、当展では多くの写真が被写界深度を浅く、陰影を強く付けられており、我々の目からも新鮮な画像が並ぶこととなった。会期中、549名の方々に観覧いただいたが、観覧者が実物と写真を熱心に見比べている姿が印象的であった。

当館と、杉井准教授が所属するメディア基盤センターは、学内において大学情報機構という同一部局に所属している。当館は学術情報としての埋蔵文化財を保護し、各種情報化して公開する業務を、メディア基盤センターは学内ネットワークサービスや維持管理、情報セキュリティ等を主要業務としているが、観覧者からは「遺跡の研究成果や建物をCG復元をメディア基盤センターと合同で展示して欲しい」などの要望が寄せられた。

学内連携企画展は、学内の様々な分野の研究資料を公開するための取り組みとして開始したが、今後は研究や技術面での交流に深化させる必要性がある。先後が逆であるが、資料展示がその契機となるよう今後も取り組みを継続したい。

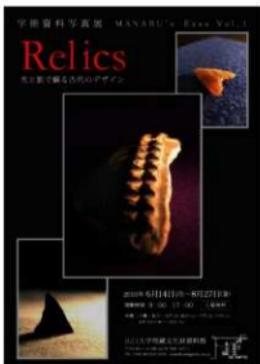


写真 88 展示ポスター



写真 89 展示の模様

### 3. 大学情報機構連携企画展『資料に刻まれた記憶～文字・記号・印から読み解く』を開催

前述のメディア基盤センター同様、本学図書館は大学情報機構に所属している。当企画展では、両施設がそれぞれの特徴を生かし、図書館が「蔵書印」をテーマとした資料展示を、当館が土器や木製品に対し意図的に施された文字・記号等をテーマとした資料展示を実施することとなった。

展示準備に際し、図書館より学生ボランティアスタッフ(図書館学生協働)との共同作業とする旨連絡があつたため、当館もボランティアスタッフを募り、展示品を課題とし、解説パネルの作成を指導する運びとなつた。

ボランティアスタッフとして活動したのは、大熊玲奈氏(木学人文学部考古学研究室3年生: 当時)である。当展示に山展を予定していた古墳時代から古代の遺物である墨書き須恵器、ヘラ記号のある須恵器・土師器、荷札木箇、柱根、木製品(ものさし)の内、後者2点の解説パネル作成に取り組んでもらつた。短い準備期間の中で原案が提出され、多少の校正を加えパネル化した。

会期中489名の方々に観覧いただいたが、観覧者からは「資料を見て、それが何を示すのかを推測するような実験的なパネルがステキでした」「専門用語だらけの短い解説文より、こんな素晴らしい文章なら文字数が増えても読んで疲れそうにない」「図書館と資料館の連携というのが新鮮」などの好意的な声が寄せられた。当館は当初より図書館との連携性を視野に入れ設立されたものの、これまでには「隣接地に立地する」以外の具体的な連携は皆無に等しい状況であった。国立大学法人化後、当館と図書館は同一部局に所属することとなり、その後イベント等で合同企画を実施してはいたが、当館の博物館施設としての機能と図書館機能の具体的な連携事業は本展がその第一歩であったと言って良いのではなかろうか。

一方で「パネルを作ったのが学生だという事をもっとアピールした方がいい」「順路がどちら回りか分かりにくい」といった声も寄せられている。当館は平成20年度以降、考古学以外の学術分野と連携した展示を試みているが、未だ试行錯誤する段階にある。館員4名中3名は学芸員資格保持者、1名は学芸員補である(平成22年度当時)ものの、設立以来主幹業務は構内の埋蔵文化財保護業務であり、展示活動は「空き時間を使っての、もしくは自転車操業的な事業」という側面が強い。今後は積極的に他の学術分野と連携することにより、本学博物館施設としての機能を高められるよう努めていきたい。

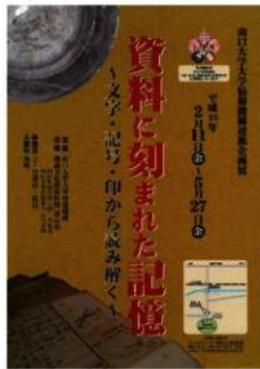


写真 90 展示ポスター



写真 91 展示模様

#### 4. 大学博物館連携第1弾『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』

##### を開催

平成22年度の新たな取り組みとして、大学博物館連携事業を実施した。山口県には、学内に博物館施設を有する大学として、本学と梅光学院大学が存在する。梅光学院大学博物館は博物館相当施設に、当館は博物館類似施設に位置づけられているが、その2館が交流することにより、両校が所蔵する様々な貴重学術資料をより広い範囲に公開し、さらには県外大学博物館との連携、県内他大学との連携を模索することを目的としたものである。

事業の契機は、平成18年(2006)の夏、当館季刊広報誌『てらこや埋文』の1コーナー、「山口県内の博物館紹介」の取材のための梅光学院大学博物館訪問に求められる。取材に対応いただいた博物館の専任学芸員である佐藤暁子氏と将来の大学博物館連携を約したのであるが、その後実現せぬまま4年が経過することとなった。

事業が動き出したのは平成22年初春のことである。会合や電子メールメールでの討議を重ね、実施されたのが以下の事業になる。

##### 事業タイトル

大学博物館連携第1弾 交流展

##### 『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』

##### 事業内容

梅光学院大学の所蔵資料を当館にて、当館の所蔵資料を梅光博物館にて展示する

##### 【梅光学院大学博物館会場】

###### タイトル『まるごと！山口大学埋蔵文化財資料館』

紹介文：山口大学のキャンパスは県内5ヶ所（山口市：吉田地区・白石地区、宇部市：小串地区・常盤地区、光市：光地区）に散在していますが、その全てが「遺跡」の上に立地しています。今回の展示では、吉田地区が所在する「吉田遺跡」をご紹介します。吉田遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの全時代の遺構・遺物が発見される、県内でも有数の複合遺跡です。山口大学の地下にひっそり眠る悠久の歴史をご堪能下さい。

##### 【山口大学埋蔵文化財資料館会場】

###### 『梅光学院大学博物館・コレクションをご紹介します！』

紹介文：梅光学院大学博物館では、特に山口市域との縁が深く、梅光学院史と合わせて関心を持っていただける資料群をご紹介します。特別出品として、吉敷毛利氏の郷校「憲章館」の開学に尽力した漢学者・服部傳巖を曾祖父にもち、本学院の前身「光城女学院」の創設者で、キリスト者の服部章藏先生の史資料を山品いたします。

##### 開催要項

【上 検】山口大学埋蔵文化財資料館・梅光学院大学博物館

【後 検】大学コンソーシアム山口・山口県博物館協会・大学博物館等協議会

【会 場】山口大学埋蔵文化財資料館展示室・梅光学院大学博物館展示室

【開催期間】平成22年11月1日(月)～平成22年12月11日(土)

【休 館 日】山口大学埋蔵文化財資料館 土・日・祝日(11月1・27日, 12月11日は臨時開館)

梅光学院大学博物館 水・木・祝日

【開館時間】山口大学埋蔵文化財資料館 午前9時～午後5時

梅光学院大学博物館 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

【入 館 料】無料



写真 92 大学博物館連携事業の模様

#### 関連事業

【ミュージアムトーク】梅光学院大学会場 11月13日(土)13時30分～15時00分 担当:横山成己

山口大学会場 11月27日(土)10時～10時45分 担当:佐藤瞳子

【シンポジウム開催】『中国・四国地区的大学博物館へいま大学の博物館が求められているもの～』

日時:11月27日(土)13時～17時 於:山口大学共通教育合併講義棟2番教室

第一部『中国・四国の大学博物館から報告』

・梅光学院大学博物館:佐藤 瞳子(梅光学院大学博物館学芸員)

・山口大学理蔵文化財資料館:横山 成己(山口大学理蔵文化財資料館助教)

・愛媛大学ミュージアム:吉田 広(愛媛大学ミュージアム准教授)

・島根大学ミュージアム:会下 和宏(島根大学ミュージアム副館長・准教授)

第二部シンポジウム『いま大学の博物館が求められているもの』

・山口大学図書館:岡田 隆(山口大学情報環境部学術情報課副課長)

・山口県立山口博物館:伊原 慎太郎(山口県立山口博物館主任)

・山口県立文書館:金谷 囚人(山口県文書館副館長)

交流展示は1ヶ月強と短い期間での開催であったが、山口大学会場では378名、梅光学院大学会場では500名を超える入館者があった。観覧者からは「市内の他の大学ともコラボレートして欲しい」など多くの声が寄せられた。当館としても本格的な出張展示は初めてであり、当館展示室の2倍以上の空間と設備に戸惑いを感じつつも有意義な取り組みとなった。ミュージアムトークでは多くの学生の前で仮装させられるなどもあり、大学色の違いも感じることとなった。

シンポジウムに関しては、参加した当館のみが所謂「大学博物館」ではないため、他大学の博物館設立の経緯や事業など多くの情報をえることができた。また地域の公立博物館や文書館、大学図書館から大学博物館への具体的な要望を聞くことができ、大学博物館の存在意義を再考することができた。

事業の初年度ということもあり様々な問題が頻出したが、関係いただいた方々の協力無しには実施は不可能であった。今後のご指導ご鞭撻をお願いしつつ、末筆ながら関係者各位にお礼を申し上げたい。

#### 【註】

1) 山口県内大学に「資料室」等の学術資料展示・収蔵施設は複数存在することをお断りしておく。



写真 93 シンポジウムポスター



写真 94 シンポジウムの模様

## 5. 平成22年度刊行物

### 1.『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』を刊行

平成22年度は、平成19年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては本発掘調査1件(占田)、予備発掘調査2件(白石・小串)、工事立会調査6件(吉山5・白石1)の調査成果が掲載されている。館の活動報告としては、展示・公開活動として8件の企画展示等事業を、2件の社会教育活動を報告している。その他、当館所蔵の土製経容器を報告する付篇を所収している。

### 2. 館蔵資料調査研究報告書1『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』を刊行

当館には、本学構内遺跡出土品以外に多くの県内遺跡出土資料が収蔵されている。大多数は本学名誉教授の小野忠熙氏が本学の教育であったころに発掘調査を担当した遺跡出土品であるが、事実上死蔵状態となっていた。これらの資料群をどのような形で学術公開するのかが当館の課題であったが、本学の全学委員会である「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会」にて見島ジーコンボ古墳群出土金屬器の保存処理事業を実施する幸運を得たため、平成22年度の新たな取り組みとして継続的に館蔵資料の調査研究報告書を刊行することにした。

萩市見島においては、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年にかけて山口県教育委員会と萩市教育委員会の合同総合学術調査が実施された。その中で斎藤忠氏と小野忠熙氏を中心となり考古班が結成され、山口大学学生諸氏他の協力の下、見島ジーコンボ古墳群初の学術調査が行われた。その成果は昭和39年(1964)刊行の『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会発行)に掲載されたが、十分な資料整理・調査期間が得られなかつたためか断片的な資料公開となっていた。報告書掲載の資料は現在萩博物館に、本報告資料は萩博物館と当館に所蔵されているため、この度第154号墳を調査対象とし、両館所蔵の資料を調査し、成果を1冊にまとめ刊行した。

### 3. 季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信 第21号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行している広報誌である。平成22年度は発掘調査および展示活動等が多忙であったため、年度末に「春夏秋冬特大号」と称し、頁数を倍増して刊行した。当館の活動報告の他、「資料館この一品」コーナーにて六連島彦次郎遺跡出土の朝鮮系無文土器を、「山口県内の博物館紹介」コーナーにて福田貝館(山口市徳地島地所在)を紹介した。



写真95 平成22年度埋蔵文化財資料館刊行物

## 第2節 資料館における社会教育活動

### 第10回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－5』を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第10回となる平成22年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回は、埋蔵文化財資料館と山口大学農学部附属農場との共催で、吉田構内の同附属農場で延べ4回行い、小学生5人、教育学部学生6名、一般17名、合計28名の皆様に参加していただいた。以下、授業内容を報告する。

#### 6月19日(土)－田植え－

今回栽培した品種は、昨年と同じ「紅吉兆」(糯米)である。当日は農学部の長砂技術専門職員に代かきをしていただいた水田で田植えを行った。今回は田植えを初めて体験する参加者が多く、足が泥に埋まるため動きづらそうであったが、無事に終了することができた。

#### 8月7日(土)－稻の観察と土器づくり－

猛暑の中、長砂さんから水田に生える雑草についての説明を受け、種とヒエの違いなどを学習した。この後土器づくりに挑戦し、壺や皿など、参加者各々が古代をイメージした個性的な土器ができた。

#### 10月10日(土)－土器焼成・収穫－

本来は10月3日(土)に開催予定であったが、雨のため1週間延期した。まず、前回つくった土器の焼成を「覆い焼き」で行うため、埋蔵文化財資料館横の空閑地で泥窯づくりに挑戦し、点火した。この後、水田に移動して収穫を行った。最終的に稻は長さ約80～90cmにまで成長した。今回は水田の約半分を模造した石窯などを使った徳摘みで収穫し、その後残った稻を鎌を使って根刈りで収穫し、はぜ架けをした。土器の焼成は翌日の午後までかかったが、ほとんど割れることなく焼成することができた。

#### 10月30日(土)－脱穀・紡すり、赤米を食べる－

午前中は箸こぎ、臼と杵による紡すり、てみとザルによる選別とともに足踏み脱穀機による脱穀を体験した。昼食時の赤米の試食にあたっては、今回も土器による炊飯のほか、模造した古墳時代の瓶(こしき)と甕(かめ)、竈(かまど)形土器によって赤米を蒸すことに挑戦した。いずれの赤米も歯ごたえがあるものの美味しい甘みがあった。このほか、おかげには鮭の塩焼きや、豚汁、あさりのすまし汁をつくったが、これらも美味しい好評であった。

#### 公開授業を終えて

今回の公開授業は農学部附属農場で3回目の開催となったが、稻の生長や雑草の解説、土器づくりなど埋蔵文化財資料館と農学部附属農場の特色を生かした体験メニューを工夫し、大学ならではの公開授業を実施することができた。参加者からは「体を動かしてみて昔の米作りの大変さが分かった(一般)」、「いろんな道具での稻刈りが楽しかった。来年も来たい(小学生)」などの声が寄せられ、好評であった。

今年度も、参加者には米づくりの歴史や大変さを実際の体験を通して学んでいただくことができ、公開授業の目的を達成することができたと感じている。全4回の公開授業を盛況のうちに無事終了することができたことを館員一同心より御礼申し上げたい。



写真96 副館長挨拶（6月19日）



写真97 繩ない（6月19日）



写真98 苗の説明（6月19日）



写真99 田植え（6月19日）



写真100 稲の説明（8月7日）



写真101 土器づくりの説明（8月7日）



写真102 土器づくり（8月7日）

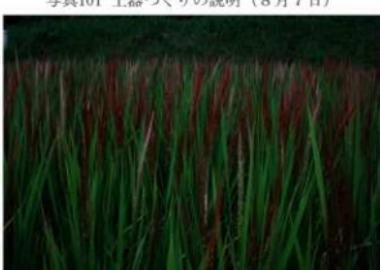


写真103 稲の状況（9月1日）



写真104 泥窯づくり（10月10日）



写真105 焼成した土器（10月11日）



写真106 稲の説明（10月10日）



写真107 穂摘具による収穫（10月10日）



写真108 はせ架け（10月10日）



写真109 脱穀・初すり（10月30日）



写真110 鮎を串に刺す（10月30日）



写真111 食事風景（10月30日）

## 2.『野焼き体験ワークショップ』を共催にて開催

平成19・20年度に続き、平成21年度も地域のNPO法人「子どもとともに山口県の文化を育てる会」の事業に対し当館に共催依頼があり、事業協力をを行う予定であったが、同年7月21日に山口県を襲った豪雨災害が影響し、事業は中止となった。翌平成22年度、NPO法人より改めて当館に『野焼き体験ワークショップ～古代人に挑戦～』事業に間に共催依頼があり、共催館として事業協力をを行うこととなった。

当事業は①「粘土制作セミナー（作陶）」②「野焼き体験ワークショップ（焼成）」③「作品展・写真展（成果公開）」の3部構成となっており、いずれも当館の協力が必要とのことであった。当館からは筆者と当時教務補佐員であった松浦暢呂氏が講師として参加することになったが、以下に各取り組みを紹介する。

### ①「粘土制作セミナー」 平成22年9月11日（土）開催（写真112）

山口市徳地島地に所在する島地保育園にて開催。対象は島地保育園の園児を中心に地域の小児とその家族である。参加者は約50名。当館員の他、平成17年度に開催した当館公開授業にもご協力いただいた陶芸家の渡邊陽子氏に講師に加わっていただき、渡邊氏の指導の下「粘土と火のであい～どうぶつたちの大ぼうけん～」をテーマに参加者に動物を象った粘土作品を制作してもらった。当館は考古学的要素を付加するため、上器の加飾に用いられた原体（竹、葉、貝殻）などを用意し、制作した粘土作品に思い思いに文様を付けてもらった。子どもたちは終始笑顔で作陶に没頭していたが、子ども以上に熱心な保護者もあり興味深かった。制作された作品は相当な数に及んだが、地元の方の協力により、焼成までの約1ヶ月保管していただけたことも幸運であった。

事業内容とは離れるが、当日筆者の家族の体調が悪く、自身も熱気味であった。松浦氏も体調を悪化させていたが、セミナー終了後帰宅中の車中で妻から「病院の検査で子供達がインフルエンザに感染していた」との連絡を受けた時は慌てふためいた。直ちにNPO法人事務局に連絡を取り、幼稚園に注意喚起をしていただいた。後に参加者に感染者は出なかたと報告を受けたが、帰宅後直ぐに病院で検



写真 112 「粘土制作セミナー」の模様

査を受けた筆者と松浦氏はしっかりと「インフルエンザ感染」の診断を受け、3日間の出勤停止措置を受けた。幸いにも参加者が感染者が山口市に所在する、旧島地中学校グラウンドで開催した。1ヶ月以上かけてゆっくりと日陰で乾燥させた粘土作品の焼成を行った。今回も弥生時代の上器焼成方法と推定されている「覆い焼き」にて実施した。ワークショップは粘土制作セミナー参加者と、地域のボランティアスタッフとの共同作業となった。8時30分より作業を開始し、藁を敷き、薪を組み、作品を据え、藁を被せ、泥を捏ね、泥で覆いつむりの作業。子供は勿論のこと保護者も大はしゃぎ。10時30分頃には無事泥窯5基が完成。子供達は当然のこと大人も泥だらけであった。各窯の点火を終え、ワークショップの初日を終了した。

ここからは窯の管理作業。当館のこれまでの実験成果により、覆い焼きによる焼成は点火から約12時間で最高温(約700°C)に達し、さらに約12時間かけてゆっくりと温度を下げていくことが判明している。つまり丸一日かけての焼成となる。同様の方法で実験している他の研究成果では焼成時間は大幅に短いようであるが、当館で覆い焼き実験を主導している田畠直彦氏によると被覆粘土が厚すぎるのでない

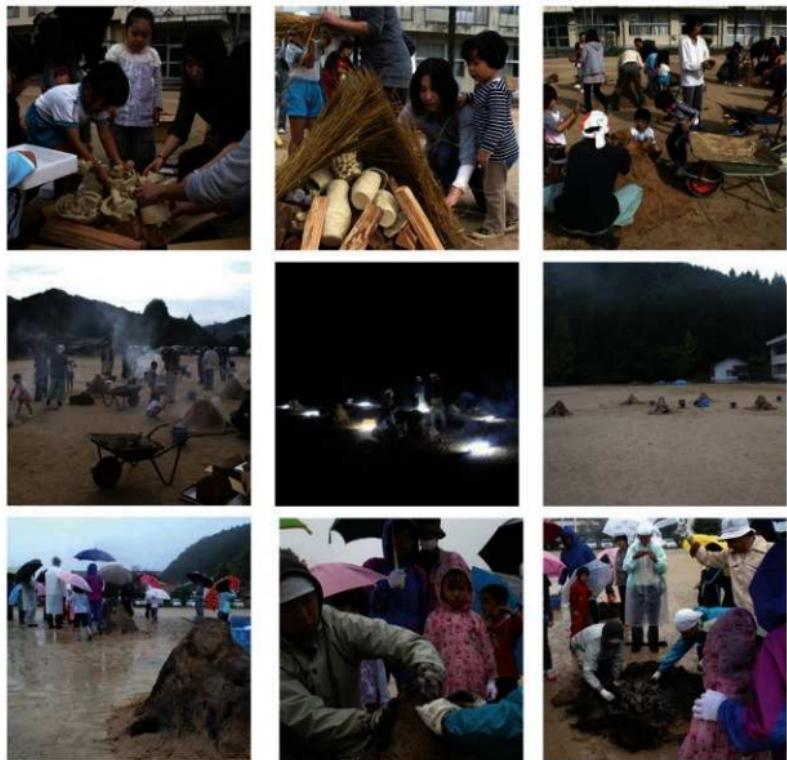


写真 113 「野焼き体験ワークショップ」の模様

かのことであるが、ワークショップ本番で新たな方法に挑むわけにもいかずこれまでの方法を踏襲した。覆い焼きでは火の回りが悪いときには空気を送り込むなどの処置も必要となる。窯内の温度も急激に低下することもあり、想像以上に繊細な温度管理が必要。つまりは「寝ずの番」が必要なのである。館員とNPO法人スタッフ、ボランティアスタッフ、さらには島地保育園園長の応援も仰ぎ、交代で窯の番を行った。折しも夜間に「熊出没注意報」も発表となり、寝るに寝られぬ一夜となった。

夜明けとともに降り出した雨。焼成中に降らなかったことがせめてもの幸運であった。10時30分、雨天にもかかわらず多くの参加者の方々と窯の解体作業を開始。雨天のため解体は筆者と松浦氏で担当した。子供達の真剣な眼差しの下、1基ごとに窯に解体し、灰を払いのけていくと…様々な表情をした動物達の顔が出現。無事取り上げを終え、1日以上に及ぶワークショップを終了した。

### ③「作品展・写真展」 平成22年10月31日(火)～11月13日(土)(写真114)

事業の最後は成果展。山口市徳地地域交流センターロビーにて開催した。当事業にて制作した作品の他、地域団体の陶芸作品等様々な作品が出展された。当館も覆い焼き泥窯のミニチュア模型を出展予定であると同時に写真展のための作品の選定、プリントアウト等作業を進めていたが、時間的な余裕がなく、当時開催準備を行っていた山口県大学博物館連携事業の梅光学院大学博物館会場展示設営終了後、踵を返し山口市徳地地域交流センターに向かい、展示物を設置したことを記憶している。開催期間中展示会場を訪ることはできなかつたが、好評のうちに終了したとNPO法人からは報告を受けている。

本事業中、セミナーとワークショップに関しては当館が積極的関与を行い、多くの成果を上げることができたと感じる。成果展に関して述べれば、当初より当館の開きは形として残るものではなく、参加者が体験学習を通じて何かを感じ取ってくればと考えていた。当時児だった子供達は小学生となっているはずである。将来本学で大学生となった彼らと再会できることを願っている。



写真 114 「作品展・写真展」の模様



## 付篇

## 周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題

田畠 直彦

## 1.はじめに

筆者はこれまで、山口県(周防・長門)の弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年について検討を行ってきた(田畠2001a・b・c、2003a・b、2004、2006b・c、2012a、2013a)。周防・長門においては、他地域と比較して良好な資料が少ない上、土器様相が複雑である。このため、時代により時期的な位置づけが変化した土器も少なくない。土器の編年的位置づけが変われば、当然のことながら、遺跡・造構・遺物の評価もこれに連動するので問題は大きい。周防・長門の弥生土器の編年研究については、これまで山本一朗氏(山本1979・1996)や小野忠熙氏(小野1985)によって研究史が整理されている。本稿では、その後の研究を踏まえ、これまで発表された主要な論考を概観し、編年觀の変遷と今後の課題について述べたい。

本稿の時期区分については表12にまとめた。対象とする時期は弥生時代前期から古墳時代前期前半、布留I式(寺沢1986)併行期までである。詳細は前掲文献及び以下の本文を参照されたい。ただし、各論考の紹介部分では煩雑さを避けるため、時期区分は各論考に準拠した。また、周防の弥生時代中期を特徴づける垂下口縁壺については、中期中葉以前のものを垂下口縁壺A類、中期後葉に定型化したものをB類と呼称する。

周防・長門における弥生土器の研究として、古くは昭和初期の弘津史文氏の集成(弘津1928・1929)や森本六爾氏<sup>1</sup>(森本1930)、山本博氏(山本1935a・b)による長門の弥生土器の検討、東京考古学会による編年<sup>2</sup>(森本・小林編1938)などがあるが、より本格的な研究は第二次大戦後になってしまった。以下、具体的に述べていく。

## 2. 1950~1970年

## 『島田川』の編年(1953、1956)

1953年、山口大学島田川遺跡学術調査団により刊行された『島田川一周防島田川流域の遺跡調査報告書』(以下『島田川』と省略)で、小野忠熙氏は島田川流域の弥生土器の編年を行った(図52 小野1953b)。小野氏は島田川流域の弥生土器を『大和唐古・弥生式遺跡の研究』(小林・木永・藤岡1943 以下『唐古』と省略)や九州、瀬戸内の土器を参考にして、I ~ V形式に分類した。このうち第I形式は速賀川式、第II形式は店古第二様式、第III形式を店古第三・四様式、第IV形式を店古第五様式、第VI形式を弥生時代終末に相当するとした。第II形式は壺の頸部に弦線や貼付突帯をもつものなど、第I形式に近似するとされた土器、第III形式は、岡山造跡B地区壺状造構出土土器等があてられた。

筆者の編年觀でみると、①第II形式・第III形式は中期中葉から後葉の土器が混在している、②中期中葉に位置づけられる壺(図53-11)を第III形式最下段、すなわち中期末に位置づけている点に問題がある(図52)。上記は中期前葉、中期末(中期IV)の土器が少ないなか、『唐古』編年をあてはめようとした結果生じたものであろう。そのほか、第IV形式には天王造跡C区出土の土器棺があてられているが、これらは四線文を持つものが後期前葉、複合口縁をもつものが後期後葉に位置づけられる。第V形式については若干中期の土器がみられるが、大半が終末期の土器である。小野氏の編年は、『唐古』と異なり、造構に伴う土器がきわめて少なく、採集品を含めた出土状況不明の土器を主な対象とせざるを得な

かつたこともあり、上記の問題を残したが、編年の大枠が提示された意義は大きい。その後、小野氏は岡原遺跡の調査報告の際、この編年を補正し、第IV形式の後半と第V形式を「弥生式晚期」の亞式とし、前者を亞式I、後者を亞式IIとした（小野1956）。

小田富士雄氏による編年（1957）

1957年、小田富士雄氏は下関市長府博物館の館蔵品を整理し、報告を行った（小田1957）。小田氏は同館蔵品を第1～9類に分類し、第1～4類を前期、第5・6類、壺の第7・8類を中期、壺の第9類、甕の第7～9類を後期に位置づけた。筆者の編年観では、第1・2類が前期中葉、第3類が前期後葉、第4類が概ね中期前葉に相当し、後期とされた土器の一部には中期の上器を含む。この編年で注目されるのは、内折口縁上器を含む第4類を「中期のある時期まで継続する可能性が大きい」と位置づけたことで、現在の編年観の嚆矢となった。また、この編年案により、長門における弥生時代前期から中期前葉の編年の骨格が提示された。

中野一人氏による編年（1960、1962、1965）

1950年代には、絞糸本郷遺跡、梶栗浜遺跡、土井ヶ浜遺跡の発掘調査が行われた（山口県教育委員会編1961）。中野一人氏はこれらの成果なども参考にして山口県の弥生土器を集成し（中野1960）、編年と地域色についての論考を発表した（中野1962・1965）。中野氏は長門で壺を第一～四式、甕を第二～三式に分類し、周防で壺を第一～六式、甕を第一～三式に分類した。筆者の編年観では長門の甕は第一式が前期前葉から中葉、第二式は前期後葉から中期前葉、第三式は須玖式で中期前葉から後葉、第四式は後期から終末期に相当し、甕は第一式が前期、第二式が須玖式で中期後葉、第三式が後期に相当する。周防では、甕の第一式が前期、第二式が中期後葉に相当する。第三式は中期から終末期の壺、甕が混在している。第四式は後期前葉、第五式は後期後葉から終末期、第六式は終末期に相当する。甕は第一式が前期、第二式が中期中葉から後葉に相当する。第三式は中期の土器とみられる。編年では、長門で中期に壺の第二式と三式が併存するとした点など、誤りもみられる。しかし、中野氏の研究は山口県域全体を対象とした弥生土器編年の嚆矢であり、編年は周防と長門で二元的にとらえる必要があること、中期には厚東川を境に上器様相が異なることを指摘した点は卓見であった。

土井ヶ浜I～IV式の設定（1961）

1961年に刊行された『日本農耕文化の生成』で、金闇丈夫・坪井清足・金闇忍氏により土井ヶ浜遺跡の概要報告が行われた（金闇ほか1961）。埋葬遺構や遺物包含層からは前期から中期の土器が出土

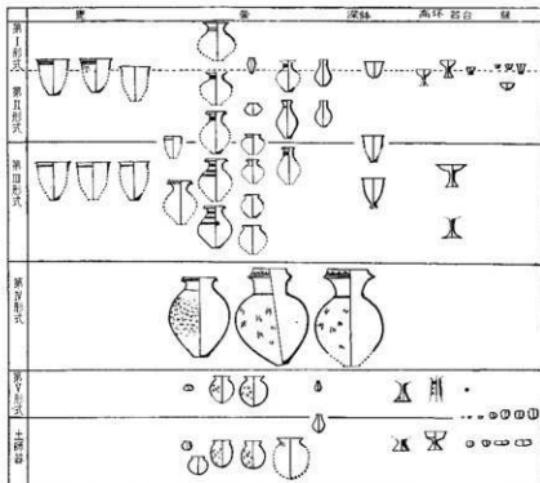


図52『島田川』による編年（小野1953b）

し、筆者の編年観では中期前葉に位置づけられる内折口縁を持つ壺(図53-4)を含めた前期末から中期前葉の土器が土井ヶ浜I式として、前期末に位置づけられた。中期の土器は須次式土器が土井ヶ浜II式(図53-6)、櫛描文をもつ壺(図53-7)が土井ヶ浜III式とされ、これに両者の折衷土器を加えた3類に分類された。しかし、同年に刊行された『弥生式土器集成資料編2』における坪井清足氏の報告(坪井1961)で、「1埋葬人骨の周辺から検出された1群の土器」に土井ヶ浜II式、III式両者が含まれることから、土井ヶ浜II式・III式は同時期に存在した別系統の土器と考えられる。また、埋葬遺構の上層で検出された土器については土井ヶ浜IV式として土師器に位置づけられた。上記の坪井氏の報告では、土井ヶ浜IV式の出土地点が報告されている。これによれば、出土土器は各地点で型式学的なまとまりがある。筆者の編年観ではE地点出土土器は後期後葉から終末期前半、A・B地点出土土器は終末期、D地点出土土器は終末期後半から古墳時代前期に位置づけられる。

#### 『弥生式土器集成本編』の編年(1964)

1964年に刊行された『弥生式土器集成本編1』では、金関恕氏により「山陰地方I」として、周防・長門の弥生土器編作が行われ、第I～V様式に大別された(金関1964)。このうち、第I様式は前期、第II～IV様式が中期、第V様式が後期に位置づけられた。

筆者の編年観では第I様式は前期前葉から前期後葉、第II様式は前期後葉から中期前葉の土器が含まれる。金関氏は後に上記を認めて撤回した(金関1980)。また、金関氏は第III様式を北九州第III様式と等しい類、山陽地方第III様式に類するもの、両者が変化したものとの3類で設定し、第IV様式を第III様式と比較して無文化する傾向の強い土器をあてた。そして第IV様式は様式としての分離は成功したとはいがたいとした。筆者の編年観では第III様式、第IV様式とも中期中葉～後葉の土器が含まれている。第IV様式の土器のうち、筆者の編年観で中期末(中期IV期)に位置づけられるのは久原遺跡出土の伊予系高杯(梅木2004b 本稿図53-12)、吉母浜遺跡出土の甕、鏡遺跡出土の甕の3点である。第V様式には後期前葉から終末期前半の土器がみられる。

#### 『日本の考古学III』の編年(1966)

1966年に刊行された『日本の考古学III』において、潮見浩氏・藤田等氏は中国・四国地方の弥生土器を7段階に大別した(潮見・藤田1966)。また、2年後に刊行された『宇部の遺跡』で、藤田等氏は山口県内の各時期の土器を概説した(藤田1968)。図53は潮見・藤田1966による周防・長門の編年をまとめたものである。第一様式は北部九州の立彫式、畿内・唐古Ia式に対比できる土器とされ、第二様式は土井ヶ浜I式があてられた。第三様式は「古式櫛日文(櫛描文を筆者注)」が出現する段階で、長門では該当する土器がなく、周防では中郷貝塚出土土器(図53-5)があてられている。第四様式は「櫛日文」が盛行した段階で、土井ヶ浜II式・III式土器があてられ、中山IV式との併行関係が示された。第五様式は北四国・山陽・山陰で凹線文が発達する段階で、長門では下関市楠乃(馬場遺跡か)出土土器(図53-9)、鏡遺跡出土土器(図53-10)、周防では岡山遺跡B地点出土の甕(図53-11)、上久原遺跡出土の伊予系高杯(図53-12)があてられている。第六様式は後期前半に位置づけられ、五月田遺跡出土の甕(図53-13)があてられている。第七様式は後期後半に位置づけられ、複合口縁甕が出現する段階とされた。御屋敷山遺跡出土の甕(図53-14)と天王遺跡出土の鉢(図53-15)があてられている。

上記の編年では、土井ヶ浜I式の内折口縁をもつ土器が前期後葉の第二様式に位置づけられること、筆者の編年観では中期中葉に位置づけられる岡山遺跡B地点の甕が中期後葉の第五様式に位置づけられている点に問題がある。なお、周防の垂下口縁甕B類については触れていないが、藤田1968で中期後半に位置づけられた。また、潮見氏・藤田氏は土器様相について、①前期では、阿方式

	長門	周防
前期	I 1 線彫木 2 線彫木 3 線彫木	岩田
	II 4 土井ヶ浜	岩田 青木
中期	III ?	5 中路
	IV 6 土井ヶ浜 7 土井ヶ浜	土井ヶ浜Ⅲ
後期	V 9 線彫 10 線	11 岡山田 12 上久原
	VI 13 五月田	五月田
VII	?	14 調星敷山 15 天王
		0 50cm (1/10)

図 53『日本の考古学III』による編年(潮見・藤田 1966 より作成)

周防・長門における弥生時代から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題の影響が周防・長門にみられること、②中期では、長門は北部九州の強い影響下にあること、③後期後半に複合口縁壺が出現・盛行することを指摘した。④の複合口縁壺の出現時期は後期前葉に遡ることが判明しているが、その他は周防・長門の土器をとらえる上で重要な事象である。以上、中国・四国地方の中で周防・長門の土器が位置づけられたことで、その後の編年案に大きな影響を与えた。

### 3. 1971～1985年

#### 中野一人氏による集成(1972)

1972年に中野一人氏は須恵器を含まない古式土器と考えられる土器について、集成・検討を行った(中野1972)。山口県全城を対象に集成が行われたことは両期的であったが、同氏が指摘するように編年の基準が明確でなく、良好な資料が欠けていたため、十分な考察が行える状況ではなかった。筆者の編年案では、集成された土器は弥生時代後期から古墳時代中期の時期幅をもつ。

#### 綾羅木式土器(概要)の提示(1974)

1974年に刊行された『えとのす』1号において、伊東照雄氏は綾羅木縁跡の発掘調査に基づき、同遺跡出土の弥生時代前期から中期前葉の土器編年案(図54)を発表した。この編年では綾羅木I～IV式の概要が示された(国分ほか1974)。なお、後にIV式とされた内折口縁壺(図54-8)は、この段階では綾羅木III式とされた。

#### 上原遺跡の編年(1976)

1976年、富士塙勇氏は上原遺跡の報告で、出土土器をI～V類に編年し、綾羅木式土器の編年に準じて、I～IV類を綾羅木I～III式、第V類を城ノ越式土器に対比させた(富士塙1976)。

#### 『山口考古』特集号(1977)

1977年に、山口考古学会の機関誌『山口考古』で弥生式土器の特集号が編まれた。この中に伊東照雄氏は前期をI～III期、中期を前半、中項、後半に区分した(伊東1977)。前期は『えとのす』1号の編年によっており、中期は城ノ越～須恵式土器の編年とに準じている。なお、III期はIII-1～3に細分された。

III-1が後のIII式A、III-2がIII式B、III-3がIV式a(内折口縁壺)に対応すると考えられる。

山本一朗氏は周防の弥生土器をI～VII期に区分し、一連の論考の基礎となる編年案を提示した(山本1977)。

中野一人氏は前稿(中野1962)を補う形で、弥生土器の地域を論じた(中野1977)。具体的には須恵式土器、垂下口縁壺の分布図を提示し、前者が長門から周防西部に、後者が周防及び長門の一部に分布することを提示した。資料が増加した現在でも上記の傾向が認められる。

また、中期の土器様相について、垂下口縁壺が中期全般に分布すること、「柳目文」が中期に少なく、後期以降に使われること、圓線文は少なく後期になってやや多く流入したとした。一方、後期の複合口縁壺については、垂下口縁壺から発展過程を示すものがあると指摘した。

上記のうち、備文について当時の資料の制約からそのように解釈されたものの、現在では中期でも一定量存在

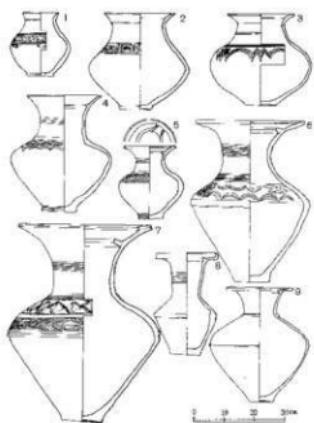


図54 綾羅木式土器の編年(国分ほか1974)

周防・長門における弥生時代から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題  
することが判明している。回原文と複合口縁壺の成立過程については後述する。以上の解釈は、資料の  
制約からやむを得ないものであったが、その後の編年案にも引き継がれることとなった。

### 秋根様式の設定(1977)

1977年に秋根遺跡の報告書が刊行され、出土した「土師器」が秋根1～5様式に区分された(伊東編1977)。筆者の編年観では、秋根1様式の大半が終末期に位置づけられ、2様式の土器には終末期から古墳時代前期前半の土器が含まれている。一方、3様式に位置づけられたLK093出土土器は布留2式併行の良好な一括資料である。秋根様式は時期幅をもつ満出土資料も対象とした関係上、時期区分に問題を残したが、土井ヶ浜IV式の設定以後、弥生時代終末期から古墳時代前期のまとまった資料が遺構単位で多数提示されることとなり、その意義は大きい。

### 『高地性集落跡の研究・資料篇』の編年と併行関係の検討(1979)

1979年、小野忠熙氏を代表として実施された「弥生系高地性集落址の研究(1972～1974)」、「弥生系高地性集落遺跡の機能と編年の研究(1975～1976)」の資料篇として、『高地性集落跡の研究・資料篇』(小野編1979)が刊行された。同書では、高地性集落跡の比較・検討を行うにあたって、北部九州と畿内の間に顕在化していた弥生土器編年の調整を行なうべく併行関係の検討が行われ、佐原真氏・小山富士雄氏により、弥生土器がI～V期に区分された(表10 佐原・小田1979)。ここで示された須玖I式～土井ヶ浜II・III式～中山IV式の併行関係は、佐原氏の『紫雲出』における指摘をもとにしている(佐原1964)。また、佐原氏・小田氏は九州と瀬戸内・近畿地方との編年のズレを調整するため、原ノ辻上層式(高三瀧式)を畿内のIV様式に併行させた。その後の研究は平美典氏の整理(平2004)に譲るが、九州～瀬戸内における兼入土器の検討結果から、現在の編年観では北部九州と瀬戸内での編年には大きなズレはないとする見解が主流である。また、北部九州において編年の共通認識が確立していないため、なお検討が必要であるものの、筆者は田崎博之氏(田崎1998)、平美典氏の検討結果から、高二瀧式新段階と瀬戸内の後期初頭との併行関係を認めるので、須玖II式新段階と高三瀧式古段階が瀬戸内の第IV様式に併行すると考えている。

同書では、小田富士雄氏により周防・長門の弥生土器についても解説された(小田1979)。小田氏は絞糸木I～II～III式が北部九州の板付IIA～IIB～諸岡(前期末)に対比でき、豊前の下伊山～立堀敷～高根に最も近いとした。また、阿方式との交流が周防・長門のほか、豊前宇佐地方にもみられるところから、前期には周防灘文化圏とでも称しうる文化小期が設定できると指摘した。II期は城ノ越式土器の段階で、長門ではこれに共通する様相を示すものとして、絞糸木IV式土器、土井ヶ浜I式土器、伊倉遺跡15号土壙出土土器が提示された。III期は須玖式土器の段階である。小田氏は広島県中山貝塚における中山IV式と須玖I式甕との共伴事例、福岡県鹿部山遺跡における城ノ越式、須玖I式土器などと共に中山IV式相当とする甕から、須玖I式～土井ヶ浜II・III式～中山IV式の併行関係が実証されるとした。IV期は原ノ辻上層(高二瀧式)の段階である、西部瀬戸内では円線文系土器が盛行する段階であるが、周防・長門においては尚者とも僅少であるとされ、具体的な記述はない。V期は下大隈式・西新式の段階である。小田氏は複合口縁壺の分布が安芸から豊後に至ることから、周防がその中心地域を形成していると述べた。また、後期後半には西新町(筑前)～高島式(豊前)～安国寺式(豊後)～土井ヶ浜IV式(長門)～吹越式(周防)の併行関係を指摘した。

小田氏の解説は長門の土器が中心であり、周防についての記述は少ない。編年表では周防のII期に「吉田」と記載されており、恐らく吉田遺跡(山口大学吉田構内)出土土器のことを指すと思われるが、

表10 『高地性集落跡の研究』による編年（佐原・小田1979）

	漢 前	豐 前	長 門	周 防	安 舟	北 四 国	南 四 国	山 陰
I	板付 I	長 井	(中ノ浜)		中山 I A	室 本	入 田 I	タナチヨウ (原山)
	板付 II A	下 伊 田	岐 種 木 I		中山 I B	三 井	西 見 当 I	
	板付 II B	原 28号 (諸岡)	岐 種 木 II	十 岐 種 木 III	中山 II	阿 方	西 見 当 II	鷹 石
		右ノ原 B35号 (高坂・長井)		宮 ノ 原 (下 東)			大 強	+
II	城 ノ 越	馬場山 33号	岐 種 木 IV	吉 田	中山 III	五 条 目	田 村	龜 滝
III	須 玄 I	馬場山 墓溝	土井ヶ浜 II・III	岡 山 B	中山 IV	北 谷	城	+
	須 玄 II	馬場山 51号	北 游 具 塚	(宮ヶ久保)	+	谷 (土居庭田) 紫 雲 出 II	北 カリヤ	天 神 (大通原)
IV	原ノ辻 (上層 (高瀬))	+	(鉢)	(大円寺の一帯)	堀 町	紫 雲 出 III	バーガ森 北	知 井 宮 (青木)
V	下 大 潟	(別 府)	+	天 王 C	橋 渡	八 事 山 II	神 西	波 来 手
	西 新	高 島 (別 府)	土井ヶ浜 IV	吹 箕 A4号	西 山 道上層 (金平A地点)	原	ヒビノキ I ヒビノキ II	九 重
VI	柏 田 I	(豊田町)	秋 横	橘 木 町				健 尾 I 約 場

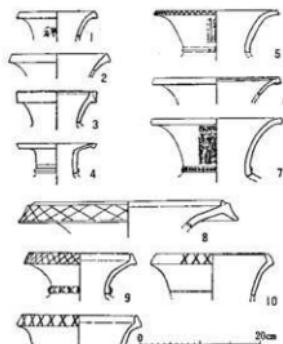


図55 井上山遺跡出土土器（中野1984）

具体的にどの土器を対象としているのかは不明で、宮ヶ久保や大円寺についても同様である。また、小田氏が指摘する須玖 I式—土井ヶ浜 II・III式—中山IV式の併行関係についてであるが、土井ヶ浜 II式の鋤先口縁の壺(図53-6)が須玖 I式新段階～須玖 II式古段階に位置づけられること、頸部に多条の貼付突帯と棒状浮文をもつ壺が中国・四国地方では中山IV式(安芸III-1様式(妹尾1992))より後出することから(柴田2004)、須玖 I式、中山IV式については各々1段階時期を下げる併行関係が考えられる。上記とIV期の併行関係の問題を除けば、概ね現在の編年観に通じるものであり、その後の研究に多大な影響を与えた。

中野一人氏による中期土器の併行関係の検討(1979、1982～1984)

1979年に高地性集落として知られる井上山遺跡の報告書(栗安・吉瀬編1979)が刊行された。同書で中野一人・吉瀬勝康氏は出土土器の考察を行い、岩国市河池道跡戸蔵穴出土土器(前山編1982)の様相を加味して、垂ドロ縁壺が北部九州の須玖 II式、広島県の中山IV式と併行する可能性を示唆した。この点について中野氏は1983年、1984年にも詳しく再論し、上記の併行関係を断定した(中野1983・1984)。また、中野1984では、山口県の弥生土器を概観し、井上山遺跡出土土器のうち、図55-1・2のように口唇部を肥厚させるもの、5のように口唇部に鉛垂文を施すものを「古い形式とみるか退化形式とみるかが問題」と指摘し、垂下口縁壺の上面に粘土帶を貼り付けるもの(図55-8)、内折口縁壺(図55-9～11)を後期の複合口縁への移行を示す土器と位置づけた。回線文については、沈線状の施文になったものがみられること、中期よりも後期の土器に多くみられると指摘した。一方、中野1984では、下右田遺跡・右田・一丁田地区A-1溝出土土器と吹越遺跡A地区第4号住居出土土器(以下A-4号と省略)を後期終末に位置づけた。

河池遺跡貯蔵穴では下層から垂下口縁壺A類が出土し、上層から垂下口縁壺B類が出土している。中野氏はこれをほぼ同時期として、中山IV式との併行関係を断定したわけであるが、筆者の編年観では上層・下層は時期差であり、後者と中山IV式が併行関係にあると考えている。中野氏が上記で指摘した井上山遺跡出土土器は、図55-8を除き、概ね中期中葉に位置づけられる。四線文については、資料が増加した現在、中野氏の見解が正しいことが明らかとなった。下右山遺跡・右山・一丁山地区出土土器と吹越遺跡A-4号住居出土土器については後述する。

#### 下右田遺跡の編年(1979)

1979年に刊行された下右田遺跡第3次発掘調査概報(山口県教育委員会編1979)では、弥生時代中期後半から終末期までIV期に区分する編年案が発表された。筆者の編年観ではIV期の土器の多くが古墳時代前期前半に位置づけられる。

#### 周陽考古学研究所による弥生土器・土師器の編年(1979、1981)

1979年、山本一朗氏が主宰する周陽考古学研究所は『山口県の弥生式土器一集成と編年』を刊行した。同書で池田善文氏は、美祢市秋吉台周辺の弥生土器を紹介するとともに、同地域における前期から終末期の概略的な編年案を発表した(池田1979)。また、山本一朗氏は同書及び、1981年に相次いで、山口県の弥生土器と土師器の編年案を発表した(山本1979・1981)。上記の編年案は1970年代の大規模開発に伴う発掘調査で出土した資料を中心に、山口県全体を対象とし、山本1979では地域色を考慮して周防・長門と両者の中間地帯(現在の山口市・防府市域)の3地域別に編年を行った。当時は資料が増加したとはいえ、現在からみれば、十分なものではなかった。このため、編年を行うには遺構に伴わない土器、出土状況が不明な土器も使用せざるを得ない状況にあった(山本1996)。そのような状況を踏まえれば、山本氏の編年は大変な労作であったといえる。また、現在に至るまで、上記に並ぶ包括的な編年案は提示されておらず、その功績はきわめて大きい。

山本氏は周防・長門の弥生土器をA~F類の系統で整理し、1~10式に区分した。このうち前期を1~3式、中期を4~6式、後期と庄内式併行期を7~10式とした。

系統について、山本氏は長門の2式A類を立屋敷系統、周防の2式A類を下伊田式系統とした。また、阿方・片山式は長門の3式B類(高槻式※筆者注)の影響で成長したとし、D類(垂下口縁壺※筆者注)については城ノ越式(C類)系統の土器で、「阿方・片山式を吸収した須玖式の東辺ローカル」と位置づけ、5式に垂下口縁壺A類が出現し、6式にその完成形として垂下口縁壺B類(図56)が出現するとした。続いて後期の複合口縁壺をF1~4類に細分した。F1類は垂下口縁壺(山本D類)の口縁が上方に拡張されたもの、F2類は袋状口縁を祖形とするもの、F3類は鈍先口縁壺が斜T字口縁となったものである。F4類は下右山遺跡(右山・一丁山地区)A-1溝から出土した円筒状の頭部をもつもので、佐波川流域固有の「佐波型複合口縁壺」と命名した。なお、複合口縁壺の系譜については、1982年にも再論し、口縁上方拡張に最も大きな影響を与えたのは山陰・中部瀬戸内の要素で、九州の袋状口縁系壺の影響も受けているとした(山本1982)。

上記の系統について筆者の考えを述べたい。立屋敷式、下伊田式については、現在の編年観では前後の土器を含んでおり、設定に問題があったことが判明しているので対比できない(木太久1990)。ただし、山本氏の記述から立屋敷式は貝殻施文を持つ土器、下伊田式は沈線主体の瀬戸内系土器をさしていることがうかがえる。つまり、長門では豊前と共通する土器、周防では瀬戸内系土器がみられ、様相が異なる点を指摘していたことは卓見であったといえよう。阿方・片山式については、多条突帶や口縁部内面の渦巻状突帶など、高槻式には見られない特徴をもつことから、高槻式から阿方・片山式に一方的

な影響を与えていたのではなく、両者は相互に影響を与えていたと考えられる。垂下口縁壺については多条突帯・棹状・円形浮文、内面の渦巻状突帯など瀬戸内系の属性が目立つことから、A類は基本的に瀬戸内系土器であり、B類はA類をベースに遠賀川以東の須玖系土器の影響を受けたとらえている。複合口縁壺の成立については、垂下口縁壺は無関係であり、瀬戸内系長頸壺をベースとして、これに北部九州の影響を受けて成立したとらえている(山畠2012a)。なお、複合口縁壺のうち、F3類は筆者の編年観では中期中葉の土器である。F4類の「佐波型複合口縁壺」は、その後の調査でも下右田遺跡を中心に分布することが判明しており、その評価と命名は卓見であった。

次に山本氏の編年のうち、筆者の編年観と異なる土器について、主要なものを箇条書きで述べる。3式の土器は2式と同段階(前期Ⅲ-1期)及び前期末(前期Ⅲ-2期)の土器を含む。4式の宮原遺跡の壺(山本1979第14図1)は前期後葉、天王遺跡出土土器(山本1979第20図1~5)、岡山遺跡出土土器(第21図1~2)は中期中葉、大円寺山遺跡出土土器(山本1979第15図)は中期中葉~後葉に位置づけられる。6式の岡山遺跡B地点の壺(山本1979第21図12、本稿図53-11)は中期中葉、平生町日向平遺跡出土土器(山本1979第19図5)は後期前葉から中葉に位置づけられる。7式の伊倉遺跡出土土器(山本1979第44図1~4)は中期中葉から後葉、8式の伊倉遺跡出土土器(山本1979第44図6・9・10)は中期中葉から後葉、竹安遺跡の壺(前島1979)は中期中葉に位置づけられる。土井ヶ浜IV式は9・10式に一分したが、9式とされた山本1979第46図4・7は10式に相当する可能性がある。纏向2~3式併行とされた10式の土器のうち、下右田遺跡(右田・一丁田地区)A-1溝出土土器は共伴する高壺の形態から9式の吹越遺跡A-4号住居出土土器と同時期と考える。湯田楠木町遺跡出土土器は布留0~1式(纏向3~4式)併行、11式の土器は布留0~2式併行の土器が含まれる。図を見る限り、山本1981第10図1は後期後葉から終末期、第10図5は古墳時代中期の土器と考えられる。上記を含め、特に4式以降の土器に時期幅のある土器が含まれている。

山本氏は5式において、「櫛目文」が岩国市大田寺遺跡以外では使用されておらず、周防ではその流入を厳しく遮断していたとした。そして脣部に櫛描波状文を施す垂下口縁壺A類を後期の複合口縁壺上段部にみられる波状文と同じであるとして、この土器につながる退化型式と位置づけた。一方、6式において、凹線文は周防全域で存在が認められるが、袋状口縁壺がほとんどみられないことを重視し、北部九州の勢力が本州における拠点を放棄した可能性を示唆した。

筆者の編年観では、上記の岡山遺跡の壺は前述のように中期中葉に位置づけられ、複合口縁壺の櫛描文とは関連をもたない。凹線文については、前述のように後期のものが多いことが判明している。また、袋状口縁壺は遠賀川以西系の土器であり、周防・長門では主に遠賀川以東の須玖系土器が分布するため、きわめて少量しか出土しないことが判明している。

山本氏は小田氏と同様に、須玖I式-土井ヶ浜II・III式-中山IV式の併行関係を考えた。また、垂下口縁壺B類を中期末の6式に位置づけ、長門の北迫貝塚出土土器の須玖II式の土器及び畿内のIII様式後半との併行関係を示し、後期初頭の7式は北部九州の高三浦式と畿内第IV様式と併行とした。また、9式については複合口縁壺が定型化する段階で纏向1式併行とし、佐原氏、小山氏と同様に吹越遺跡A-4号住居出土土器と土井ヶ浜IV式との併行関係を示した。以後、山本氏は9式相当の土器を「吹越式」、もしくは「吹越式土器群」と呼称した。

#### 綾羅木式土器の設定と検討(1981~1984)

伊東照雄氏は1981年に綾羅木郷遺跡の報告書において、綾羅木郷遺跡の弥生時代前期から中期前葉の土器編年を提示し(伊東編1981)、統いて1983年に北浦沿岸、現在の下関市市域を対象とした

弥生土器編年案を発表した(伊東1983)。上記のうち、前期から中期の編年は前稿(伊東1977)に基づくもので、新たに後期を加えたものである。伊東氏は綾羅木III式の壺について、II式と近似し口縁部内面に貼付突帯をもつIII式A類、長頸化し大型品もみられるIII式B類に細分した。型式学的には前者から後者への移行が認められることから、III式A類の壺とこれらに共伴する土器をIIIa(式)、同じく後者をIIIb(式)と呼称されることが多い。内折口縁土器はIII式及びIV式aに分類された。なお、後期とされた土器のうち、筆者の編年観では伊倉遺跡の壺は古墳時代前期に位置づけられる。

1983年、吉瀬勝康氏は綾羅木郷遺跡出土の弥生土器の編年案を発表した(吉瀬1983)。吉瀬氏によれば、上記の報告書刊行前に執筆されたものである。吉瀬氏は壺・甕を分類し、各型式の序列を検討して、綾羅木I～IV期に編年した。I期は綾羅木I式、II期は綾羅木II～IIIa式、III期は綾羅木IIIb式、IV期は綾羅木IV式に相当する。また、土井ヶ浜I式の壺(図53-4)をIII期の要素を残しているが、IV期に併行するとした。

1984年、山口大学人文学部考古学研究室が刊行した『西部瀬戸内における弥生文化の研究』で、石井龍彦氏は高槻式土器についての論考を発表した(石井1984)。石井氏は甕を中心に高槻式と綾羅木式との差違を明らかにした。また、完形の良好な資料が欠如している点などから高槻式の名称の妥当性に疑問を感じるとし、綾羅木郷遺跡の名称を冠するのが適当であるとした。高槻式、綾羅木式の名称については後述する。

#### 岡本健児氏による「柳井田・天王A式系土器」の検討(1982、1984)

1982年、岡本健児氏は伊予と周防東部における中期土器の検討を行った(岡本1982・1984)。岡本氏によれば、「柳井田・天王A式土器」という呼称は山口県の弥生土器研究者の間で生まれた名称であるという。この名称についての詳細は不明であるが、現在は使用されていない。岡本氏は「柳井田・天王A式系土器」の系譜・分布・編年等について詳細な検討を行った。岡本氏の論点は多岐にわたるが、以下では編年に関する点を中心述べる。岡本氏は垂下口縁壺A類・B類と逆L字口縁で胴部に突帯をもつ甕を典型として「柳井田・天王A式系土器」と呼び、中期2(機内III様式古併行)に成立するとした。また、中期2に出現する山本・朗氏分類(山本1979)の周防V式D類(垂下口縁壺A類)は愛媛県の土居塚III式に併行するとした。そして、中期3(機内III様式新併行)になると、須玖II式の動先口縁の影響を受けて「へ」字状口縁の壺(垂下口縁壺B類)が出現し、甕は「く」字状口縁に変化するとした。中期4(機内IV様式併行)になると「柳井田・天王A式系土器」は消滅していくが、その要因は四線文土器に変化していくためであるとした。

岡本氏の論考は周防と伊予の土器を詳細に比較した点で高く評価される。筆者の編年観では、中期II～二期(畿内III様式古併行)に周防と伊予で垂下口縁壺A類、逆L字口縁で胴部に突帯をもつ甕が出現する。周防と伊予を比較すると、「柳井田・天王A式系土器」の甕は瀬戸内一帯でみられる垂下口縁壺A類とともに分布の中心は伊予にあり、「く」字状口縁のタイプも存在する。中期III期(畿内III様式新併行)になると周防を中心に垂下口縁壺B類が出現する。そして、中期IV期(畿内IV様式併行)になると、伊予では搬入品を除き垂下口縁壺B類がほとんどみられなくなる。よって、「柳井田・天王A式系土器」を定義するならば、垂下口縁壺B類を指標とするのが妥当と考える。

#### 奥正権寺遺跡における須玖II式土器と垂下口縁壺の共伴(1984)

1984年、弥生時代中期の遺跡として知られる府防市奥正権寺遺跡の報告書が刊行され、奥正権寺遺跡第V区SD-1で、須玖II式土器と垂下口縁壺A類との共伴が報告された(三戸田1985)。また、垂下口縁壺が小田・佐原氏編年の第III期にみられること、内折口縁土器は垂下口縁壺よりも新相を呈する可

岡田・長門における弥生時代から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題  
能性が指摘された。

#### 西遺跡における内折口縁土器と櫛描文施文土器の共伴(1985)

1985年、山口市西遺跡の報告書が刊行され、溝、土壙から前期末(前期III-2期)から中期前葉の土器が多数出土した。特に第1号土壙では内折口縁壺と櫛描文の胴部片の共伴が確認された。調査を担当した菅波正人氏は前期末から中期初頭をI~III期に区分し、第1号土壙出土土器をII期として、前期末から中期初頭の移行期の土器と位置づけた(菅波1986)。

#### 吉田寛氏による吹越遺跡、湯田楠木町遺跡出土土器の検討(1985)

1985年、吉田寛氏は吹越遺跡出土土器、湯田楠木町遺跡出土土器に関する論考を相次いで発表した(吉田1985a・b)。吉田1985aでは、吹越遺跡A-4号住居出土土器を標識とする土器を「吹越A式」と呼び、纏向遺跡東田地区6A土壙出土の複合口縁壺が周防型の撚入土器であり、「吹越A式」そのものであると位置づけた。また、纏向遺跡東田地区6A土壙出土土器が纏向2式に位置づけられるとして、「吹越A式」の大部分を纏向2式併行とするのが妥当であるとし、「吹越A式」の「小型台付鉢」(小型高坪<sup>タケ</sup>筆者注)との共通性も指摘した。

吹越遺跡A-4号住居出土土器を明確に庄内式併行に位置づけたのは吉田氏がはじめてであり、卓見であったといえよう。一方、複合口縁壺は古墳時代前期前半まで存続するが、形態は多様であり、単体で詳細な時期を特定するのが困難である。また「吹越A式」に近似した壺は周防・長門だけではなく、安芸・伊予・豊後にもみられることから、慎重な検討が求められる。

吉田1985bでは、湯田楠木町遺跡出土土器を再検討した結果、庄内式の属性と布留式の属性が認められるほか、纏向遺跡辻土壙4下層や大分県浜遺跡出土土器との共通性があり、纏向3式併行の庄内式から布留式へ展開する過渡期の様相をもつと指摘した。筆者は湯田楠木町遺跡出土土器は主に伝統的V様式系の土器と布留系の土器で構成され、時期的には布留1式(纏向4式)併行の土器が主体を占めると考えているが、吉田氏が湯田楠木町遺跡出土土器を布留式との関連で位置づけた点は卓見であった。

#### 『山口県の考古学』の編年(1985)

1985年に出版された『山口県の考古学』で、小野忠熙氏は、弥生土器・土師器の編年について述べている(小野1985、表11)。編年は小田氏・佐原氏の編年(小田・佐原1979)と山本・朗氏の編年(山本1979、1981)を照合し、小野氏の見解を加えたものである。小野氏は弥生時代前期から終末期をI~VI期に区分した。I期が山本氏の1~3式、II期が山本氏の4式、III期が山本氏の5・6式、IV期が山本氏の7式、V期が8式、VI期が9~10式に相当し、土師器を含めて内容は山本氏の編年案と概ね一致している。注目したいのは、中期末に関する記述である。小野氏は岡山遺跡出土土器をVI期に位置づけた。また、VI期に周防部へ「櫛目文」が入り、これに対応するかのように須玖式土器が長門地方に抗体して北部九州の土器文化圏が縮小したとした。一方、周防の垂下口縁壺B類を天王式土器(柳井山式土器ともいう 図56)と呼び、この周防独自の土器文化の存在が九州圏と中・東部瀬戸内や近畿圏との土器編年の整合性を乱しており、編年の食い違いを生じた地域であったと指摘した。

筆者の編年観では、櫛描文は小野氏のII~III期に存在し、VI期にはほとんどみられない。また、須玖式土器はVI期に分布圏・出土量とも最大になることが判明している。後者の小野氏の発言は、周防独自の土器文化が広域編年を行う上で支障となっていたことを示すものである。

#### 突抜遺跡の編年(1985)

1985年、渡辺一雄氏は山口市阿東町に所在する突抜遺跡・馬場遺跡の発掘調査報告書で、前期か

ら古墳時代初頭の土器編年を行ない、長門北東部の地域性についても論じた(渡辺1985)。編年では、中期後半から後期中葉の遺構が僅少であったため、この段階が空白になったが、その後、羽場遺跡(乗安ほか1989)、宮ヶ久保遺跡(村岡1998)の報告書が刊行され、この地域でも土器編年の概要がつかめるようになった。

#### 4. 1986~2001年

山陽自動車道建設に伴う島田川流域遺跡群の調査と土器編年

1980年代に入ると、山口大学人文学部考古学研究室による弥生時代の遺跡の調査・研究が行われたほか(山口大学人文学部考古学研究室編1984)、1970年代に引き続

き大規模開発が相次ぎ、大幅に資料が増加した。このうち、特筆されるのは、山陽自動車道の建設に伴い、昭和60年度から平成元年度にかけて発掘調査が行われ、かつて小野忠熙氏が調査を行った島田川流域の遺跡群が再び調査されたことである。

1990年、石井龍彦氏はこれらの調査で得られた資料をもとに、弥生時代中期から後期の編年を行い、中期(Ⅰ式)、後期(Ⅱ~Ⅳ式)、庄内式期の5段階に区分した(石井1990)。小野氏の編年以来37年を経て、島田川流域を対象に編年が行われたことになり、その意義は大きい。筆者の編年観では、中期後半とされたⅠ式(岡山遺跡出土上器)は中期中葉、Ⅰ式の搬入品とされた追迫遺跡31号出土の伊予系高环は後期前葉に位置づけられる。Ⅲ式とされた土器のうち、追迫遺跡29号住居跡出土土器とそれ以外の土器には時期差があり、前者が後期前葉(後期Ⅰ~Ⅱ期)、後者が後期後葉から終末期に位置づけられる。また、Ⅳ式とされた土器は終末期、庄内式期とされた土器は古墳時代前期(Ⅰ~Ⅱ期)に位置づけられる。

一方、乗安和二三氏は周防の後期を1~4式、終末期から古墳時代初頭を庄内(古)、庄内(新)~布留の2段階に区分し(乗安1988・1989・1990a・b)、以後の編年の指針となった。ただし、筆者の編年観では2式とされた羽波遺跡SD-1、SB-8出土土器、下右田(右田・丁田)遺跡11号・14号住居出土土器と3式に位置づけられた畠岡遺跡35号段状構造出土土器はほぼ同時期ととらえている。また、4式(後期Ⅳ)とされた吹越遺跡A-4号住居出土土器は終末期に、庄内(古)、庄内(新)~布留とされた土器は

表11『山口県の考古学』による編年(小野1985)

九州編年	山口県弥生系赤色土器編年				近畿編年
	文化小期	兵 門	周 防	山 本	
弥生 板付Ⅰ 板付ⅡA 板付ⅡB 諸 諸 期	第Ⅰ期	弥 生 縦腹木Ⅰ 前 縦腹木Ⅱ 期	宮 原 宮 原 宮 原	1式 2式 3式	弥 生 第Ⅰ様式(古) 前 第Ⅰ様式(中) 期 第Ⅰ様式(新)
		奈 城 / 細 ノ 織 生	奈 生 縦腹木Ⅳ	宮原、大円寺山 天王A	4式 第Ⅱ様式
		須 政 I 須 政 II	中 上井ヶ浜且・Ⅲ 期	岡山B、天王A 鷺井田、天王A 北迫貝塚	5式 第Ⅲ様式(古) 中 第Ⅲ様式(新)
弥生 後 期	第Ⅳ期	原ノ上層 (高二階)	弥 生 後 期	石 光	6式 第Ⅳ様式
		下 大 段	新 庄内式期	天 王 C	7式 第Ⅴ様式
		西 新		土井ヶ浜IV	8式 第Ⅵ様式
弥生 終 末 期	第Ⅵ期	柏 田 I	秋 枝	老 邪 地 楠 木 町	9式 第Ⅶ様式
			土 井 前 期	伊曾B地点 秋林3式様	10式 第Ⅷ様式
			土 井 後 期	上 地	11式 12式 13式
弥生 終 末 期	第Ⅶ期		秋 枝 宮 の 鶴 板手冲尻	天 王 E	14式 15式 16式
			土 井 終 末 期	見島中学校	姪 戒 司

古墳時代前期に位置づけられる。特に庄内(古)に位置づけられた叩き目を持つ伝統的V様式系の壺は、近年の資料からその大半が古墳時代初頭に位置づけられる可能性が高い。

#### 下七見遺跡の編年(1989、1992)

1986年から1990年に圍場整備に伴い、下七見遺跡の発掘調査が行われた。下七見遺跡では、堅穴住居跡や土壙等から弥生時代前期から古墳時代前期の土器が大量に出土した。特筆されるのは内折口縁土器が多数出土したことである。特に土井ヶ浜I式に相当する大型壺に櫛描文が伴うことが明らかとなり、調査担当者の村岡和雄氏(村岡1989)、宝川昭男氏(宝川1992)によりその大半が中期前葉に位置づけられ、内折口縁土器が中期前葉に盛行することが明らかになった。また、宝川氏は下七見遺跡の弥生土器をI～VI期に区分した。I～II期は綾羅木II～III式、III期は内折口縁土器、IV期は須玖I式、V期は須玖II式土器があげられている。VI期は後期から終末期とされた。以上の編年はVI期に細分の余地があるものの、他は筆者の編年観と概ね一致する。長門では同一遺跡で土器の変遷が確認できる遺跡が少なく、特に中期中葉から後期中葉の造構に伴う土器が少ないため、下七見遺跡出土土器は多くが土器編年上の基準資料となっている。

#### 延行条里遺跡の刻目突帯文土器、前期土器の検討(1990)

1990年、下條信行氏は延行条里遺跡の報告書で同遺跡出土の刻目突帯文土器、弥生土器を検討し、地点と層序をもとに、刻目突帯文土器から板付II式a式を6段階に区分した(下條1990)。包含層資料で小片が多く時期幅もあることから、縄文から弥生への移行はなお不明確といわざるを得ないが(田畠2013b)、出土した弥生土器には綾羅木I式よりも古相を呈するものがあり、綾羅木I式よりも古い段階の土器として知られるようになった。

#### 山本一朗氏による土器編年と伊予との関連の検討(1993)

1993年、山本一朗氏は周防西部・東部別に弥生時代前期から中期初頭を1～4式に区分する土器編年案を発表した(山本1993a)。西部の1式に小路遺跡出土土器をあげ、以後の2～4式は山本1979・1981の1～3式相当の土器をあげた。また、2式は綾羅木I・II式、3式(a・bに細分)は綾羅木III式に併行するとした。一方、山木氏は宮原遺跡出土土器には2式(山本1979・1981の1式)に相当する土器が少なく、大半が3・4式に相当すると見解を変更した。西部の4式については、西遺跡第1号土壙で内折口縁壺と櫛描文を施す壺が共存することから、綾羅木IV式に併行する中期初頭に位置づけた。

西遺跡1号土壙出土土器の位置づけは卓見であったが、筆者の編年観では、周防西部・東部の2式は一部の壺を除くと、3式に位置づけられる。また、周防西部の3式はほとんどが3式aに位置づけられるが、3式bに相当する土器が提示されていない。一方、周防東部の4式は3式に位置づけられると考えている。

同年、山本氏は周防の弥生時代後期の土器編年を行った(山本1993b)。岡山遺跡出土土器を中期末から後期初頭に位置づけ、後期を前葉、中葉、後葉、庄内式併行期を移行期として、各々古・新の2段階に細分した。後期前葉は複合口縁壺が定型化していない段階で、後期中葉は複合口縁壺の完成期、後期後葉は複合口縁壺が増加し、大型器台が出現するとしている点は筆者の編年観と一致する。

しかし、筆者の編年観では岡山遺跡出土土器は中期中葉であり、後期前葉古段階とされた円光寺遺跡第4号土壙の壺(山本1993第33図1)と後期前葉新段階とされた追迫遺跡第29号住居跡の壺(山本1993第34図20)は前者が古く後者が新しいが同段階でとらえている。後期中葉古段階と新段階については同段階でとらえており、後期前葉新段階とされた四割遺跡2号住居出土土器、天王遺跡18・19・20号住居出土土器については後期後葉に位置づけられる。また、後期中葉古段階とされた追迫遺跡2号住居

出土上器は終末期、22・39号住居出土上器は後期後葉に位置づけられる。

後期後葉古段階には清水遺跡出土土器、新段階には吹越遺跡A-4号住居出土土器があげられ、一部庄内式に併行することが提示されたが、この点については後述する。移行期古段階とされた上器には終末期から古墳時代前期前半の土器が含まれている。また、庄内式新段階とされた土器のうち、湯田楠木町遺跡出土上器は、前述のように主体は布留1式併行の上器と考えている。

同年、山本一朗氏は周防と伊予の弥生土器の関連を考察した論考を発表した(山本1993c)。前期の土器について、阿方式壺の指頭压痕は綾羅木式の属性では説明できないとしたが、いわゆる逆L字状口縁の壺は北部九州の影響を受けたとした。中期の土器については、松山市祝谷六丁場遺跡出土土器と比較し、壺において周防の無文化傾向が目立つこと、垂下口縁壺B類の分布が周防に重心が偏ることを指摘した。また、下條信行氏の論考(下條1991)を受けて、山本1979・1981を変更し、周防が凹線文を拒絶的に対応したとした。一方、壺・壺の突縁部の指頭押捺文が松山平野から周防が受けた顕著な属性であることを指摘した。後期の複合口縁壺の系譜については、「北部九州・山陰を含めた瀬戸内一帯の中期木から後期初頭の時期に、大形広口壺の口縁を上方に拡張する風潮があつて、瀬戸内西部の両岸ではほぼ同時に、その影響をうけたというのが実状であろうか」とした。後期中葉については周防と伊予の土器が近似しているとし、後期後葉は資料の量的な差から、有効な比較が困難であるとした。また、吹越遺跡A-4号住居出土上器を庄内式の古い段階に位置づけた。そしてこの時期を過ぎると周防では畿内系土器がみられるようになるが、それらは庄内式ではなくV様式系の土器と布留式傾向を示す土器であると指摘した。

上記について筆者の考え方を述べたい。阿方式にみられるいわゆる瀬戸内壺は瀬戸内で系譜が追えるため、北部九州の影響を受けたとは考えられない。壺については山本氏が指摘するように須玖系土器の影響で無文の壺が多いが、口縁部下に押捺を施す突縁を持つ壺は中期末(中期IV期)まで一定量存在する。垂下口縁壺B類の分布が周防に偏ることは認められるが、近年の資料では中期末の土器にも凹線文上器、及びその影響を受けた上器がみられることが判明している(石川編2013)。後期上器については、伊予と周防では近似している点、異なる点が明らかになりつつあり(田畠2012a)、今後検討を進める必要がある。吹越遺跡A-4号住居出土上器の位置づけや畿内系土器については、筆者もほぼ同じ見解をもつ。

#### 中村友博氏による「柳井田式」の設定(1993)

1993年、中村友博氏は中期の壺に關する論考を発表した(中村1993)。中村氏は岩国市柳井田から出土した完形の壺を先述した小野忠黒氏の命名(小野1985)に基づいて「柳井田式の壺」(図56)とし、「外反した口縁の反転した斜め下方の鉗状端面に鋸歯紋を飾り、頸ないし胴に水平降帶を貼る壺形上器」と定義した。筆者は、壺の口縁の垂下は「柳井田式の壺」よりも古い段階から存在する属性であることを重視し、「柳井田式の壺」を含めた全体を垂下口縁壺と呼称するのが適切と考えている。以上から、中期中葉以前のものを垂下口縁壺A類、「柳井田式の壺」に相当する後者を垂下口縁壺B類と呼称する立場をとる。

中村氏は柳井田式の壺の細別、祖型、存続期間、併行關係について検討を行った。細別については問題を残したが、柳井田式が四線紋土器と須玖II式に同時性があると指摘した点は卓見であった。

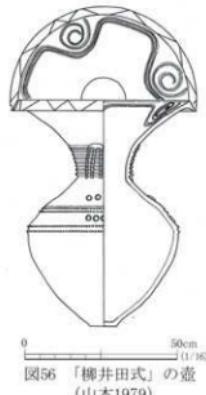


図56 「柳井田式」の壺  
(山本1979)

### 豆谷和之氏による前期・中期の土器の検討(1993、1995)

1993年、豆谷和之氏は吉田遺跡第1地区A区の「不整形のピット」出土土器を報告し、須玖II式併行期の上器様相を明らかにした(豆谷1993)。同時に豆谷氏は垂下口縁壺の変遷、併行関係を検討し、その出現期が畿内第III様式の前半、盛行期が第III様式の後半、衰退期が畿内IV様式に併行するとした。筆者の編年観では、出現期はもう1段階遅る。また、豆谷氏が衰退期とした上器は、中期中葉から後葉に位置づけられる。その後 1995年に豆谷氏は乗安氏の編年(乗安1995)を受けて、垂下口縁壺の変遷案を撤回するとともに、山口市小路遺跡12号溝出土土器を再検討し、同溝出土土器が本州最古級の弥生土器であることを明らかにした(豆谷1995)。

### 乗安和二三氏による前期・中期土器の編年(1995、1996、2000)

1995年、乗安和二三氏は周防の中期土器をI～IV期に区分する編年案を発表した(乗安1995)。I期は内折口縁土器や櫛描文が出現する中期前葉にあたる。II期はそれまでの編年で中期末とされた土器、すなわち口縁部・胸部に櫛描文を施す垂下口縁壺A類とこれらに伴う上器があてられた。III期は垂下口縁壺B類が出現する段階で、筆者の編年観で須玖I式新段階～須玖II式古段階に伴う土器があてられ、IV期は須玖II式新段階に伴う上器があてられた。この編年案では遺構出土上器を一括して同時期に認定しているため、一部で前後段階の土器がみられるなどの問題はあるが(田嶋2006c)、その後の編年の指針となった。

1996年、乗安和二三氏は山口考古学談話会百回記念大会「西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生土器の諸相～」で、周防・長門における前期土器の編年を行った(乗安1996)。また、2000年には近藤番一氏と長門における前期土器の編年を行い(近藤・乗安2000)、前期I、II-a、II-bo、II-bn、III-a、III-bの6段階に区分した。I期は綾羅木I式に先行する段階で延行条里遺跡出土土器があてられた。長門ではII-a期に綾羅木郷遺跡EIII地区L-N9出土上器、II-bo期にEIII地区L-N9出土上器を除く綾羅木I式土器、II-bn期に綾羅木II式土器、III-a期に綾羅木III式a、III-b期に綾羅木III式bに相当する上器があてられた。周防では、I期に小路遺跡12号溝出土上器があてられたが、II-a、II-bo期に該当する土器はなく、II-bo期に下東遺跡YD-1、YP-14出土土器があてられ、III-a期に下東遺跡YP28、下東遺跡8号土壙、宮原遺跡土壙22出土上器等、III-b期に下東遺跡YP34、宮原遺跡土壙16出土土器等があてられた。

上記の編年について、筆者の編年観では前期Iとされた延行条里出土土器は喪(乗安1996編年表4)を除き、II-a期までの時期幅でとらえられる。II-bo、II-bn期については、後者の壺の口縁部内面に沈線がみられること以外に型式学的な違いがないことから、同一段階でとらえるべきだと考えている。また、III-b期に位置づけられている内折口縁上器(乗安1996編年表107・108)は中期前葉に位置づけられる。周防の編年では、III-a期に位置づけられている宮原遺跡第1環溝V肩出土の壺(乗安1996編年表62)は次段階に位置づけられるが、他は概ね妥当と考えられる。

### 吉瀬勝康氏による後期から終末期の編年(1996)

1996年、吉瀬勝康氏は周防・長門における弥生時代後期から終末期の土器編年案を発表した(吉瀬1996)。吉瀬氏は①基準となる良好な資料の絶対量の不足、②水系や平野単位で後期をとおして変遷をたどれる資料がない、③前・中期に比べ器種の多様な展開と他地域からの影響を受けて複雑な構成をなしているとして、編年が難しい状態にあると指摘した。このため、編年では3時期に大別するにとどめ、I期を後期土器が出現する段階、II期をI期とIII期の間に位置づけられる段階、III期を庄内式併行期とした。また、山口県内の様相は①県西部の下関から宇部そして日本海響灘沿岸萩辺りまでの地

岡田・長門における弥生時代から古墳時代前期前半の上塗漆器をめぐる研究史と今後の課題  
域、②瀬戸内側中央部山口・防府市を中心とした地域、③阿東町から島根に抜ける内陸から東北部地域、④瀬戸内側の東部、熊毛・玖珂・柳井・平生・岩国といった県東南部地域に地域性がみられるとした。

筆者の編年観では、後期Ⅰ～Ⅱ期とされた清水遺跡出土土器は古瀬氏のⅡ～Ⅲ期、後期Ⅲ期とされた下七見遺跡第2地区SD2出土土器は古墳時代前期前半に位置づけられる。

#### 下右田遺跡の編年(1999)

1999年、原田光朗氏は下右田遺跡の発掘調査概報で前期から古墳時代前期までの編年を提示した(原田1999)。筆者の編年観では後期後半とされたSD240出土土器は終末期に位置づけられる。その他の土器の位置づけについては田畠2004・2012aを参照されたい。

#### 乗安和二三氏による後期土器の編年(1999)

1999年、乗安和二三氏は長門における後期の土器編年案を発表した(乗安1999)。編年では後期をⅠ～Ⅳ期に区分し、庄内式併行(古)までを提示した。Ⅰ期は良好な資料に欠けるため、柳瀬遺跡包含層出土土器等があてられた。以下、Ⅱ期に船頭遺跡(II)SD24出土土器、Ⅲ期に船頭遺跡SK18出土土器、下七見遺跡(II)SB1出土土器、Ⅳ期に柳瀬遺跡LS001出土土器、下七見遺跡(II)SB6出土土器等があてられ、庄内式併行(古)に、土井ヶ浜IV式の土器、吉永遺跡(II)SB6出土土器等があてられた。また、編年では、柳瀬遺跡出土土器で示された逆「く」字口縁の高坏の変遷(濱崎1997)が適用され、以後の編年の指針となった。筆者の編年観ではⅣ期、庄内式併行(古)については、各々一段階下げて位置づけている。

#### 石井龍彦氏による長門西部の後期後半から古墳時代初頭の土器編年(2000)

2000年、石井龍彦氏は長門西部における後期後半から古墳時代初頭の土器を4期8段階に区分する編年案を発表し(石井2000)、Ⅰ～Ⅱ期を後期末、Ⅲ期を庄内式併行期、Ⅳ期を布留式土器併行とした。Ⅰa期は乗安氏編年(乗安1999)のⅡ期、Ⅰb期はⅢ期に相当する。Ⅱ期には下七見遺跡第12地区SB5出土土器をあてた。Ⅲa期は乗安氏編年のⅣ期、Ⅲb期は乗安氏編年の庄内式併行(古)に相当する。Ⅳa期には吉永遺跡Ⅲ－東地区SB3出土土器、SB5出土土器、Ⅳb期には柳瀬遺跡E地区LS005出土土器、Ⅳc期には下七見遺跡第2地区SD2出土土器をあてた。

石井氏のⅡ期は乗安氏編年のⅡ期とⅢ期の高坏の形態にヒアタスを認めて設定したものと推測され、高坏(石井2000第12図37)がそれに相当する。しかし、下七見遺跡第12地区SB5からは石井2000第12図36のように口縁部が長くなり、屈曲が緩くなるものも共存していることから、筆者はやや時期幅のある資料と考えている。また、Ⅲ-a期、Ⅲ-b期については、後者の高坏の口縁部がやや長いが、屈曲度はほぼ同じであることから、筆者は同じ段階でとらえている。このほか、筆者と位置づけが異なるのはⅣa期とⅣb期である。筆者はⅣb期の高坏(石井2000第12図83)はⅢb期の高坏(石井2000第12図54)の直後に位置づけられると考え、終末期最新相の土器ととらえている。一方、Ⅳa期の吉永遺跡Ⅲ－東地区SB5出土土器には布留系壺(石井2000第12図62)がみられること、伝統的V様式系の壺が平底である点から古墳時代初頭の土器ととらえている。下七見遺跡SD2出土土器はやや時期幅をもつが、吉永遺跡Ⅲ－東地区SB5出土土器よりは一段階新しい土器が主体を占めるので、相対的な位置づけに異存はない。

#### 沖田遺跡の編年(2000、2001)

2000年、古庄清明氏は角島・沖田遺跡の報告で出土した刻日突唇文土器、前期の土器を綾羅木郷遺跡の編年に準じて区分する編年案を発表し(古庄2000)、翌年これを補足した(古庄2001)。出土土器は遺構に伴わないが、刻日突唇文土器、初期遠賀川式土器がまとめて出土したことが注目された。

### 筆者による土器編年(2001)

2001年、筆者は山口市上東遺跡出土土器を検討したほか、上東遺跡と周辺遺跡を含めた前期後葉から中期後葉の土器編年案を発表した(山畠2001a)。この報告書では内折口縁を「内接口縁」と記述しており、関係各位にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びする。

同年、筆者は長門市湯免遺跡出土の壺を標識とし、主に長門北部に分布する湯免式壺(柿本1979)を集成・検討し、前期後葉から中期中葉まで存在することを提示した(山畠2001b)。

同年、筆者は周防・長門における弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の土器編年案を発表した(山畠2001c)。編年では長門西部と周防西部について、後期末から古墳時代前期前半までを4段階に区分し、高环の形態を軸に周防と長門の併行関係を示した。内容については後述する。

### 5. 2002年～現在

#### 『考古資料大観』における後期から古墳時代前期の編年(2002)

2002年、大久保徹也氏は中国・四国地方の弥生時代後期から古墳時代前期の土器を概説し、広域編年を提示した(大久保2002)。編年では後期から終末期を4段階、古墳時代前期を4段階に区分した。周防・長門は防長として一括され、後期1に円光寺遺跡4号土坑出土土器、後期3に清水遺跡第1・2塚濠出土土器、古墳1期に下七見遺跡第2地区SD2出土土器があげられた。筆者の編年観でも上記は概ね妥当な位置づけと考えられる。

#### 筆者による前期土器の検討(2003)

2003年、筆者は角島・沖田遺跡出土の刻日突帯文土器、弥生土器を再検討した。沖田遺跡では造構に作る土器はないものの、板付1b式に位置づけられる長門で最古段階の弥生土器がまとまってみられること、これらの土器が福岡県宗像地域の土器と近似していることを指摘した(山畠2003a)。

同年、筆者は山陰地方における綾羅木系土器について検討する際、長門西部における弥生時代前期から中期初頭の壺の編年を行った(山畠2003b)。

#### 山本一朗氏による「吹越式」の再検討(2003、2005)

2003、2005年、山本一朗氏は「吹越式」に関する論考を発表した(山本2003、2005)。山本2003は山本2005の矢を補うために執筆したという(山本2003)。山本氏は(1)後期後葉、(2)終末期(庄内式併行)前半、(3)終末期(庄内式併行)後半、(4)古墳時代初頭、(5)古墳時代前葉の編年を行った。また、前稿の位置づけを1段階引き下げ、後期後葉に岡畠遺跡35号段状遺構出土土器、終末期(庄内式併行)前半に清水遺跡出土土器、終末期(庄内式併行)後半に松尾遺跡1号住居出土土器をあげた。そして古墳時代初頭に吹越遺跡A-4号住居出土土器、古墳時代前葉に林遺跡SB1・SB3、吉政遺跡SB6出土土器をあげた。

山本氏は吹越遺跡A-4号住居出土土器を古墳時代初頭に位置づけを変更した理由として、以下の点を理由に挙げた。

- ①周防(東南部※筆者注)では吹越遺跡調査後に出土した後期土器のほとんどが「吹越式」(複合口縁壺が定型化した段階以後の土器 ※筆者注)の範疇に属しており、その量の多さから「吹越式」といわれる土器群は相当な時間幅をもっていると考えられること
- ②この地域では布留式前葉の土器がほとんどみられない
- ③吹越遺跡では、A-4号住居出土土器以外にも、後出的要素の強いものを含んでいること
- ④田布施町大崩遺跡では、複合口縁をもつ平底の壺に丸底の壺が被さる土器組が出土し、下膨れ体

周防・長門における弥生時代前半から古墳時代前期前半の上器編年をめぐる研究史と今後の課題  
部の甕や、粗製化した口縁部の長い小型の甕を伴っており、上記が布留式前葉の上器と考えられること

⑤纏向4式には「防長型複合口縁壺」があり、布留1式に編年されていること

山本氏は吹越遺跡A-4号住居出土土器を古墳時代初頭ととらえることで、この地域における初期布留式上器の欠落という難問を解決できるとした。

上記について筆者の考えを述べたい。①については、出土量の多さが時期幅に比例するとは必ずしも言えない。②について、布留式前葉の土器が少ないので実事であるが、これは遺構に伴うまとまった土器の報告例が少ないためであり、実際にはほとんどみられないと言えない。③・④については、基本的には弥生時代終末期におさまる特徴である。⑤について、纏向4式で防長型とされている複合口縁壺は、その形態から「防長型複合口縁壺」ではないと考えられる。以上から、筆者は吹越遺跡A-4号住居出土土器については、周防東部の土器変遷を踏まえ、弥生時代終末期前半に位置づける(田畠2012a)

筆者の編年観では、畠岡遺跡35号段状造構は後期中葉、清水遺跡出土上器は後期後葉から終末期前半、松尾遺跡1号住居出土土器は終末期前半から後半に位置づけられる。また、古墳時代前葉とされた土器のうち、林遺跡SB1出土上器は後期後半から終末期、吉政遺跡SB06出土上器は終末期後半に位置づけられる。

#### 梅木謙一氏による『考古資料大観』の編年と伊予系高杯の検討(2003、2004)

2003年、梅木謙一氏は中国・四国地方の弥生時代前期から中期末の土器を概説し、広域編年を提示した(梅木2003)。編年では前期前半、前期後半、中期前葉、中期中葉、中期後葉の5段階に区分した。編年図では周防・長門は一括されている。このうち、前期前半から中期前葉までは綾羅木郷遺跡出土土器、中期中葉は綾羅木郷遺跡と下東遺跡出土土器、中期後葉は下東遺跡出土土器が図示されている。筆者の編年観では、前期前半とされた綾羅木郷遺跡RIV地区L.N.5420出土上器は梅木氏の前期後半、中期中葉とされた綾羅木郷遺跡GII地区L.N.5611出土土器は中期前葉に位置づけられる。

2004年、梅木謙一氏は、周防の伊予系高杯を集成し、周防の伊予系高杯には伊予からの搬入品、周防で模倣されたもの、その他に者に区別されることから、中期後半には上に搬入が、後期前葉には手法の移動があったことを想定した(梅木2004b)。また、伊予との比較から、明地遺跡SK1出土上器を伊予の第IV様式期(中期III)、中院遺跡SD1出土土器を第V-1様式期(後期I)に位置づけた。一方、梅木氏は伊予系高杯の類似品が下石田遺跡で出土していることから、伊予系土器の分布が府防市域にまで分布することを示唆したが、その後、真尾猪ノ山遺跡で搬入品とみられる伊予系高杯が出土し(谷口・山本2011)、梅木氏の想定が裏付けられた。伊予系高杯は周防と伊予との併行関係を探る鍵となる土器であり、梅木氏の論考はきわめて重要な意味をもつ。

#### 筆者による中期土器の編年と併行関係の検討(2004)

2004年、筆者は、第53回埋蔵文化財研究集会で田畠2001aに基づき、周防西部における中期の土器を中期I～IVに区分する編年案を発表し、長門及び北部九州、伊予中部との併行関係を提示した(田畠2004)。また、須玖I式中段階に併行する中期IIは細分できること、その後半段階にあたる岡山遺跡38号土壇・環濠出土土器、河池遺跡貯藏穴下層出土土器は、壺の形態・文様の近似性から安芸の中山IV式に併行するとした。また、垂下口縁壺B類を中期III～IVに位置づけた。

筆者の編年案に対して、九州の研究者から中期IVには高三瀬式が含まれるのではないかとの指摘があり、中国・四国の研究者からは中期IIIの時期を伊予の中葉III、安芸のIV-2様式の一部にまで引き下げる案が提示された(梅木2004a)。前者については、編年表で中期IVは高三瀬式古段階の一部を含む

ことを提示していたが、指摘を受け、再検討した結果、高二肅式古段階までの土器を含むものと認識を改めている。一方で、周防・長門の須玖式土器と直接の関わりをもつ東北部九州では細分が進んでいないことから、詳細については今後の検討が必要と考える。後者の指摘は文京遺跡SK-1における垂下口縁壺B類と伊予型高环の共伴が根拠と推測される。この資料について、筆者は垂下口縁壺の時期を詳細に確定させることは困難と判断し、中期Ⅲ～Ⅳに位置づけた。周防の中期Ⅲは須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に併行する土器である。一方、伊予の中期Ⅲ、安芸のⅣ-2様式は須玖Ⅱ式新段階に併行するとされるため、文京遺跡SK-1出土土器を伊予の中期Ⅲ、安芸のⅣ-2様式併行とするならば、周防の中期Ⅲを引き下げるのではなく、中期Ⅳに併行させるべきである。また、文京遺跡SK-1出土の垂下口縁壺B類にみられる棒状浮文は、中国・四国地方では須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に併行すると考えられる安芸のⅢ-2様式、伊予の中期Ⅱ新、東予のⅣ-1様式には存在する(柴田2004)、これより後にはみられない。周防においても確実に中期Ⅳに位置づけられる垂下口縁壺B類に棒状浮文はみられない。

改めてSK-1出土土器をみると、共伴した伊予型高环は透かし穴が貫通するタイプであることから、伊予の中期Ⅲでも古相に位置づけられる。また、垂下口縁壺B類は口縁部が欠損した大型壺で、同破片も出土していないことから、周防の中期Ⅲの壺が2次的に使用された可能性がある。本稿では、遺構における共伴関係を重視して文京遺跡SK-1出土土器を周防の中期Ⅳと併行とし、棒状浮文が少量残存するものとしておきたいが、今後の資料による検証を待ちたい。以上から伊予・安芸との併行関係については田畠2004を変更する必要はないと考えている。

#### 石井龍彦氏による周防の中期末から終末期の土器編年(2004)

2004年、石井龍彦氏は周防の中期末から終末期までの土器編年案を発表した(石井2004a・b)。石井氏は、後期をV-1～3期に区分して、各々を古・新に細分し、終末期はV-4期とした。各時期の基準資料を箇条書きで述べる。中期末の基準資料は中院遺跡SD1出土土器、V-1期古相の基準資料は円光寺遺跡第4号土壙、石光遺跡第I地区包含層、下右山遺跡SK990出土土器、V-1期新相の基準資料は、明地遺跡SB32、郷遺跡III地区SB302出土土器である。V-2期古相の基準資料は、追迫遺跡2号住居跡、22号住居跡、29号住居跡、下右山遺跡13次SD221出土土器、V-2期新相の基準資料は、下右田遺跡17次SI1030、古田遺跡本部2号館1号土壙、畑岡遺跡35号段状遺構、下右田遺跡SD260、天王遺跡17号住居出土土器である。V-3期古相の基準資料は、畑岡遺跡22号、29号段状遺構、四割造跡2号堅穴住居跡出土土器、V-3期新相の基準資料は、清水遺跡2号、12号住居跡、9号段状遺構、6号土壙出土土器である。V-4期の基準資料は吹越遺跡A-4号住居、松尾遺跡1号堅穴住居跡、林遺跡SB6、岡山遺跡第II地区第1号台状墓出土土器である。

石井氏が中期末とした中院遺跡SD1出土土器は、前述した伊予系高环の特徴から後期前葉(後期I-1期)に位置づけられる。V-1期は簡素な複合口縁壺が成立する段階とされる。古相と新相を比較すると、後者が新相を呈するが、同一段階でとらえるのが妥当と考える。V-2期は複合口縁壺が成熟し、口縁部形態が多様化とともに、施文パターンが確立される段階とされる。しかし、筆者の編年観では、古相のうち、追迫遺跡2号住居出土土器は共伴する高环の特徴から終末期、追迫遺跡22号住居跡出土土器は器台の特徴から後期後葉、同遺跡29号住居跡出土土器は複合口縁壺の立ち上がりが小さく定型化していないので、V-1期、筆者編年の後期I-2期に位置づけている。また、下右田遺跡13次SD221出土土器は壺の特徴から、筆者編年の後期I-2期に位置づけている。この段階から筒部の中央が膨らむ大型器台が出現するとされるが、共伴関係の分から土器及び西部瀬戸内全体の状況

(松村2008)からその出現は後期後葉とみるべきであろう。また、高环については、口縁部が逆「く」字形のものと畠岡遺跡・清水遺跡等でみられる口縁部に段をもち屈曲するタイプ(石井2004第12図119・125・135・139・144)は別系譜でとらえるべきだと考えている。V-2期新相については、畠岡遺跡35号段状遺構出土土器以外、底部の形態や高环の特徴などから後期後葉から終末期に位置づけられる。なお、清水遺跡6号土器を除くV-3-V-4期の相対的位置づけは筆者と同じであるが、筆者は並・壺の底部形態等から、V-3期新相から終末期に位置づけている。

#### 筆者による長門の土器編年(2006)

2006年、筆者は長門西部における弥生土器編年の概要を発表し(田畑2006a)、同年、長門北東部における中期の土器編年案を発表した(田畑2006b)。いずれも内容は田畑2004に準拠している。

#### 小南裕一氏による前期から中期初頭の編年(2008)

2008年、小南裕一氏は長門西部における弥生文化成立期の集落様相を検討する際に、前期から中期初頭の土器編年案を提示した(小南2008)。編年案では前期をI~V、中期初頭を中期Iに区分した。この編年案は田畑2003a・b、2006bとほぼ一致する。

#### 『講座日本の考古学』の編年(2011)

2011年、柴田昌見氏は中国・四国西部地域の弥生文化を概説した際、広域編年を提示した。編年では、前期をI-1~3様式、中期をII-1~IV-3様式、後期をV-1~4様式、庄内式併行期をVI様式、古墳時代初頭を布留0・前期1に区分した(柴田2011)。編年表では周防・長門は一括され、具体的な説明はないものの、遺構名が提示されている。

柴田氏の編年では主に周防の土器が使用されているが、I-2期、V-2期、VI期、布留0・前期1では、長門の土器が使用されている。注目されるのは、IV-1~3期である。IV-1期とされた小谷遺跡SB03出土土器は、田畑2004では中期III~IVに位置づけた。壺をみると胴部の張らないものが主体を占めるが、詳細な時期比定は困難と考えている。IV-2期とされた下東遺跡(II)1号溝状遺構出土土器、小谷遺跡SB05は中期IVに位置づけた。また、IV-3期とされた土器のうち、小谷遺跡SB10・19出土土器は田畑2004の中期IVに、中院遺跡SD1出土土器は前述の理由から後期I-1期に位置づけている。小谷遺跡SB10・19出土土器は田畑2004の発表後に公表された明地遺跡SK1出土土器(梅木2004b)、開明遺跡SI10出土土器(右川編2013)と比較すると、口縁部が短く、肩部・胴部中位が張りだす壺が主体を占める。ただし、中院遺跡SD1出土の壺にみられるような肩部が強く張る壺が存在せず、共伴する須玖系土器が須玖II式新段階~高三浦式古段階の幅でとらえられる。以上から、周防東部では中期IV(田畑2004)を細分し、明地遺跡SK1出土土器、開明遺跡SI10出土土器を中期IV-1期、小谷遺跡SB10・19出土土器を中期IV-2期に位置づけたい。この他、V-4期とされた吹越遺跡A-4号住居出土土器は高环の形態からVI期に位置づけられる。

#### 筆者による周防の後期から古墳時代初頭の土器編年(2012)

2012年、筆者は周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案を発表した(山畑2012a)。編年では周防西部・東部について、後期から古墳時代初頭までを7段階に区分した。後期I-1期は中院遺跡SD1出土土器、特に伊予系高环の特徴から、中予地域の後期I-1期に併行する段階である。後期I-2期は複合口縁壺の出現期で円光寺遺跡4号土器に代表される。後期II-1期は複合口縁壺が定型化する段階で、畠岡遺跡35号段状遺構出土土器に代表される。後期II-2期は、複合口縁壺の頸部における沈線が激減・消失し、袋状口縁壺、大型器台が出現する段階である。時期幅をもつが清水遺跡第1・2環濠出土土器等に代表される。終末期I期は、壺・壺の丸底

化が進行し、周防西部で角状突起を持つ支脚が出現する段階である。高杯は北九州の高島式に近似した形態をもつ。終末期Ⅱ期は蓋・妻の丸底化がさらに進行し、高杯部の屈曲が失われる段階である。古墳時代前期Ⅰ期は布留系上器、伝統的V様式系を中心とする畿内系上器が出現する段階である。

筆者は前稿(田畠2001c)で、高杯の口縁部が時期が下るにつれて長くなることを重視してきた。しかし、終末期Ⅱ期に位置づけられる山口市朝山墳墓群Ⅷ地区SK9(小南編2009)からは、口縁部が長いもの(田畠2012a図118-11・12)とともに、短い口縁部を持つが、屈曲が緩やかで直線的に外反するもの(田畠2012a図6-9・10)が出土した。以上から、前述した傾向はあるものの、高杯の口縁部が全て長くなるわけではなく、屈曲が失っていくことが重要な指標になることが判明した。また、古田遺跡本部2号館第1号土壇出土土器は終末期前半の土器を主体とする夢前の高島式土器と近似していることが判明した。そこで、上記の変遷観に基づき、前稿で後期末に位置づけた古田遺跡本部2号館出土土器は終末期Ⅰ期を主体とする土器と位置づけを変更した。また、前稿で終末期Ⅰ期に位置づけた防府市下右田遺跡SD240出土土器については、終末期Ⅰ～Ⅱ期の時間幅を持つ資料ととらえ、下関市柳瀬遺跡Ⅰ地区LS001出土土器(濱崎1997)、下関市吉永遺跡Ⅲ-東地区SB-6出土土器(西田ほか1999)については終末期Ⅱ期に位置づけを変更した。古墳時代前期の土器については後述する。

#### 蒲原宏行氏による広域編年(2013)

2013年、蒲原宏行氏は九州から近畿地方までを対象とした弥生土器の併行関係についての論考を発表し(蒲原2013)、既発表の旧単位の編年案を調整した広域編年表を提示した。周防・長門関連では、長門の前期が綾羅木郷遺跡の編年、周防の前期が山本一朗氏の編年(山本1993a)、中期から後期初頭は筆者の編年(田畠2004)、後期中葉から終末は右井龍彦氏の編年(右井2000・2004b)が使用されている。前期、後期から終末期の編年については、前述した編年観の違いがあるため評価は難しい。中期については、蒲原氏が須玖Ⅱ式古段階を中期Ⅳ併行としている点が異なるが、他は概ね妥当と考えられる。

#### 筆者による長門の前期から中期土器の編年(2013)

2013年、筆者は田畠2006bに基づき、長門西部における弥生時代前期から中期後葉の土器編年の概要を提示した。また、九州の高槻式上器、綾羅木式を含めた上器について、綾羅木・高槻系上器と呼称することを提唱した(田畠2013a)。

## 6. 現在に至る編年研究のまとめ

前章では年代をとって、各時代の編年案について述べてきた。1950年代に本格的な編年研究がはじまり、周防では小野忠熙氏による島山川流域の編年(小野1953b)、長門では小山富士雄氏による下関市域の編年(小田1957)が提示された。1960年代になると土井ヶ浜Ⅰ～Ⅳ式が設定され(金闇・坪井・金闇1961)、中野一人氏によりはじめて周防・長門全城を対象とした編年が行われた(中野1962)。続いて、『弥生式土器集成』の編年(金闇1964)、『日本の考古学Ⅲ』の編年(潮見・藤田1966)が提示された。特に『日本の考古学Ⅲ』の編年は当時の研究の到達点を示す内容で、その後に大きな影響を与えた。しかし、上記の編年はいずれも資料不足により、不明確な内容とならざるを得なかつた。特に周防の中期の土器については、土器様相の独自性は認識されていたが、畿内に準じた変遷が想定されたこともその要因であった。

その後、1970年代の大規模開発に伴う発掘調査による資料の増加を経て、『高地性集落跡の研究資料篇』で佐原真氏、小田富士雄氏によって編年と併行関係が検討された(佐原・小田1979、小田1979)。

また、山本一朗氏による編年(山本1979・1981)が提示され、その後の研究に大きな影響を与えた。この頃、長門では綾羅木郷遺跡における編年の概要が提示されたが(伊東1974・1977)、中崩土器は農前と様相が近似していたので、土井ヶ浜I～III式の併行関係に問題はあったものの、前期から中期の土器編年の流れに大きな問題はなかった。しかし、周防では、資料が増加したとはいえ、中期前葉、中期末(中期IV)の資料が少なかった関係上、縄文文、回線文を施す土器も僅少であったことから畿内編年<sup>11,16</sup>が適用できず(山本1996)、土器様相の把握が困難であった。これに連動して、現在中期中葉に位置づけられる縄文文を施した垂ドロ縁壺A類を後期の複合口縁壺にみられる縄文文と連づけて中期末に位置づけたことは(山本1979・1981、小野1985等)、原ノ辻上層式(高三溝式)を畿内のIV様式に併行させる当時の編年観と合わせて、中期の位置づけに問題を残し、その解消は1990年代後半にまで持ち越された。

1980年代になると綾羅木郷遺跡の報告書刊行により、綾羅木編年の詳細が明らかにされた(伊東編1981)。また、山陽自動車道建設に伴う島田川流域の弥生集落の調査成果に基づき、1990年代にかけて石井龍彦氏(石井1990)、乗安和二三氏(乗安1988・1989・1990a・b)、山本一朗氏(山本1993b)による後期から終末期の編年案が提示された。一方、中村友博氏(中村1993)、乗安和二三氏(乗安1995・1999)により、現在の編年観に直結する論考や編年案が提示されたほか、土井ヶ浜I式の壺など、前期末に位置づけられることもあった内折口縁I式が中期前葉に盛行することが明らかとなった(村岡編1989・宝川編1992、山本1993a)。1990年代から2000年代にかけては、それまで後期に位置づけられることが多かった吹越遺跡A-4号住居出土土器が庄内式併行期に位置づけられるようになったほか(山本1993b・田畠2001c・右井2004b)、畿内系土器の多くが古墳時代前期から出現することが明らかになりつつある(田畠2012a)

2000年代に相次いで刊行された概説書等で提示された編年では、資料や研究の状況を反映してか、周防・長門は一括されること多かった(大久保2002、梅木2003、柴田2011)。しかし、近年では、乍々蓄積される資料をもとに、編年や併行関係について具体的に考察した論考が相次いで発表されている(右井2000・2004b、田畠2004・2012a、山本2003・2005、苗原2013)。

## 7. 各時期の編年観と今後の課題

### 前期から中期前葉(前期I～I中期I期)

以下では、一部重複するが、研究史に触れつつ編年観と今後の課題について述べる。

長門における最古の弥生土器として、中ノ浜遺跡出土の壺が板付I式に遡る可能性が指摘されてきた<sup>17</sup>。しかし、小壺のみであり、他器種の内容が不明である点に問題が残る。延行条里遺跡では、刻目突帯文土器から弥生土器への移行状況を示す資料は存在するが(下條1990)、包含層資料であるため、詳細は定かではない。このほか、角島・沖山遺跡から刻目突帯文土器と板付Ib式～IIa式土器が出土しているが、造構に伴うものではなく、両者の関係は不明である(古川2000、田畠2003a)。

周防では最古の弥生土器として小路遺跡12号溝出土土器(豆谷1995)が知られているが、遺跡の位置する山口盆地では最終末の刻目突帯文土器がほとんど出土していないため、両者の関係は不明である。周防東部では、造構に伴わないものの、上関町山ノ浦遺跡で刻目突帯文土器、初期遠賀川式土器が出土している(右井ほか2007、谷口ほか2011)。

筆者は綾羅木I式とされた土器のうち、E III地区L.N.9出土土器以外は綾羅木II式とされた土器と同段階に位置づけられると考えている(田畠2003b)。綾羅木郷遺跡では、珪砂採掘に伴う緊急発掘という

経緯から、遺物の層位的な取り上げを行えなかった遺構が少なからず存在する(伊東編1981)。上記の点を含め、近乍(東ほか2013など)及び今後の調査による綾羅木編年再検討が必要であろう。

前期後葉の長門西部の土器は、小山氏の論考(小山1957)以来、高槻式と呼称されることがある。近年、石井龍彦氏は長門・豊前の土器を含めた総称を高槻式とし、長門の土器を「綾羅木型」、豊前の土器を「豊前型」と呼んでいる(石井2008)。しかし、長門では綾羅木郷遺跡の調査により綾羅木式が設定され、石井氏により、高槻式との相違点が明らかとなっている(石井1984)。また、豊前では高槻式、長門では綾羅木式の名称が定着している関係上、総称として高槻式の名称を使用すると、どうしても豊前の土器をイメージしてしまうため、筆者は総称を綾羅木・高槻系土器とし、豊前の土器は高槻式、長門の土器は綾羅木式と呼称することを提唱した(田畠2013a)。なお、この段階は、小田富士雄氏により、周防灘文化圏とでも称しうる文化小期が設定できると指摘されている(小田1979)。これはこの段階に限らず、全時期にあてはまる重要な指摘である。

長門において上井ヶ浜I式に代表される内折口縁をもつ大型壺は、早くに小田富士雄氏が中期に下る可能性を指摘していたが(小田1957)、前期末同様に貝殻施文による加飾されることや併行関係を知る資料がなかったため、1980年頃までは前期末に位置づけられることもあった(金沢1980)。その後下七見遺跡(村岡1989、宝川1992)の発掘調査で綾羅木III式系統の土器、城ノ越式土器、櫛描文土器が共伴することが判明し、その位置づけがほぼ確定した。この段階については、宝川昭男氏(宝川1992)、小南裕一氏(小南2007)等によって細分されることが指摘されている。中期前葉においては、綾羅木郷遺跡の位置する川中地域では城ノ越式土器が主体で内折口縁土器が少ない。一方、下七見遺跡が位置する田部盆地では、内折口縁土器の分布の中心域である。この地域は前期中葉から前期後葉まで下関市域を中心に分布する山形重弧文の分布の中心域であり、独自の地域色を保持していた。一方、長門北東部では前期後葉から中期中葉にかけて湯免式壺が分布している(山岸2001b)。

周防西部では、中郷貝塚出土土器を除くと、中期前葉の資料がきわめて少なかったため、東部を含めて櫛描文がほとんど存在しないと考えられていたが、1985年に西遺跡で櫛描文を施文した壺の出土が報告され(菅波1986)、1990年には赤堀遺跡で櫛描文と貝殻施文をもつ壺の胴部片の出土が報告された(増野ほか1990)。また、上東遺跡の調査(山岸編2001)により多数の良好な資料が得られた結果、周防西部では中期前葉に櫛描文が一定量存在することが確定的となった。なお、周防では前期後葉から中期前葉にかけて阿方式の影響がみられることが早くから指摘されていたが(潮見・藤田1966)、資料の増加に伴い筆者が検討した結果、綾羅木式をベースにしつつ、壺・壺の胴部に多条沈線を、壺の胴部に連鎖状突帯を施すなど、阿方式の具体的な影響が明らかとなった(田畠1999)。

周防東部では、前期後葉から中期前葉の遺跡の調査事例が少ない。山ノ浦遺跡(石井編2007)からは貝殻施文と連鎖状突帯をもつ壺、林遺跡SD19(尾崎編1993)からは櫛描文を施文する壺が出土しており、阿方式の強い影響下にある土器群の存在が推測される。

#### 中期中葉(中期Ⅱ期)

長門西部では、須恵I式中段階に併行する達賀川以東の須恵系土器がみられるが、資料は少ない。一方、下七見遺跡では内折口縁土器がみられるなど、前段階の要素を残した土器がみられる。周防では1990年代前半まで、櫛描文をもたない垂下口縁壺A類がこの段階に位置づけられてきたが、『島山川』の編年(小野1953b)以来、中期末に位置づけられてきた櫛描文をもつ垂下口縁壺A類も基本的にはこの段階に位置づけられることが判明した(乘安1995)。また、内折口縁土器の一部(図55-9~11)は後期の複合口縁土器につながる新しい属性を備えた土器と評価されたこともあったが(中野1984、山本1

周防・長門における弥生時代から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題  
993など)、該当する土器の多くはこの段階に属すると考えられる。

筆者はこの段階は古相・新相に細分でき、新相には中山IV式の壺に近似し、口縁部がより発達し、櫛描文により顕著に加飾するタイプが出現することを指摘した(山畠2004)。本稿では古相をII-1期、新相をII-2期と呼称する。併行関係については、かつて佐原真氏・小田富士雄氏により、須玖I式-土井ヶ浜II・III式-中山IV式の併行関係が示されたが(佐原・小山1979)、土井ヶ浜II式は須玖I式新段階へ須玖II式古段階の土器であるため、土井ヶ浜III式とともに次段階(中期III期)に位置づけられる(田畠2013a)。

#### 中期後葉(中期III~IV期)

古相(中期III期)、新相(中期IV期)に大別される。古相は垂下口縁壺B類が出現する段階である。長門西部では、土井ヶ浜III式のような瀬戸内系土器もみられるが、基本的には須玖系土器単純組成となる。一方、周防西部では須玖系土器と垂下口縁壺B類が共伴することが判明している。中野一人氏らにより須玖II式-中山IV式(中野・吉瀬1979、中野1983・1984)の併行関係、山本一朗氏(山本1979・1981)、小野忠熙氏(小野1985)により、須玖II式-周防6式-畿内III様式後半の併行関係が示され、中村友博氏(中村1993)によって垂下口縁壺B類が須玖II式及び回線文土器と同時性があることが指摘された。筆者の編年観では、古相は須玖I式新段階へ須玖II式古段階及び畿内III様式後半に併行する伊予中部の中期II新、安芸のIII-2様式が併行する(山畠2004)。また、頭部の貼付突帯上に棒状浮文をもつ垂下口縁壺B類は、中国・四国地方の類例(柴田2004)から、ほとんどが古相に属すると考えられる。

新相は須玖系土器が増加する段階である。かつては袋状口縁壺が分布しないことから須玖系土器が衰退するとされたこともあったが(山本1979・小野1985)、資料が増加した結果、この段階が最盛期であることが判明した。長門西部においては、須玖系土器単純組成を基本とすることが知られてきた。近年の資料を踏まえると、①響灘沿岸部の遺跡では、袋状口縁壺、動尖口縁壺、斐柄(有馬2005)など、遠賀川以西の須玖系土器が分布すること、②須玖系土器の分布は周防西部を東限とするが、ここでは主に遠賀川以東の須玖系土器が分布すること、③前段階までと異なり、須玖系土器のみが出土する遺構が多くなることを指摘できる。この段階の垂下口縁壺B類の類例は少ないが、口縁部の山形文、頭部の貼付突帯は保持するものの、口縁部が水平に近くなったりや、口縁部内面の貼付突帯をもたないものなど、前段階の装飾性が失われたものが増加するようである。また、この段階には近年の資料から回線文土器及び折衷土器のほか、伊予系高杯が少量みられることが判明した(梅木2004b、石川編2013)。

新相は須玖II式新段階から高三瀬式古段階の土器を含む。長門においては、宮ヶ久保遺跡A溝上層出土土器や北追貝塚出土土器で須玖II式新段階へ高三瀬式古段階の土器を含む。周防西部においては、下東遺跡(II)1号溝出土土器や古田遺跡第1地区A区不整形のピット出土土器は須玖II式新段階の土器を含む。前述のように新相のうち、周防東部では小谷遺跡SB10、19出土土器にみられる胴部の張り出しが顕著になった壺は新しい段階に位置づけられると考えている。新相は須玖II式新段階へ高三瀬式古段階と中予のIV様式、安芸のIV-1・2様式に併行すると考えられるが、九州においても須玖II式土器と高三瀬式との割分案には諸説あり、確定していないため(平2004)、詳細は今後の検討が必要である。

#### 後期前葉(後期I-1~2期)

周防・長門の後期から終末期の編年は、前述のように主に1980年代に調査された周防東部の島田川流域における弥生遺跡の調査成果をもとに、1980年代末から1990年代にかけてその骨格が提示され

た。

後期前葉は古相（後期Ⅰ～Ⅰ期）、新相（後期Ⅰ～Ⅱ期）に大別され、高三瀬式新段階との併行関係が考えられる。長門では古相の様相は不明確であるが、須恵系土器が激減し、山陰系・瀬戸内系土器の流入が顕著となるようである。特に長門北東部ではこの段階以降、山陰系土器が顕著に存在する（尚下1986）。周防西部では良好な資料がない。周防東部で基準資料となる中院遺跡SD-1出土土器は中期末に位置づける説もあるが（石井2004a・b）、伊予系高坏から、中予地域の後期Ⅰ～Ⅰ期に併行すると考えられる。

新相になると、周防東部ではこの段階に口縁部に凹線、頸部に多条沈線をもつ瀬戸内系長頸壺がみられる。かつては、垂下口縁壺が複合口縁壺に変化すると考えられていたが（中野1977、山本1979・1982）、出現期の複合口縁壺が頸部や口縁部の立ち上がりに沈線をもつことから、筆者はこれらの良頸壺をベースに北部九州の袋状口縁系壺の影響を受けて、複合口縁壺が成立したと考えている（田畑2012a）。

#### 後期中葉から後葉（後期Ⅱ～Ⅰ～Ⅱ期）

後期中葉は複合口縁壺が定型化する段階である。長門北東部では、羽場遺跡SB4・8から下大隈式古段階併行の複合口縁壺が出土しており、基準資料とされてきた（乗安1989・1990a・b）。その後、長門西部では船頭遺跡V地区SD24出土土器（谷口ほか1995）からも下大隈式古段階併行の壺が出土している。この段階から終末期にかけて、周防と伊予を中心として近似した複合口縁壺が分布することから、筆者は上記の複合口縁壺を「防予系複合口縁壺」と呼称することを提唱している（田畑2012a）。近畿地方や山陰地方などへの搬出品の詳細を明らかにするためにも、今後、固有の地域色を抽出し、細分を進める必要がある。

周防西部では良好な資料がない。周防東部では、畠岡遺跡35号段形状構出上土器を標識とする。上記を清水遺跡出土土器と同段階とする説があるが（乗安1990a）、複合口縁壺の複合口縁部、頸部に多条沈線を持つ点に後期前葉からの系譜を追えること、以上の点が中予地域の後期Ⅱ～Ⅰの複合口縁壺に近似していることから、この段階に位置づけられる（田畑2012a）。

後期後葉において、長門西部・周防西部では良好な資料に欠けるが、高島式に近似した高坏が存在するため、高島式に近似した土器群の存在が予想され、下大隈式新段階との併行関係が考えられる。筆者はこの段階以降の高坏は時期が下るにつれ、口縁部の外反が進んで肩曲が失われることが編年指標になるとを考えている（田畑2012a）。

周防東部において、後期後葉は1960年代後半には複合口縁壺が出現する段階（潮見・藤田1966）、1970年代末から1980年代にかけては複合口縁壺が定型化する段階とされ、「吹越式」・「吹越式上土器」とも呼ばれてきた（山本1979・1981）。複合口縁壺の頸部に沈線を持つものがきわめて少なくなり、頸部は無文か1条の貼付突帯を持つものが主体となる。なお、大型器台についてはその出現をさらに遅らせる説もあるが（石井2004b）、出現するのは後期後葉と考えられる。

#### 終末期（終末期Ⅰ～Ⅱ期）

古相（終末期Ⅰ期）・新相（終末期Ⅱ期）に大別される。長門西部・周防西部では、高島式土器に近似した上土器から古相が西新町式古段階の大半と、久住猿雄氏の編年（久住1999）のIA期、後半が西新町式土器新段階の大半とIB期に併行すると考えられる。周防西部では「佐波型複合口縁壺」（山本1981）が古相に出現する。周防東部では、古相は2段階に細分でき（田畑2012a）、前半が清水遺跡9号段遺構、2号、12号住居出土土器等、後半に吹越遺跡A-4号住居出土土器が位置づけられる。吹越

遺跡A-4号住居出土上器については、①後期末(山本1979・1981、中野1984、乗安1990b)、②庄内式併行期(吉田1985、山本1993、石井2004、田畑2012a)、③古墳時代初頭(山本2003・2005)に位置づける案が出されている。①については、庄内式併行期に畿内系上器の存在を想定していたことからくる案で、②、③については、独自の土器様相を考慮しての案であるが、前述の通り②が妥当と考えられる。また、吹越遺跡A-4号住居出土上器のイメージがあまりに強いが、この段階には大型壺などにさらに複数タイプが存在するようであり、今後の資料の増加が待たれる。なお、島田川上流域に位置する清水遺跡では、口縁部に段を持つ独自の高杯が分布しており、他地域と高杯で比較することが困難であるため(田畑2012a)、今後中・下流域の遺跡の資料による検証が必要であろう。

新相は、高杯部の屈曲がほぼ失われる段階であるが、次段階以降の土器との識別が課題である。また、この段階以降、長門北部以外でも山陰系土器が顕著にみられるようになるが、時期的にまとまった資料が少ないため、その分布状況(高下1986)についてはさらに検討する必要がある。

#### 古墳前期(I-1~3期)

布留系土器に代表される畿内系土器が出現する段階である。前稿(田畑2012a)では久住氏編年のII A～II B期に併行する段階としていたが、大区分としてII A～II C期、西新町式新相の一部から柏山式古相(田崎1983・1996b)、畿内の布留0～I式に併行する段階と訂正したい。

周防・長門においては、畿内系上器は伝統的V様式系、布留系が主体で庄内系が少ないと判明している。伝統的V様式系の甕はかつては終末期(II A式併行期)に位置づけられていたが(乗安1990b、山本1993)、確実に終末期に位置づけられる遺構から出土しておらず、多くはこの段階に出現するとみられる。また、湯田楠木町遺跡出土土器はII A式併行期に位置づけられてきたが(山本1981・1993等)、近乍の再検討でこの段階に属することが判明した(田畑2000b・2012b)。

長門西部ではこの段階のまとまった資料として、吉永遺跡III-東地区SB5出土上器(西山編1999)、周防西部では湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器(田畑2012b)がある。両者からとはいざれも伝統的V様式系の甕が出土している。久住氏によれば、伝統的V様式系の甕は概略的には①平底→②丸底→③丸底でタタキメをナデ消すものに変遷するので、これに従えば、吉永遺跡III-東地区SB5出土土器の甕は①であるためII A期併行、湯田楠木町遺跡上器捨て場出土上器は②が多いため、主体はII B期併行の土器である。なお、長門西部では下七見遺跡II地区SD2、武久川下流域糸里遺跡南西隅土器溜より(上山編2004)から①・②を含む土器が出土している。前者は時期幅をもつとみられるが、後者は出土状況と小さな平底・丸底をもつ甕と終末II期と近似した高杯がみられることから、II A期併行の土器が主体と考えられる。また、壺・甕の形態、調整等からII C期併行と考えられる資料として、吉永遺跡III-東地区SB3出土上器(西山編1999)、秋根遺跡LK091出土上器(伊東・山内編1977)がある。

周防東部ではこの段階の資料は僅少であったが、近乍報告された開明遺跡SI2出土土器(石川編2013)では、布留系甕のほか小さな平底を持つ伝統的V様式系の甕がみられることからII A期併行の上器が主体と考えられる。また、山本一朗氏(山本2003・2005)が古墳時代前葉とした林遺跡SB3出土土器は、量は少ないものの、小型丸底壺の形状からII C期併行と考えられる。

以上のように、この段階は久住氏の編年に対応する土器が存在する。また、甕は伝統的V様式系が多いことから、その変遷を押さえることが重要である。ただし、各地域で明確に変遷が確認できず、特に複合口縁壺など在来系土器の変遷が不明確である点に問題が残る。地域や遺跡により跋行性が存在することも想定しなければならない。以上から、今後の資料の増加を踏まえてさらに検討する必要があるが、II A～II C期併行期を各々古墳前期I-1期、I-2期、I-3期としておきたい。

## 8. おわりに

以上、周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題について述べてきた。これまで多くの研究者が試行錯誤を重ねた研究成果が、現在の編年観に反映されており、その経緯はきわめて複雑であった。改めて先行研究に深い敬意を表したい。残された課題は多いが、本稿が今後の研究に生かされれば幸いである。なお、紙幅の都合により、参考文献のうち、上記で述べた論考で引用されている報告書の一部は掲載を割愛した。

## 謝辞

本稿執筆にあたっては下記の諸氏・諸先生・諸機関にお世話になりました。末筆ながら記して感謝いたします。また、本稿を東哲志氏、豆谷和之氏、山本一朗先生の御壇前に捧げます。

石井龍彦、岩崎仁志、梅木謙一、梅崎恵司、久住猛雄、古賀信辛、小林善也、小南裕一、杉原和恵、山崎博之、中村友博、西岡義貴、乗安和二三、松岡睦彦、村山裕一、岩国市教育委員会、下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人顎学ミュージアム、防府市教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、山口市教育委員会、山口大学人文学部考古学研究室

## 【註】

- 1) 口頭発表資料については全てを掌握していないため、一部を除いて言及していないことをご寛恕願いたい。
- 2) 森本氏は弘律史文氏の資料(弘律1929)と自身の踏査資料から、長門の弥生土器を古・新に分類できると指摘した。
- 3) 周防・長門は西部灘内地方として安芸・伊予と一括され、A-Cの3様式に分けられた。筆者の掲示観では、A様式は前期後葉から中期中葉、B様式は中期中葉から中期後葉、C様式は後期中葉から後葉に位置づけられる。また、この段階ではC様式は中期(畿内:様式後半～四様式併行)とらえられていた。
- 4) 小野氏は古墳時代の一帯についても「土師式前期」、「中期」に細分している。このうち「土師式前期」の土器には、筆者の視点で古墳時代前期から中期の土器が含まれる。
- 5) 金闇想氏も同様な指摘をしている(金闇1964)。
- 6) 図53のうち、図53-5、13は図示されていないが、金闇1964から該当すると考えられる土器がほぼ特定できるので、同書から引用した。また、図53-9、12、14は金闇1964の図を引用した。
- 7) III式はIII-1、2、3に細分されると指摘したが、この段階で具体的な説明はなかった。
- 8) 佐原氏は後藤木IV式の併行關係について「初期櫛文と後藤木IVとの平行關係は、なお直接的には証明できていない。両者の共存關係は近い将来、からずや長門・周防・石見・安芸のいずれかにおいて証明されるだろう。」と述べた(佐原1979)。
- 9) III式で短頭無文壺とされたもの一部が相当する。
- 10) III期とされる18号土壙出土土器、36号土壙出土土器は図を見る限り、時期幅をもつ土器を含んでいる可能性がある(菅波第33図26、第47図25～27など)。そのため、その妥当性については再検討が必要であろう。
- 11) 吉田1985a・bについては、掲載誌が簡易図版であったことなどから、本稿執筆まで未見であった。これまで言及できなかつたことをお詫びする。
- 12) 長門西部では、臨海部の小規模な平野が形成過程にあったこと(高橋2003・2008)が大きな要因と考えられる。これまでの発掘調査成果をみると、川中平野、川棚平野、古永平野、十井ヶ浜遺跡が位置する江尻下地区の低地部では中期中葉以降になると、終末期から古墳時代前期に至るまで集落遺跡はほとんど存在しない。
- 13) 近藤・乗安2000では乗安1996のII-bo、II-bn期はそれぞれ、II-b古、II-b新期と表記が改められた。
- 14) 出瀬2012aではこの種の高環を「く」字で縦と誤記していた。記してお詫びする。

- 15) 久住猛雄氏より高島式の標識構造である高島追跡第2号構出土十士器は時期幅があるとの教示を受けた。ただし、筆者は田畠2012aで青田追跡本部2号館第1号土坑出土土器と比較した際、高坏については終末期前半に位置づけられると考える。
- 16) 山本一朗氏は「山口県(周防家著者注)では、唐古第四様式に該当する中期後葉の土器を分離することは今も昔も困難である」としたが(川本1996)、筆者の編年觀では、該当資料がきわめて少なかったとするのが正しいと考えている。
- 17) 金闇・大阪府立弥生文化博物館編1995での討論(同書P214~215)中で余間想氏・橋口達也氏によって述べられている。
- 18) 山本氏は吹送壺跡A-4号出土土器を含む9式を纏向1式併行ととらえていた(川本1979・1981)。現在の編年觀では纏向1式は庄内式古朴の一郎を含むが、山本氏は10式を庄内式併行期としていたため、ここに含めた。
- 19) 久住猛雄氏のご教示による。
- 20) 久住猛雄氏のご教示による。

#### 参考文献

- 有馬啓介2005「下関市豊北町宮迫神田追跡の大堀廻形土器」『山口考古』第25号 山口考古学会
- 石井龍彦1981「高倅式土器について」山口大学人文学部考古学研究室編『西部瀬戸内における弥生文化の研究』
- 石井龍彦1990「第5章 まとめ」『石光遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第124集
- 石井龍彦2000「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」『陶埴』第13号 山口県埋蔵文化財センター
- 石井龍彦2004a「周防部の弥生後期前葉の土器について—郷追跡出土土器をめぐって』『海続の地域史—水島松夫追悼集—』水島松夫追悼集刊行会
- 石井龍彦2004b「山口県東部(周防)の弥生時代後期の土器について」『陶埴』第17号 山口県埋蔵文化財センター
- 石井龍彦編2007『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター報告第59集
- 石井龍彦2008「第四編第三章 本州西邊に花開いた土器文化」『山口県史』通史編 原始・古代 山口県
- 石川彰編2013『開明追跡・尼尻追跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第81集) 田布施町埋蔵文化財調査報告第3集)
- 池田吾文1979「II 山口県中央部の弥生遺跡(1)」『山口県の弥生式土器一集成と編年一』周陽考古学研究所
- 伊東照雄1977「山口県西部の弥生式土器ー北浦沿岸を中心として」『山口考古』第6号 山口考古学会
- 伊東照雄・山内紀嗣編1977『秋根遺跡』下関市埋蔵文化財調査報告22
- 伊東照雄編1981『絞糸木部追跡!』下関市埋蔵文化財調査報告書27
- 伊東照雄1983「山口県北浦沿岸の弥生土器」『山口考古創立10周年記念特集号』山口考古学会
- 伊藤実1992「備後地域 正岡聰夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編」木耳社
- 伊藤実1996「安芸」『古代学協会四国支部松山大会資料弥生後葉の灘が内海』古代学協会四国支部
- 伊藤実2001「安芸(西条盆地)地域の庄内期の土器様相」『庄内式土器研究XXV』庄内式土器研究会
- 岩崎仁志2008「第四編第七章第二節 十器にみる文化の交流」『山口県史』通史編 原始・古代 山口県
- 上山佳彦編2001『武久川下流域奈良遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第42集
- 梅木謙一1996a「複合口縁蓋の動態ー西部瀬戸内における地域圏の成立と展開ー」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部
- 梅木謙一1996b「伊予」『古代学協会四国支部松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部
- 梅木謙一2000「伊予中部地域 葦原康大・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年』四国編」木耳社
- 梅木謙一2001「伊予中部の十器」『庄内式土器研究XXIV』庄内式土器研究会
- 梅木謙一2002「伊予・西防山土の細長頸縁複口縁蓋について」『山口考古』第22号 山口考古学会
- 梅木謙一2003「第2章 中田・四国地方の土器」武束純一・右川昌出志編『考古資料大報 弥生・古墳時代土器 I』小学館
- 梅木謙一2004a「四国の弥生中期中葉～後期前葉の土器」『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行關係 種表要旨

- 岡田・長門における弥生時代から古墳時代前期の土器編年をめぐる研究史と今後の課題  
集』理研文化財研究会
- 梅木謙一2001b『周防出土の伊予望杯』『海鮮の地域史—水島魯夫追悼集—』水島魯夫追悼集刊行会
- 梅崎恵司1996『東北部九州—北豊前』『古代学協会四国支部松山人会資料・弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部
- 梅崎恵司2005『東北部九州の弥生時代中期から後期前半の土器—須玖式土器の終焉—』(財)北九州市芸術文化振興財団  
埋蔵文化財調査室研究紀要』第19号
- 大久保徹也2002『第2章 中国・四国地方の土器』赤塚次郎編『考古資料大観・弥生・古墳時代土器II』小学館
- 岡本健児1982『伊予・周防灘沿岸地域における中期中葉の弥生土器—柳井田・天王八系列の土器について—』『賀川光夫先生  
遷跡記念論集』賀川光夫先生遷跡記念論集編集委員会
- 岡本健児1981『西国の弥生土器の編年と年代』『高地性集落と倭國大乱』雄山閣
- 尾崎雅一編1993『林遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第159集
- 小野忠熙1953a『第Ⅱ章 岡山遺跡』小野忠熙編『島田川』山口大学島田川遺跡学術調査会
- 小野忠熙1953b『第V水第1節』土器の分類』小野忠熙編『島田川』山口大学島田川遺跡学術調査団
- 小野忠熙1956『墓・塚遺構を有する一古代村落址の研究』『山口大学教育学部記念論文集』
- 小野忠熙1958『山口県下関市経糸本弥生式遺跡』『考古学雑誌』第43巻4号 日本考古学会
- 小野忠熙・張昭忠・中野一人・藤田等1968『北近畿遺跡』宇部市教育委員会
- 小野忠熙編1979『高地性集落跡の研究 資料篇』学生社
- 小野忠熙1985『山口県の考古学』吉川弘文館
- 小田富士雄1957『長門下関周辺の弥生土器』(小田富士雄1983『九州考古学研究 弥生時代篇』所収)
- 小田富士雄1976『高島遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会
- 小田富士雄1979『北九州と西部瀬戸内における弥生土器編年』小野忠熙編『高地性集落跡の研究 資料篇』学生社
- 赤本春次1979『出土遺物』井上武彦・赤本春次編『下関市寺町遺跡』(廣川湯元遺跡)山口県埋蔵文化財調査報告第47集
- 金間大介・坪井清足・金間透1961『山口県土井ヶ浜遺跡』日本農耕文化の生成』日本考古学協会
- 金間透1964『山陰地方I』小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成 本編I』東京堂出版
- 金闇惣1980『北浦における弥生前期の社会』『日本民族文化とその周辺—考古篇』新日本教育図書
- 金闇惣・大阪府立弥生文化博物館1995『弥生文化の成立 大変革の土作は「鴨紋人」だった』角川選書
- 蒲原弘行2013『西日本における弥生土器類様式の併行関係』柳田康徳編『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
- 河島清・前田耕次1987『岡山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第99集
- 木太久守1990『豊前北部における板付II式土器の再検討』『研究紀要』第4号 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査  
室
- 久住猛雄1999『北部九州における庄内式併行系の土器類』『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会
- 高下洋一1986『山口県出土のいわゆる山陰系土器について』Relics 第3号 山口大学人文学部考古学研究室
- 国分直一ほか1974『鹿嶋会議糸木郡跡調査の十年』国分直一ほか編『えとのす』第1号 新日本教育図書
- 小林行雄・森本六爾編1939『弥生式土器集成圖録』東京考古学会学報第1冊
- 小南裕一編2007『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第60集
- 小南裕一2008『長門西部地域における弥生文化成立期の集落様相』『阿根』第21号 山口県埋蔵文化財センター
- 小林行雄・永末雅雄・藤岡謙二郎1943『人和唐古弥生式遺跡の研究』奈良県史跡名勝天然記念物調査会報告第16冊 奈良県  
近藤義一・桑田和三2000『弥生前期の土器文様』『山口忠史 資料叢書考古学』山口県
- 佐原寛1964『土器の相対年代』鶴間町文化財保護委員会編『紫雲出』貞賞社
- 佐原真・小田富士雄1979『IV-1北九州と畿内の弥生土器編年』小野忠熙編『高地性集落跡の研究資料篇』学生社

- 國語・長門における弥生時代から古墳時代後期前半の上器・漆器をめぐる研究史と今後の課題  
佐原真1979「IV-3級内弥生土器から見た西・東の弥生土器」小野忠雄編『高進性集落時の研究資料篇』学生社
- 潮見浩・藤田等1966「弥生文化の発展と地域性—中国・四国」『日本の考古学III』河出書房
- 柴田昌児2004「伊予東部の中期後半弥生土器の動態」第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会
- 柴田昌光2011「二、中・四国西部地域」甲元廣之・寺武薰編『講座日本の考古学5 弥生時代(上)』青木書店
- 下條信行1990「縄文晚期—弥生初期の上器」下関市教育委員会編『淡路木川下流域の地域開拓史』
- 下條信行1991「松山平野と道後城北の弥生文化」松山市教育委員会編『松山大学構内遺跡』
- 下條信行1993「西部瀬戸内における山岸型弥生土器の様相」坪井清さんの古稀を祝う公報『鷺苑考古学』天山会
- 菅波正人1986「2 弥生時代前期末～中期初頭の土器群について」山口市埋蔵文化財調査報告第21集
- 瀬尾周三1992「安芸地域」正岡隆大・佐本岩雄編『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社
- 間川尚功1976「畿内進跡の古式土師器」『畿内』奈良県埋蔵考古学研究所
- 高橋学2003『平野の埋蔵考古学』古今書院
- 高橋学2008「第一編第四章 原始・古代の環境変化・土地開拓・災害」『山口県史』通史編 原始・古代 山口県
- 田崎博之1983「古墳時代初頭前後の氣前地方」『史蹟』第120号 九大史学会
- 田崎博之1996a「基礎資料:各地域における弥生時代後期土器の様相」古代学協会四国支部編『古代学協会四国支部松山大会資料弥生後期の瀬戸内海』
- 田崎博之1996b「筑前」古代学協会四国支部松山大会資料「弥生後期の瀬戸内海」古代学協会四国支部
- 田崎博之1996c「南豊前」『古代学協会四国支部松山大会資料「弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部
- 田崎博之1998「IV 九州系の土器からみた圓底文系土器の時間的位置」下條信行編『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』
- 田崎博之2000「壺形土器の伝播と受容」『美濃文と遠賀川』土器持者会論文集刊行会
- 宝川昭男編1992「下七兄遺跡II」菊川町教育委員会
- 谷口哲一編2011『田ノ浦遺跡II』山口県埋蔵文化財センター報告第74集
- 谷口哲一・山本寛子2011「真尼塚の山遺跡第I地区出土土器(補遺)」『陶埴』第21号 山口県埋蔵文化財センター
- 田嶋直彦1999「縄羅木式土器と阿方式土器」『山口大学文学会誌』第40号 山口大学文学会
- 田嶋直彦2000a「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突安文と遠賀川』土器持者会論文集刊行会
- 田嶋直彦2000b「付篇III 山口市湯田舎木町遺跡出土の古式土師器」『山口大学構内遺跡調査研究年 XIV』山口大学埋蔵文化財資料館
- 田嶋直彦2001a「V 考察2 下東・下東灘跡群の土器編年」田嶋直彦編『下東遺跡弥生時代遺物編』山口県埋蔵文化財調査報告第77集
- 田嶋直彦2001b「湯免式壺について—角島・沖田遺跡出土土器の新資料ー」『山口考古』第21号 山口考古学会
- 田嶋直彦2001c「周防・長門における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究X-XV』庄内式土器研究会
- 田嶋直彦2003a「長門北浦地域における弥生文化の成立」立命館大学考古学論集第1回 立命館大学考古学論集刊行会
- 田嶋直彦2003b「山陰地方における縄羅木式土器の展開」『山口大学考古学論集』山口大学考古学論集刊行会
- 田嶋直彦2004「周防・長門における弥生中期の土器と並行関係」第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会
- 田嶋直彦2006a「山口県島田川流域の弥生集落—中流域遺跡群を中心として—」『日本考古学会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学会2006年度愛媛大会実行委員会
- 田嶋直彦2006b「磐瀬沿岸の弥生土器」『第11回土井ヶ浜シンポジウム合併記念 暮瀬沿岸の弥生時代 資料集』

- 岡田・長門における弥生時代中期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題
- 田嶋直彦2006c「長門北東部における弥生時代中期土器の様相」『やまぐち学の構築』2
- 田嶋直彦2012a「周防西郷・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』山口大学埋蔵文化財資料館
- 田嶋直彦2012b「湯田横木町遺跡」『山口市史 史料編 考古・古代』山口市
- 田嶋直彦2013a「弥生土器からみた十井ヶ原弥生人」『立命館大学考古学論集VI』立命館大学考古学論集刊行会
- 田嶋直彦2013b「延行条里塗跡出土の初期產賀式土器について」『山口考古』第33号 山口考古学会
- 坪井清是1961「山口県豊浦郡豊北町土井が浜遺跡の土器」小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成資料編2』日本考古学協会
- 寺沢薰1986「畿内古式土師器の編年と2・3の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49 奈良県立橿原考古学研究所
- 中野一人1960『山口県の弥生式土器集成図録』
- 中野一人1962「弥生式土器からみた山口県の文化領域」『考古学研究』第9卷3号 考古学研究会
- 中野一人1965「山口県の弥生文化－弥生式土器の変遷－」『山口県地方史研究』第13号 山口県地方史学会
- 中野一人1972「本州西端地域の古式土師器資料(第一報)」『山口県立博物館研究報告』第2号 山口県立博物館
- 中野一人1977「弥生式土器からみた山口県域の地域性」『山口考古』第6号 山口考古学会
- 中野一人1983「河津と井上山」『山口考古創立10周年記念特集号』山口考古学会
- 中野一人1984「山口県域の弥生十器の地域性」『高地性集落と倭國大乱』雄山閣
- 中村友博1993「柳田式の壺形土器」『古文化談義』第30巻上 九州古文化研究会
- 西田宏編1999『吉永遺跡(Ⅲ・東地区)』山口県埋蔵文化財センター調査報告第10集
- 乗安和二三・吉瀬勝康編1979「井上山」防府市都市開発公社
- 乗安和二三1988「防長・弥生時代後期土器編年」『山口考古学談話会発表資料収集者未見
- 乗安和二三1989「Vまとめ」『羽揚道路・片山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第121集
- 乗安和二三1990a「第7章まとめ」『畠岡遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第125集
- 乗安和二三1990b「山口県(防長地域)」『瀬戸内の弥生後期十器の編年と地域性』古代学協会四国支部
- 乗安和二三1995「山口県東部地域弥生時代中期土器の編年」『山口考古学談話会発表資料』
- 乗安和二三1996「山口県の前期弥生土器」『山口考古学談話会白鶴記念大会 西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生十器の結相～』山口考古学談話会白鶴記念大会実行委員会
- 乗安和二三1999「山口県西端地域の弥生後期土器編年表」(試案)『九州弥生土器研究会資料』
- 濱崎真二1997「柳瀬塗跡出土の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器」『柳瀬遺跡』下関市埋蔵文化財調査報告60
- 原田光朗1999「下右田遺跡第9・10・13・14・15・17次発掘調査概報」防府市教育委員会
- 東哲志ほか2013『続糸籠縄文台地遺跡(中尾敷地)他)発掘調査報告書』下関市文化財調査報告書34
- 半美典2001「弥生中期土器の併行關係の現状と編年の問題－北部九州における中末後初の移行期をめぐって－」『九州考古学』第79号 九州考古学会
- 弘津史文1928『防長・弥生式土器図集 先史時代之前』
- 弘津史文1929『防長石器時代資料』山口高等学校郷土史研究会
- 藤田等1968「宇部の弥生文化－弥生式土器を中心として－」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会
- 富士塙勇輔1976「上原遺跡 発掘調査報告」菊川町教育委員会
- 古庄浩明2000『角島・沖田遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第18集
- 古庄浩明2001「突厥文から綾羅本式へ」『法政考古学』第27集 法政考古学会
- 前島高徳1979「I 岩国市南河内 竹安塗跡出土の弥生土器」『山口県の弥生式土器－集成と編年－』岡田考古学研究所

- 岡田・長門における弥生時代から古墳時代前期前半の上器編年をめぐる研究史と今後の課題  
松村さと重2008「西都瀬戸内における弥生時代器台の展開について—伊予地方を中心に」下條信行編『妙見山1号墳—西都瀬戸内における初期前方後円墳の研究』愛媛大学考古学研究室
- 松本岩雄1992「出雲・紀賀地域」(正岡龍夫・松本岩雄編)『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社
- 豆谷和之1993「吉田遺跡第1地区A区山上の弥生時代中期後半の上器について」『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅠ』山口大学埋蔵文化財資料館
- 豆谷和之1995「山口県弥生土器集成Ⅰ—山口市小路遺跡山上の前期弥生土器—」『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅢ』山口大学埋蔵文化財資料館
- 三戸田晃司ほか1985『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第82集
- 村岡和雄編1989『下七見遺跡Ⅰ』荒川町教育委員会
- 村岡和雄編1998『宮ヶ久保遺跡』山口県阿東町埋蔵文化財調査報告第1集
- 森本六爵1930「長門発見の一獣生式土器」『考古学』1卷第3号 東京考古学会
- 森本六爵・小林行雄編1938『獣生式土器集成圖録』東京考古学会報第一冊 東京考古学会
- 山口県教育委員会編1961『山口県文化財概要第4集 埋蔵文化財』
- 山口県教育委員会編1979『下右内遺跡第3次調査報告』山口県埋蔵文化財調査報告書第46集
- 山本一朗ほか1972『高地作集落 柊越遺跡第2次調査概要』平生町教育委員会・山口県教育委員会
- 山本一朗1977「山口県東部の弥生式土器」『山口考古』6号 山口考古学会
- 山本一朗1979「Ⅲ 防長の獣生式土器」『山口県の弥生式土器—集成と編年』周陽考古学研究所
- 山本一朗1981「防長の土師器」『山口県の土師器・須恵器—集成と編年—』周陽考古学研究所
- 山本一朗1982「防長複合口縁盡の系譜」『考古学研究』第29巻第2号 考古学研究会
- 山本一朗1993a「山口県東部(周防)弥生前期土器編年」『古文化談叢』第30集(上) 九州古文化研究会
- 山本一朗1993b「山口県東部(周防)弥生後期土器編年」『考古論集—潮見清先生追憶記念論文集』潮見清先生追憶記念事業
- 山本一朗1993c「防予地城の弥生土器寸考」『遺跡』第34号 遺跡刊行会
- 山本一朗1996「山口県の弥生土器研究」『山口考古学研究会百回記念大会 西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生土器の諸相～』山口考古学研究会百回記念大会実行委員会
- 山本一朗2003「吹越式の難問題」『山口考古』第23号 山口考古学会
- 山本一朗2005「吹越式の再検討」『考古論集(川越哲志先生追憶記念論文集)』川越哲志先生追憶記念論文集刊行会
- 山本博1935「西日本弥生式問題」『考古学雑誌』25卷10号 日本考古学会
- 山本博1935b「西日本弥生式問題(其二)」『考古学雑誌』25卷12号 日本考古学会
- 吉瀬勝康1983「山口県統羅木郷遺跡出土の弥生式土器」『関西大学考古学研究室開設参賀周年記念考古学論叢』
- 吉瀬勝康1996「周防・長門」『古代学協会四国支部山人大会資料 弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部
- 吉田寛1985a「庄内式併行期前後の西部瀬戸内(1)吹越A式に関するノート」『Relics 创刊号』山口大学人文学部考古学研究室
- 吉田寛1985b「庄内式併行期前後の西部瀬戸内(2)湯田横木町遺跡山上土器に関するノート」『Relics 第2号』山口大学人文学部考古学研究室
- 渡辺一雄編1985『上みがえる弥生のムラー突抜・馬場遺跡ー』山口県埋蔵文化財調査報告第87集

表 12 編年表

時代	時期	小時期	北部九州 (田崎 1983-1996a 1998-2000)	北部九州 (久住 1999)	周防・長門 (本稿)	中予 (梅木2000-2001 2004a)	安芸 (妹尾1992)	出雲 (松本1992)
弥生時代	前期	前葉	板付I式 新段階		I-1			
		中葉	板付II式 古段階		I-2		I-1	I-1
		後葉	板付II式 中段階		II	I-2	I-2	I-2
					III-1	I-3	I-3	I-3
			板付II式 新段階		III-2	I-4	I-4	I-4
	中期	前葉	城ノ越式 (須歎I式古)		I	II	II	II
		中葉	須歎I式 中段階		II-1			
		後葉	須歎I式 新段階		II-2	III(古)	III-1	III-1
			須歎II式 古段階					
			須歎II式 新段階			III(新)	III-2	III-2
			高三輪式 古段階		IV-1		IV-1	IV-1
					IV-2		IV-2	IV-2
		前葉	高三輪式 新段階		I-1	V-1古	V-1古	
	後期	中葉	下大膳式 古段階		I-2	V-1新	V-1新	V-1
		後葉	下大膳式 新段階	後期後葉新相	II-1	V-2	V-2	
		前半	西新町式 古段階		II-2	V-3	V-3	V-2
		後半	西新町式 新段階	I A	I	V-4古 (III-1)	V-4	V-3
				I B	II	V-4新 (III-2)	V-5	V-4
古墳時代	前期	前半	有田式 古段階	II A	I-1			
			有田式 新相	II B	I-2	III-3		
			柏田古相	II C	I-3			



## 報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくmaiぞうぶんかざいしりょうかんねんぽう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	－平成22年度－
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	8
編著者名	田畠直彦 横山成己 川島尚宗 松浦暢昌
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 Tel083-933-5035
発行年月日	西暦2014年(平成26年)3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 47秒	131度 27分 60秒	20100720～ 20100728	20m <sup>2</sup>	教育学部研究実験棟 B棟改修工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 55秒	131度 27分 56秒	20101220～ 20101224	12m <sup>2</sup>	音楽サークル棟新設工事
山口大学 医学部構内遺跡	山口県宇部市 小串1丁目1-1	35202		33度 57分 44秒	131度 15分 02秒	20100510～ 20100601	125m <sup>2</sup>	医学部附属病院患者用 ・職員用立体駐車場建設工事
山口大学 医学部構内遺跡	山口県宇部市 小串1丁目1-1	35202		33度 57分 41秒	131度 15分 07秒	20110111～ 20110214	156m <sup>2</sup>	地域医療教育研修センター 新設工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落跡	弥生	落ち込み・溝	弥生土器	
吉田遺跡	集落跡				
山口大学 医学部構内遺跡	散布地			土師器・瓦質土器 陶器・磁器・埴輪	
山口大学 医学部構内遺跡	散布地			縄文土器・弥生土器 土師器・乳頭器・哨音 瓦質土器・陶器・磁器	



山口大学埋蔵文化財資料館年報  
－平成22年度－

平成26年3月31日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

